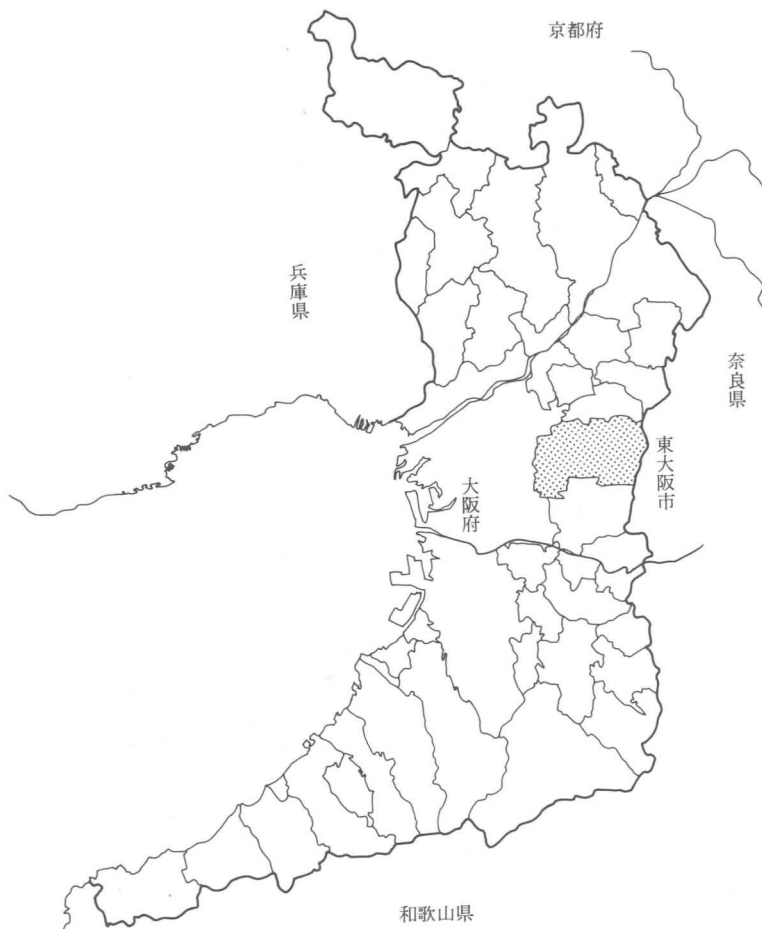


鬼虎川遺跡第12次発掘調査報告



1987. 3

財団法人 東大阪市文化財協会
東大阪市教育委員会

はじめに

鬼虎川遺跡は昭和38年に発見されて以来、既に33次に及ぶ発掘調査が実施され、多大な成果を得るとともに、全国的にも有数の弥生時代遺跡として知られるに至りました。特に、近畿日本鉄道東大阪線の建設に伴う発掘調査は、断片的な理解にとどまっていた当遺跡において、初めて全容を解明する糸口となりました。今回刊行することができました鬼虎川遺跡第12次発掘調査報告は、方形周溝墓群の発見を契機として、集落の範囲と墓域の推定が可能となり、今後の調査に大きな指針を与えたものであります。調査終了以来、長期間にわたる整理中に増加した各地の新資料は膨大な数にのぼりますが、そのなかの一つとして弥生時代研究の一助になれば幸いと存じます。

調査、整理について多大なる御指導、御協力を頂いた大阪府教育委員会文化財保護課をはじめ、関係諸機関、諸氏に感謝の意を表すとともに、今後とも一層の御指導、御鞭撻をお願い申し上げます。

昭和62年3月

財団法人 東大阪市文化財協会
理事長 木 寺 宏

例 言

1. 本書は、東大阪生駒電鉄株式会社（現近畿日本鉄道株式会社）が建設を進めた東大阪都市高速鉄道東大阪線計画事業に伴う鬼虎川遺跡第12次発掘調査報告書である。
2. 本調査は、東大阪市遺跡保護調査会が、東大阪生駒電鉄株式会社の委託を受けて実施し、その後の整理作業は同調査会より国道308号線関係遺跡調査会を経て、財団法人東大阪市文化財協会が一切を引き継いで実施した。
3. 現地調査は、大阪府教育委員会の指導のもとに、次の分担により昭和55年7月21日より12月20日まで合同調査として実施した。

調査指導並びにA～D地区担当

松岡良憲（大阪府教育委員会文化財保護課技師）

北野 重（現柏原市教育委員会）

E～H地区担当

上野利明（東大阪市教育委員会文化財課）

才原金弘（東大阪市教育委員会文化財課）

調査・整理補助員

山崎京子 籠谷嘉彦 竹下彰子 貴治基子 野々村恵理 稲岡靖恵 高橋圭子

森田実 白神典之 西原清美 砂金映子 藤本隆 安井誠次 古元秀雄 橋本栄治

畑雅彦 浜田洋一 吉倉敬 谷川光朗 有山淳司 浦元秀俊 山本廣司 野原浩一

宮元敦司 石原康弘 高石俊哉 小梅聖 青野正彦 鯨島武信 室谷勝美 関敏広

亀川達繁 杉山秀子 富田知代 山中順子 岡本明子 玉岡伸枝 中澄幸彦

澤田秀彦 上野聖二 山口靖弘 落合信生 本田圭子 岡村多美子 今井喬子（順不同）

4. 発掘調査及び整理は、次の事務局体制により実施した。（役職名は当時のものである。）

東大阪市遺跡保護調査会（昭和55年7月21日～昭和56年1月31日）

理事長 秀平勇造（東大阪市教育委員会教育長）

事務局長 渡辺嘉晴（東大阪市教育委員会文化財課課長）

事務部長 小川 満（東大阪市教育委員会文化財課主幹）

調査部長 原田 修（東大阪市教育委員会文化財課主任）

財団法人東大阪市文化財協会（昭和57年4月以降）

理事長 木寺 宏（東大阪市教育委員会教育長）

事務局長 寺澤 勝（東大阪市教育委員会社会教育部参事）

庶務部長 小川 満（東大阪市教育委員会文化財課主幹）昭和58年4月まで

吉田照博（東大阪市教育委員会文化財課課長代理）昭和61年8月まで

下村晴文（東大阪市教育委員会文化財課主任）現在

庶務部 安藤紀子（東大阪市教育委員会文化財課）
調査部長 原田 修（東大阪市教育委員会文化財課主査）
調査部 上野節子（財団法人東大阪市文化財協会）
小西優美（財団法人東大阪市文化財協会）

5. 調査における土色名は、農林省農林水産技術会議事務所監修・財団法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帖』に準じた。
6. 本書の執筆は、本文目次に記し、編集は上野が行なった。
遺構写真は各担当者が、遺物写真は上野が行ない、落合、山口が補助した。
人骨の実測、トレースは浦元が行なった。
7. 本書の作成にあたって、島地 謙氏（京都大学名誉教授）、林 昭三・伊東隆夫両氏（以上京都大学木材研究所）、那須孝悌・樽野博幸・宮武頼夫・日浦 勇（故人）各氏（以上大阪市立自然史博物館）、多賀谷 昭・安部みき子両氏（大阪市立大学医学部）より玉稿を賜った。記して謝意を表するとともに、早くより原稿を頂きながら、編集者の怠慢により今日まで刊行できなかったことを深くお詫び申し上げます。
8. 昆虫遺体を担当して頂いた日浦 勇氏は、昭和58年に御逝去された。ご在世中に刊行できなかったことを深くお詫び申し上げ、ご冥福をお祈りする。
9. 調査の実施にあたっては、大阪府教育委員会、東大阪生駒電鉄株式会社、大日本土木株式会社の御協力を頂いた。記して深謝する。

本文目次

I. 調査に至る経過	上野	1
II. 位置と環境	上野	2
III. 調査の概要		
1. 調査の方法	上野	4
2. 基本層序	上野	6
3. A～D地区の調査	松岡・北野	9
4. E～H地区の調査	才原・上野	13
5. 出土遺物		
1) 弥生土器	才原	25
2) 古墳時代の土器	小西	26
3) 石器	小西	26
4) 土製品	小西	26
5) 骨製品	小西	27
6) 木製品	才原	28
IV. まとめ	才原・上野	35
V. 鬼虎川遺跡第12次調査出土の人骨および犬骨について	多賀谷・安部	38
VI. 鬼虎川遺跡より出土した棺材の樹種	島地・林・伊東	45
VII. 鬼虎川遺跡より出土した根材の樹種	島地・林・伊東	49
VIII. 自然史関係の遺物		
1. 動物遺体	樽野	52
2. 植物遺体	那須	53
3. 昆虫遺体	宮武・日浦・那須	54
遺物観察表	小西	56

挿 図 目 次

第1図	鬼虎川遺跡周辺遺跡分布図(1/25000)	3
第2図	地区割図(1/900)	4
第3図	鬼虎川遺跡周辺地区割図および調査地点位置図(1/2500)	5
第4図	基本層序概略図	7
第5図	溝11断面図(1/40)	9
第6図	溝9断面図(1/40)	9
第7図	木棺墓実測図(1/10)	12
第8図	第2号方形周溝墓第1主体部実測図(1/10)	13
第9図	第2号方形周溝墓第2主体部実測図(1/10)	14
第10図	第2号方形周溝墓埋葬犬骨実測図(1/10)	15
第11図	第2・3号方形周溝墓盛土断面図(1/80)	15
第12図	第4号方形周溝墓主体部実測図(1/10)	16
第13図	第5号方形周溝墓第1主体部実測図(1/10)	(17・18)
第14図	第5号方形周溝墓第2主体部実測図(1/10)	19
第15図	第5号方形周溝墓断面図(1/80)	19
第16図	第6号方形周溝墓主体部実測図(1/10)	20
第17図	第6号方形周溝墓盛土断面図(1/40)	21
第18図	土壇墓実測図(1/15)	22
第19図	溝15断面図(1/40)	22
第20図	溝16断面図(1/40)	23
第21図	溝15・16掘削時の排土断面図(1/40)	23
第22図	溝13断面図(1/40)	24
第23図	石器・土製品・骨製品実測図(1/2)	27
第24図	木製品実測図(1/6)	29
第25図	木製品実測図(1/4)	31
第26図	木製品実測図(1/4)	33
付図1	A・B地区遺構図・上層(1/80)	
付図2	C・D地区遺構図・上層(1/80)	
付図3	A～D地区遺構図・下層(1/80)	
付図4	E・F地区遺構図(1/80)	
付図5	G・H地区遺構図(1/80)	

表 目 次

第1表	頭蓋骨計測値表	43
第2表	四肢骨計測値表	44
第3表	棺材樹種一覽	45
第4表	動物遺体出土一覽	52
第5表	植物遺体出土一覽	53
第6表	昆虫遺体出土一覽	55

図 版 目 次

図版1	弥生土器実測図	
図版2	弥生土器実測図	
図版3	弥生土器実測図	
図版4	弥生土器実測図	
図版5	弥生土器実測図	
図版6	弥生土器実測図	
図版7	弥生土器実測図	
図版8	弥生土器実測図	
図版9	弥生土器・須恵器・土師器実測図	
図版10	遺構 (C・D地区)	1. 木棺墓 2. 第1号方形周溝墓
図版11	遺構 (A・B地区)	1. 溝11遺物出土状況 2. 溝11遺物出土状況
図版12	遺構 (C地区)	1. C地区最終遺構面 2. C地区最終遺構面
図版13	遺構 (A地区)	1. 土塚1 2. 土塚1
図版14	遺構 (A地区)	1. 焼土塚2 2. 焼土塚1
図版15	遺構 (E地区)	1. 第2～4号方形周溝墓 (東より) 2. 第2～4号方形周溝墓 (南より)
図版16	遺構 (E地区)	1. 第2号方形周溝墓 (南西より) 2. 第3号方形周溝墓 (北より)
図版17	遺構 (E地区)	1. 第2号方形周溝墓第1主体部 (南より) 2. 第2号方形周溝墓第1主体部 (西より)
図版18	遺構 (E地区)	1. 第2号方形周溝墓第1主体部 (人骨細部)

2. 第2号方形周溝墓第1主体部(人骨細部)
- 図版19** 遺構(E地区) 1. 第2号方形周溝墓埋葬犬骨(南より)
2. 第2号方形周溝墓埋葬犬骨(東より)
- 図版20** 遺構(E地区) 1. 第2号方形周溝墓第2主体部(北より)
2. 第2号方形周溝墓第2主体部(東より)
- 図版21** 遺構(E地区) 1. 第4号方形周溝墓主体部(南より)
2. 第4号方形周溝墓主体部(西より)
- 図版22** 遺構(E地区) 1. 第3号方形周溝墓鋤出土状況
2. 第2号方形周溝墓溝内甕出土状況
- 図版23** 遺構(F地区) 1. 第5号方形周溝墓(東より)
2. 第5号方形周溝墓(北より)
- 図版24** 遺構(F地区) 第5号方形周溝墓第1主体部
- 図版25** 遺構(F地区) 1. 第5号方形周溝墓第1主体部上蓋検出状況
2. 第5号方形周溝墓第1主体部(北より)
- 図版26** 遺構(F地区) 1. 第5号方形周溝墓第1主体部(北より)
2. 第5号方形周溝墓第1主体部(東より)
- 図版27** 遺構(F地区) 1. 第5号方形周溝墓第1主体部(人骨細部)
2. 第5号方形周溝墓第1主体部(人骨細部)
- 図版28** 遺構(F地区) 1. 第5号方形周溝墓第2主体部(北より)
2. 第5号方形周溝墓第2主体部(東より)
- 図版29** 遺構(G地区) 1. 第6号方形周溝墓(南より)
2. 第6号方形周溝墓(西より)
- 図版30** 遺構(G地区) 1. 第6号方形周溝墓(西より)
2. 第6号方形周溝墓溝内甕出土状況
- 図版31** 遺構(G地区) 1. 第6号方形周溝墓主体部(南より)
2. 第6号方形周溝墓主体部(北より)
- 図版32** 遺構(H地区) 1. 土塚墓(北より)
2. 土塚墓(人骨細部)
- 図版33** 遺構(H地区) 1. 土塚墓内壺出土状況
2. 土塚墓最終状況
- 図版34** 遺構(F地区) 1. 溝12(西より) 2. 溝12(東より)
- 図版35** 遺構(G・H地区) 1. 溝15・16排土の凹み 2. 溝14(北より)
- 図版36** 遺構(F地区) 1. 溝15(西より) 2. 溝15(東より)
- 図版37** 遺構(G・H地区) 1. 溝16(西より) 2. 溝16(東より)
- 図版38** 遺構(E・F地区) 1. E地区根株 2. 溝15左岸の根株

I. 調査に至る経過

鬼虎川遺跡は昭和38年に発見されて以来、現在までに33次に及ぶ調査が実施されている。発見時には弥生時代中期の土器、石器が多数出土したことが伝えられている。その後、昭和41年には木棺の底板、側板が採集されている。本格的な発掘調査は昭和51年にガス管理設工事に先立つ第1次より第3次の調査に始まる。この調査では、遺構とともに畿内第Ⅱ～Ⅲ様式の土器が出土し、また、保存状態の良い木製品が多量に出土したことが注目される。これは、今後の当遺跡における調査方法について大きな問題点を提起した。

さらに、昭和53年には水道管理設工事に伴う事前調査が開始され、1100㎡に及ぶ調査地域より、膨大な量の遺物が出土した(第4～6次)⁽¹⁾。集落の北端に当たる地点であったものの、畿内第Ⅰ様式中段階の土器が含まれ、前期より続く畿内でも有数の大規模な集落となる可能性がうかがわれた。

このように、鬼虎川遺跡の様相が解明されるなかで、昭和46年の都市交通審議会の答申による鉄道建設計画が進められることになった。この計画は、近畿日本鉄道奈良線生駒駅より分岐する新たな鉄道路線で、国道308号線を通る大阪市営地下鉄中央線との相互乗り入れである。また、同時に阪神高速道路東大阪線の延長が含まれている。昭和53年には東大阪生駒電鉄株式会社(現近畿日本鉄道株式会社)が設立され、埋蔵文化財の取り扱いについて大阪府教育委員会、東大阪市教育委員会との事前協議が進められた。

事前協議では、計画路線が鬼虎川・西ノ辻遺跡の北端に当たること、また、他の地域においても新たな遺跡の存在が予想されることが唱えられ、広範囲にわたる試掘調査の必要性が提起された。その結果、昭和54年12月より東大阪市長田～恩智川間の約1.8kmにおいて、遺跡確認調査(水走遺跡第1次発掘調査)⁽²⁾を東大阪市遺跡保護調査会により実施した。また、引き続き鬼虎川遺跡第12次発掘調査を昭和55年7月より開始することとなった。調査にあたっては、東大阪市遺跡保護調査会の調査体制の不備から、大阪府教育委員会の指導を求め、調査区域を分担して合同調査の形で実施した。



東大阪線開通後の鬼虎川遺跡周辺(南西より)

II. 位置と環境

鬼虎川遺跡は東大阪市西石切町、弥生町一帯にかけて広がる弥生時代中期を中心とした遺跡である。今回の調査地点は東大阪市西石切町5丁目にあたり、国道308号線の分離帯内にあたる。また、鬼虎川遺跡のほぼ北限にあたる位置と考えられる。

当遺跡の現地表面における標高は、調査範囲東西端でO.P.+6.5~8mを図る。現状での微地形は、調査区西端よりやや急な傾斜をもって高くなり、調査区の東約30mの地点でさらに緩やかな傾斜に変わる。そして標高20m付近より生駒山の西麓へと移る。

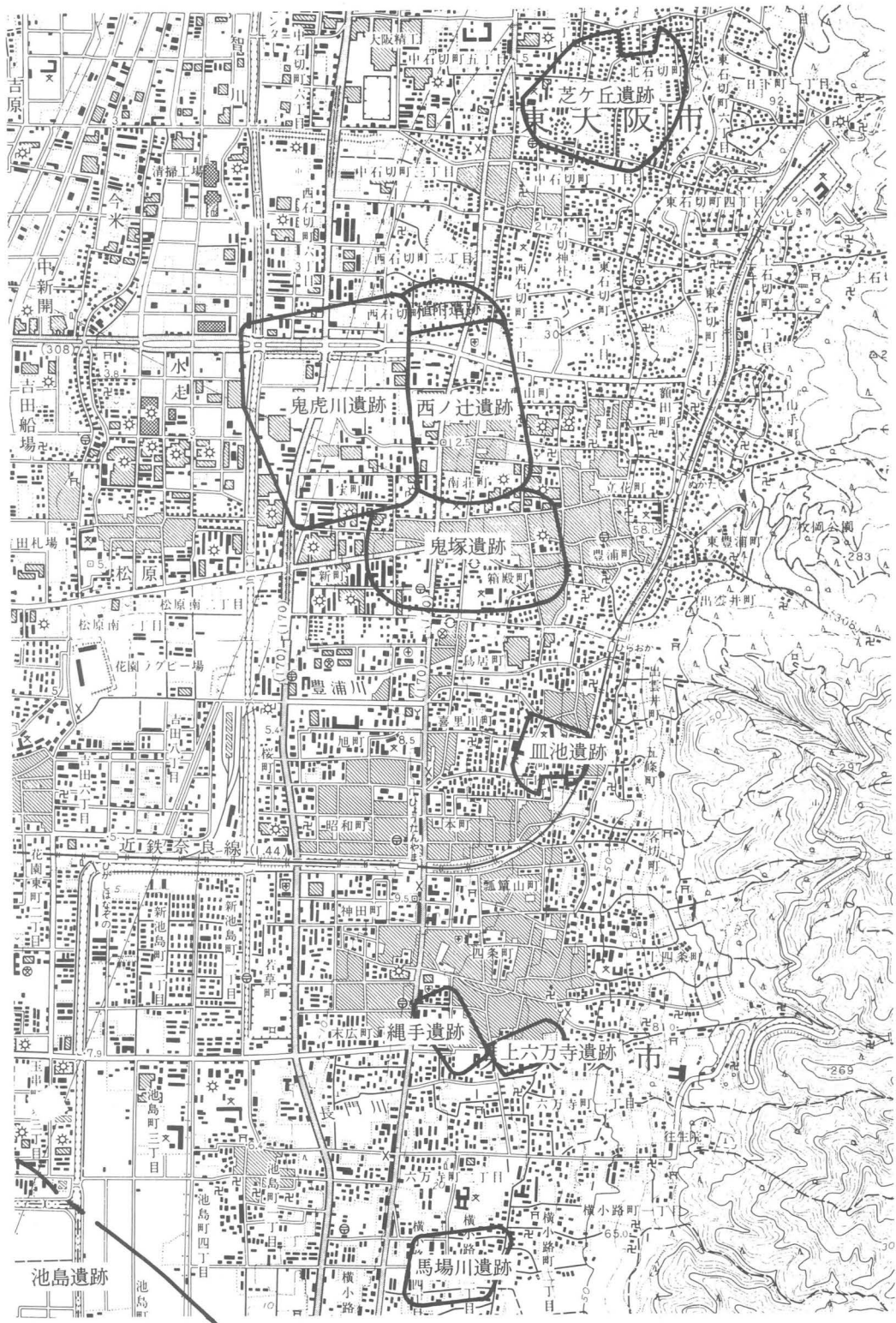
調査地点の東にみられる、この傾斜の変化する地点は、東大阪市の山麓のほぼ全域で認められ、南北に長く続く地形である。昭和59年に実施された鬼虎川遺跡第25次調査では、この地点において縄文時代の前期の海蝕崖が発見され、その西方の下部には海性の堆積物があり、上部には潟湖性の堆積物が認められる。海蝕崖の東方は中位段丘と考えられている。現状の地形に表われた傾斜の変換点は海蝕崖を挟んでの堆積物の違いが影響した結果と考えられる。

したがって、鬼虎川遺跡は潟湖性の堆積土の上に立地し、河内潟・河内湖⁽³⁾の縁辺部にその集落の中心があったと考えられる。

当遺跡の東限は、鉄道、道路敷の調査という限定から、明らかではない。しかしながら、この範囲で観察する限り、東方に位置する西ノ辻遺跡との間には弥生時代の遺構の空白地帯が存在しているのが認められる。また、西ノ辻遺跡が中位段丘面に立地すること、鬼虎川遺跡が畿内第Ⅲ様式の中頃を中心として営まれたのに対し、西ノ辻遺跡がそれ以降を中心としていることなどを考え合わせると、北端における遺跡の範囲が今回の調査地点付近に求められるのではなかろうか。

両遺跡の、範囲と時期差からみた関係は、西ノ辻遺跡の集落関係の遺構が確認されていないため明らかではない。しかし、両遺跡の関係を考えるうえで花粉分析、地層観察の結果から重要な事実が指摘されている。畿内第Ⅳ様式頃に大量の土砂の流出があり、その原因を東方に広がる森林の開発・荒廃に求めることができるのではないかと指摘⁽⁴⁾である。この森林開発の初源を鬼虎川遺跡の発展期に求めることができるとすれば、開発による洪水等の増大が、河内湖縁辺部に居住することを困難にし、中位段丘面、すなわち西ノ辻遺跡へ、さらに高所へと移動する原因の一端となった可能性が考えられよう。最近の調査では縄文時代晩期に始まる自然河川が検出され、奈良時代にまで河川の利用、規制が行われていることが明らかになっている。今後、河川内の堆積状況の観察を通じて明らかにされることであろう。

周辺の弥生時代遺跡としては、北より芝ヶ丘、植附、鬼塚、皿池、縄手、上六万寺、池島遺跡等が挙げられる。この中で、鬼塚遺跡は前期より後期に至る全期間を通じて存続しているが、他の遺跡は中期、後期の単一時期である。また、池島遺跡は鬼虎川遺跡の立地条件に近く、今後、遺跡の立地および移動を考えるうえで重要な資料を提供するものであろう。

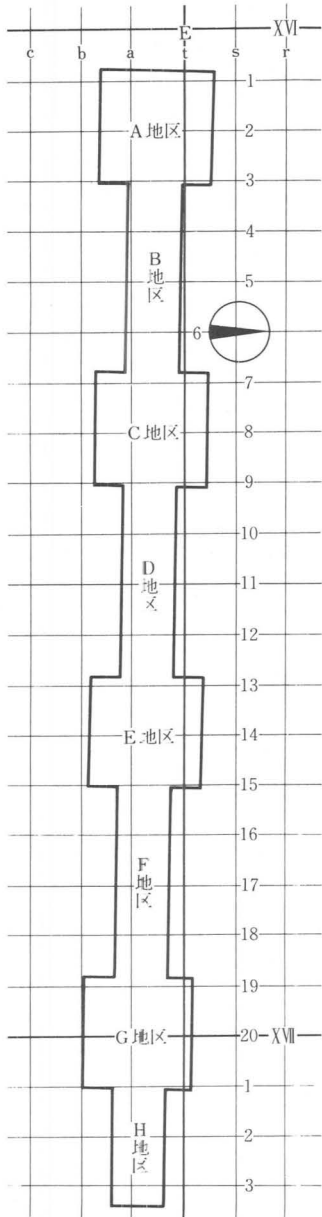


第1図 鬼虎川遺跡周辺遺跡分布図(1/25000)

III. 調査の概要

1. 調査の方法

今回の調査地点は、国道170号線より東の国道308号線中央分離帯内にあり、東西約120mにおよぶ細長い範囲である。工事計画部分は橋脚4ヶ所であったが、遺構の状態により設計変更が考えられていたため、各橋脚間を含めて調査範囲を設定した。調査面積は1124m²である。



調査に当たっては、昭和54年に実施した東大阪市長田・恩智川間の遺跡確認調査（水走遺跡第1次発掘調査⁽⁵⁾）の結果により設定した、国土座標に準拠する地区割を使用した。この地区割は、東大阪市川中（X=-146.3、Y=-29.9）を起点とし、100m方格を大区画とし、東西方向（Y軸）を東へⅠ・Ⅱ・Ⅲ・・・、南北方向（X軸）を南へA・B・C・・・として、東南隅の交点を地区名とした。さらに大区画を細分し、5m方格を小区画として、大区画と同一方向にY軸を1・2・3・・・、X軸をa・b・c・・・とした。したがって、最小区画の表示は、調査区東北隅でXⅧF4aとなる。

また一方では、調査の簡便化を図るため、調査範囲を西からA地区～H地区と仮称した。本報告では、遺構実測図には正式地区名を記載したが、本文中の記述は遺構の性格より考えて、仮称地区名を使用した。

調査の方法は、上層を機械掘削し、土層観察を行った後、下層を各層毎に精査した。各層の掘削に当たっては、鬼虎川遺跡第4・5次調査⁽⁶⁾で明らかになった基本層序に基づいて実施することとした。

また、水走遺跡第1次調査に引き続き、土層観察、動植物遺体、微化石花粉等の調査を含めた総合的な発掘調査を目的とした。これは、大阪市立自然史博物館第四紀研究室に調査協力を依頼し、同研究室那須孝悌、樽野博幸両氏を中心とする自然史調査班の参加を得て行なわれた。

しかしながら、A～D地区を大阪府教育委員会、E～H地区を東大阪市遺跡保護調査会担当とする合同調査の形態をとったため、上記の総合的な調査、あるいは、土層観察等の面で不統一な結果が生じている。報告書作成の遅れとともに、調査、編集担当として自省すべきことをここに記しておきたい。

第2図 地区割図(1/900)

2. 基本層序

鬼虎川遺跡の基本層序は、第4次、第5次調査で確立されている⁽⁷⁾。また、既に報告された第7次調査報告では、さらに追加修正が行われている⁽⁸⁾。しかしながら、今回の調査では、調査地点が離れていることや、各層が東方に向かって収斂しているために、堆積状況が異なっている点が多く、任意の層番号を使用している。したがって、従来の基本層序との対応関係を示す必要から、各層の後に既報告の層番号を付した。第4次、第5次、第7次調査との対応関係は「(7-13)、(7-16U)」と表示している。また、A・F地区では、第19次調査が隣接して実施されている⁽⁹⁾ため、同様に各層の対応関係を示した。

上層については、第12、13層まで機械により掘削し、断面の観察を行なったため、各層の堆積時期、遺構等については不明であるが、第19次調査を参考に、対応関係が明確な層に限り記述した。

第1層：暗青灰色(10B G2.5/1)シルト質粘土。中～細礫多量に含む。

第2層：オリーブ黒色(7.5 Y3/1)粘土。極粗粒砂混じる。

第3層：オリーブ黒色(5 Y3/1)シルト混じり粘土。

第4層：灰色(10Y3.5/1)粘土、暗緑色(5 G2.5/1)粘土ブロックを含む暗緑灰色(10G3/1)粘土の混合。

第5層：暗青灰色(10B G3.5/1)粘土、灰色(5 Y3.5/1)粘土の混合

第6層：暗緑灰色(5 G3/1)粗粒砂混じり粘土。暗緑灰色(5 G2.5/1)粘土ブロック含む。

第7層：暗青灰色(5 B G3/1)粘土。細礫～粗粒砂を多量に含む。青黒色(5 B2.5/1)粘土ブロック含む。

第8層：暗緑灰色(10G3.5/1)粘土。

第9層：暗緑灰色(10G3/1)粗粒砂混じり粘土。

第10層：暗緑灰色(10G3/1)粘土。暗緑灰色(10G3/1)植物遺体混じり粘土ブロック多量に混じる。

第11層：暗灰色(N2.5/0)シルト質粘土。中礫少量、粗粒砂多量に含む。古墳時代から鎌倉時代の土器出土。(鎌倉時代。)

第12層：灰色(5 Y5/1)粘土。(奈良～平安時代。19-10対応。)

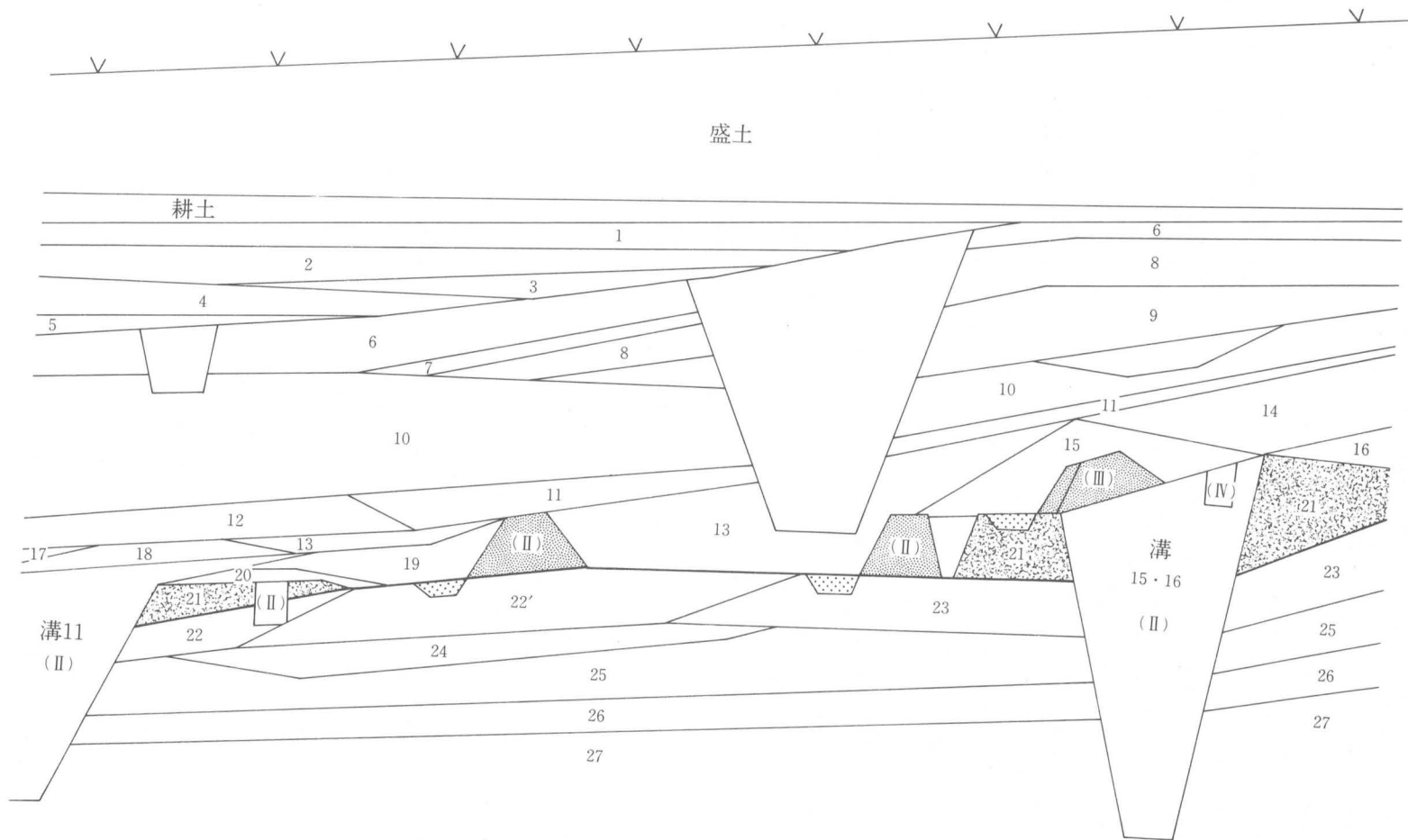
第13層：河川内の堆積物。(鎌倉時代。19-6A～6D対応。)

第14層：黒褐色(2.5 Y3/1.5)粘土質シルト。細礫～細砂多量に含む。(弥生時代中期。)

第15層：上部、黒褐色(2.5 Y3/1.5)粘土質シルト。中礫～粗粒砂多量に含む。炭化物少量含む。下部、オリーブ黒色(5 Y3/1.5)シルト質粘土。細礫～粗粒砂多量に含む。

第16層：上部、灰オリーブ色(7.5 Y3.5/2)極細砂。下部、オリーブ黒色(5 Y3/2)粘土、褐灰色(10Y R4.5/1)粘土、暗灰黄色(2.5 Y3.5/2)シルトの互層。

溝15、16掘削時の排土の凹みに堆積。(弥生時代中期。19-7～9対応。)



第4图 基本层序概略图

G～H地区にかけてのみ堆積。層厚30～35cm。

第17層：黒色（N2/0）粘土。（弥生時代中期包含層。19-12対応。）

A地区以西のみ堆積。

第18層：灰オリーブ色（5Y4/2）シルト質粘土。

第19層-1層：砂。

2層：灰色（5Y5/1）シルト質粘土。

3層：灰オリーブ色（7.5Y4/2）シルト質粘土。

土壇1内の堆積土としたが、
溝11掘りかえ時の排土の可能性
も考えられる。

第20層：黒褐色（10YR3/1）灰層。

第21層：灰色（7.5Y4/1）シルト質粘土。にぶい黄色（2.5Y6/3）シルト質粘土のブロック混入。溝掘削時の排土。上面でC地区木棺墓検出。G地区第6号方形周溝墓検出。

第22層：暗灰色（N3/0）粘土。砂礫を多量に含む。

A～D地区に堆積。

溝9・11、第1号方形周溝墓遺構面。

第23層：黒色（10YR1.7/1）粘土。

E～H地区に堆積。（19-12U対応。）

溝15・16

第2～5号方形周溝墓遺構面。

第24層：暗緑灰色（7.5GY4/1）シルト。

第25層：暗緑灰色（10GY4/1）シルト混じり粘土。

オリーブ黒色（7.5Y3/1.5）植物遺体混じり粘土。

褐灰色（10YR3.5/1）植物遺体混じり粘土。

暗緑灰色（10GY4/1）粘土少量混じる。

下部に植物遺体ラミナあり。

灰色（10Y3.5/1）シルト混じりシルト質粘土。

植物遺体細片、ラミナあり。

暗緑灰色（7.5GY4/1）粘土質シルト。

植物遺体細片少量。木片、植物根あり。

互層

（19-13、14対応。）

第26層：黒色（2.5Y2/1）粘土。（無遺物。19-15、7-16U対応。）

第27層：オリーブ灰色（5GY4.5/1）シルト質粘土。（19-16、7-16L対応。）

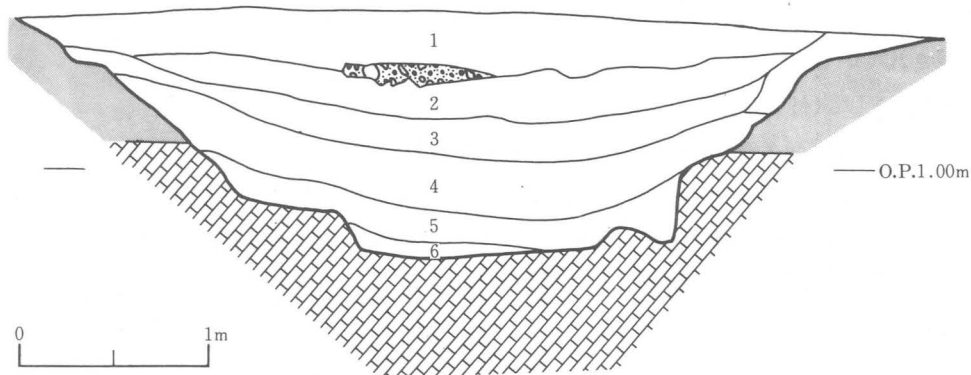
3. A～D地区の調査

〈溝11〉 (付図1)

調査区A・B・C地区に跨って検出した、軸線が北側に約10°の傾きを持つ、東西方向の大溝である。規模は横巾5～6m、深さ1.2～1.3m、全長34m以上である。

掘り方断面は逆凸型を呈しており(第5図)、平坦な底面と緩斜面のテラスを持つ。溝西側において、テラス部が幅広くなり、底幅が狭まり、底幅のくびれた東西縁部にえぐられた凹部が検出された。溝内埋土は6層に分層される。上層より第1・2層は砂粒を割合多く含む、洪水や氾濫等による水の流れを確認出来る堆積層を呈しており、その洪水や氾濫等で流された流木が確認され、径1mの流木も検出されている。第3・4層は灰黄色粘質土で上層に比べて砂粒を含まず、自然遺物を多量に含む澱んだ時に堆積するピート層である。第5層は黒褐色粘質土で椀や弓の木器と鳥類や獣類の骨、貝類が出土した。第6層は無遺物層で粘質土である。

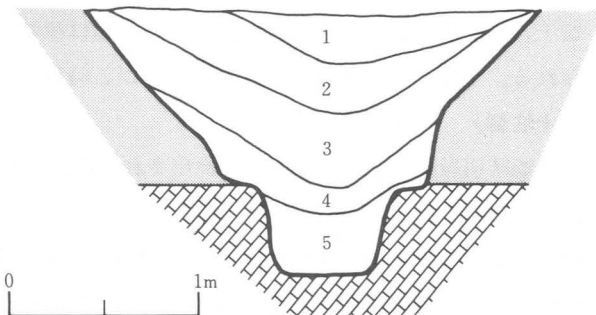
各層の土器の出土は下層になる程やや多くなるが、ほぼ均一化している。出土土器は畿内第II様式に属するもので、溝の機能していた時期も相前後するものと考えられる。またこの溝は人工的な土木工事によって造成されたものであり、その全容は知れないが、これだけの大規模土木工事を行う必要性は何か。今後発掘調査が進むにつれてこの溝の役割について究明されることを期待したい。



第5図 溝11断面図(1/40)

〈溝9〉 (付図2)

C・D地区に跨がって、検出した溝である。南東から北西方向へ伸び幅3.6～4m、深さ1.5～1.6mを測り、横断面は逆凸型の2段構造であり人為的に掘削されたものと推定できる。次に溝内の堆積であるが、これは5層に分層が可能である(第5図)。最下層は溝が掘削された



第6図 溝9断面図(1/40)

直後の堆積と考えられ全く無遺物である。第4層はこの溝から出土した土器、木器等のほとんどを包含していたもので他に植物遺体などを多く包含していた。第3層は遺物を若干包含してただけで、植物遺体、特に直径15cm以下の木の幹や枝、草等が多く出土した。第1・2層ともに遺物・植物遺体を殆ど包含していない。各層は以上であるが、これはいずれも水の澱んだ状態での堆積と考えられ、砂の堆積が見られないこともこれを裏づけている。

〈土坑1〉 (付図1)

A地区溝11の北側に舌状に突出した不定型土坑である。規模は東西方向9m、南北方向4m以上で、深さは0.3mを測る。埋土は水の澱んだ堆積層であり、植物遺体を多く含んでいる。この土坑は溝11の掘削排土と考えられる層と溝11が埋没後覆われた層との間に検出され、周囲の状況は単純堆積層を呈しているところから、溝11と同時期の遺構と考えられる。この土坑は東西及び北側方向に続いており、自然地形の凹部とみられる。

〈焼土坑1〉 (付図3)

A地区溝11の掘削時の排土と考えられる層の下に検出された焼土坑である(第23層上面)。A地区のほぼ中央部に位置し、溝11の肩部から円弧状に広がる。規模は東西方向4.8m、南北方向2.3mを測る。黄褐色焼土が中央部を厚さ5~6cm、幅30~40cmで円弧状に巡り、この焼土より南側は数cmの焼土塊と灰を含む灰褐色粘土が覆っている。北側は船底状に掘り込まれた部分に炭と灰が混入している黒色粘土が堆積し、上層を灰層が覆っている。この焼土坑の灰層から多数の土器片が出土している。単なる焚火跡だけでなく、土器を焼成した遺構の可能性が残されている。

〈焼土坑2〉 (付図3)

焼土坑1の遺構面より10~20cmの第23層を掘削後検出されたもので、南北方向1m、東西方向0.8mのほぼ円形の焼土坑である。15cm位の掘り込まれた部分に炭と灰を混入している黒色粘土が埋まり、上層に薄く灰層が堆積している。この焼土坑も土器を含み、焼土坑1より小規模であるが、同様のことがいえるだろう。

〈土坑2〉 (付図2)

C地区西側端に検出された溝状の土坑で幅0.8m以上、深さ0.6m。埋土は5層に分層され、上層より第1層・青黒色粘質土、第2層・灰色粘質土、第3層・黒色粘質土、第4層・黒色粘質土、第5層・青黒色粘質土である。第3層は植物遺体を含み、水の澱んだ時の堆積層と考えられる。土器細片が少量検出されているが、時期を決めるまでには至らない。

〈土坑群〉 (付図3)

C地区明緑灰色シルト上面にて検出された楕円形の土坑群である。土坑3の径は1.1×0.6m、深さ0.1m、埋土は黒色砂質土で数片の土器が出土。土坑4は径0.6×0.4m、深さ0.1m、暗緑灰色砂質土で無遺物。土坑5は径0.6×0.4m、暗オリーブ灰色砂質土で無遺物。それぞれ遺構の性質については不明である。時期についても弥生時代の遺構であると考えられるが、子細は不明である。

〈植物根群〉

C地区第24層中にて検出されたもので、1ヶ所で植物根を確認したが、ほとんど遺体はなく、土層の乱れを見つけるにとどまった。

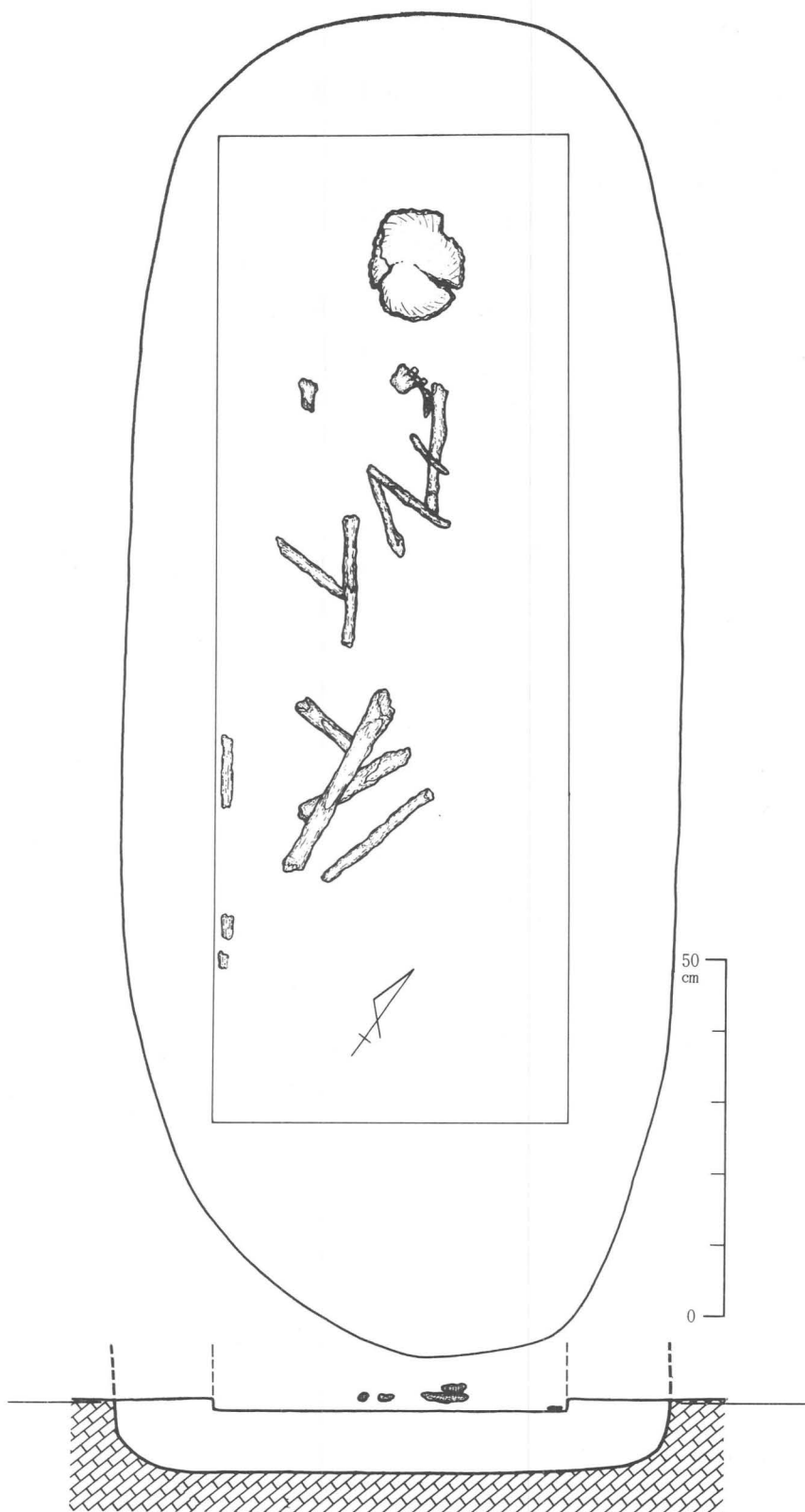
〈第1号方形周溝墓〉 (付図2)

NW-S E方向に2辺がくる方形周溝墓であるが、今回の調査では、2辺の一部とその一角を検出しただけで規模は1辺7m以上としか判明していない。検出時すでにマウンド上部は削平されており、この軸線と直交する周溝は、溝10で一部を壊されている。残存する部分での周溝は、共に幅0.8m、深さ0.3~0.4mを測る。溝内の堆積は上下2層に分層できる。主体部や副葬品等は確認されなかった。

下層は黒色粘質土が、上層は第13層が堆積しておりこの上層の砂は溝9の第1層を部分的に覆っていた砂層と同じと考えられる。

〈木棺墓〉 (第7図)

C地区、溝9と溝11のほぼ中間で検出した木棺墓である。遺構上部は検出時点でかなり削平を受けており、残存状態は悪かった。構造は掘り方、縦1.9m、横0.8m、深さ現存0.12mで、SE-NW方向の土壇を掘り、掘り方外の砂礫土よりやや粘質で砂礫の少ない茶黒色土で7cmほど埋めもどし、幅0.5m、長さ1.4mの木棺を置いて埋葬施設としていた。木棺は厚さ約2cmの側板の一部が残存しており、人骨も部分的に遺存していた。副葬品と考えられる遺物等の出土はなかった。



第7图 木棺墓实测图(1/10)

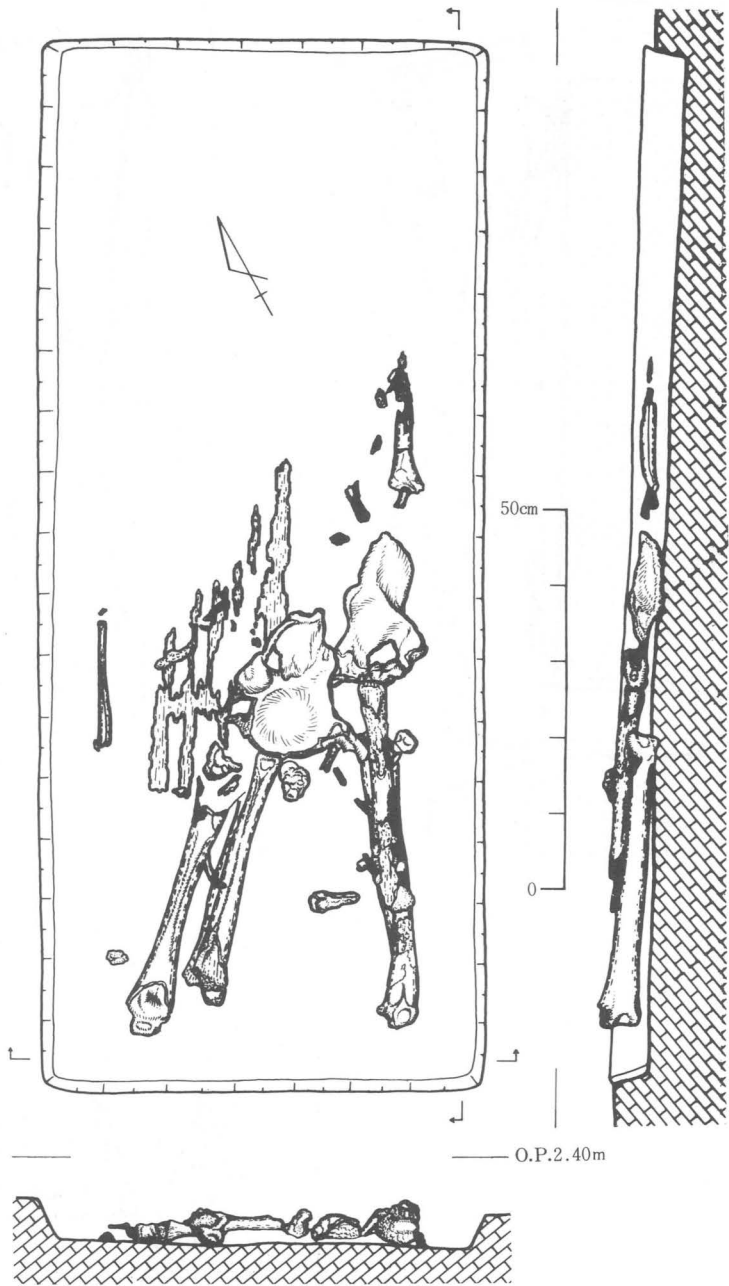
4. E～H地区の調査

〈第2号方形周溝墓〉 (付図4)

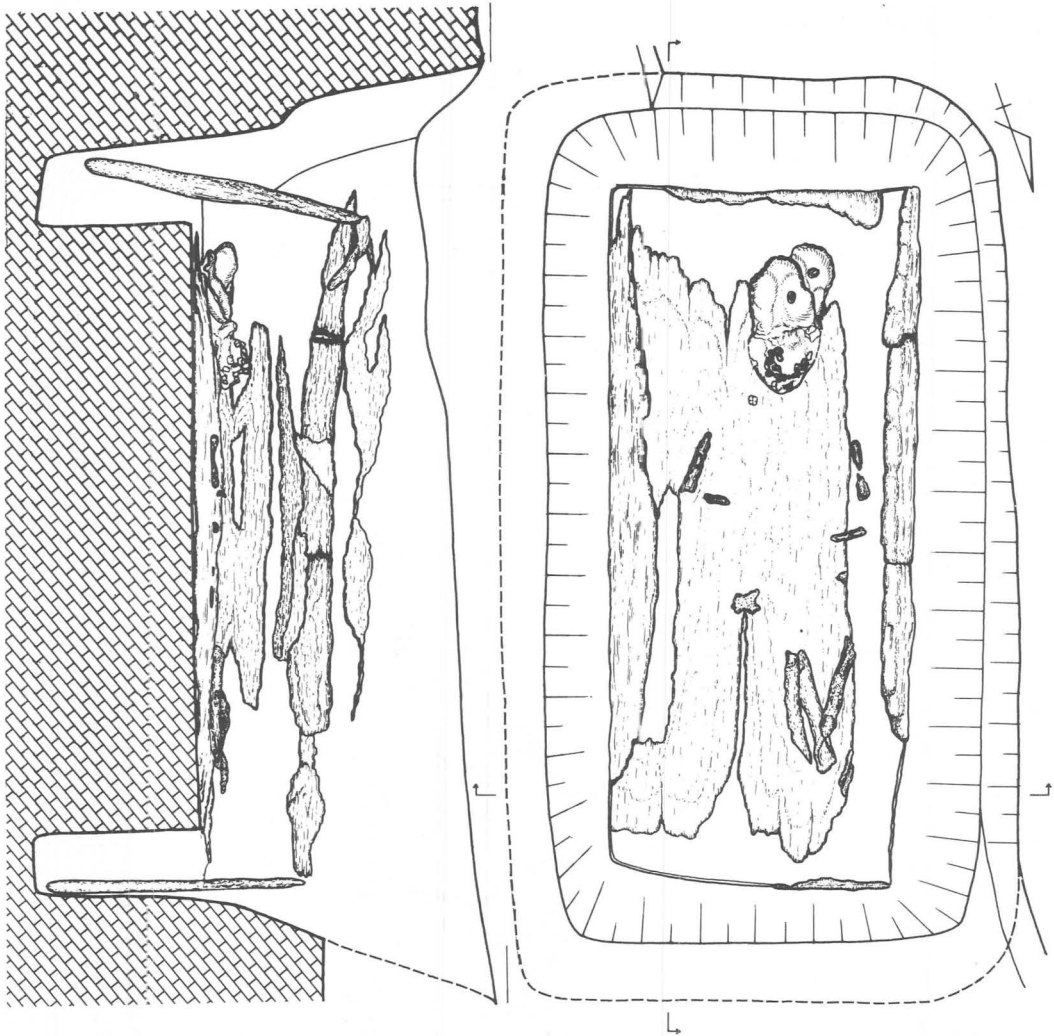
第2号方形周溝墓はE地区の西よりのところで検出した。第23層をベース面にして築造され、墳丘の一部が削平を受けている。周溝部は南東側を第3号方形周溝墓によって切られている。他の3溝は遺存している。墳丘は平面形がほぼ正方形を呈し、北東側で4.3m、南東側で3.5mである。墳丘の高さはベース面となる第23層より約28cmと推定されるが現状では確認できない。北東側周溝は幅1.4m、深さ0.45m、南東側周溝は幅1.6m、深さ0.3mの浅いU字溝である。北西側周溝は確認できる範囲で最大幅2m、深さ0.6mであり、2段で落ちる。

主体部は墳丘上で2ヶ所、周溝内で1ヶ所の計3ヶ所で検出した。第1主体部は墳丘の中央に位置し、墓壇と人骨の一部を確認した。墓壇の規模は長さ142cm、幅63cm、

深さ5cmのほぼ長方形で、長軸はS-30°-Wの方向を向く。木棺の底板をわずかに検出したが、保存状態が悪く、2～3mmの厚さが遺存するのみであった。人骨は骨盤より下半を検出

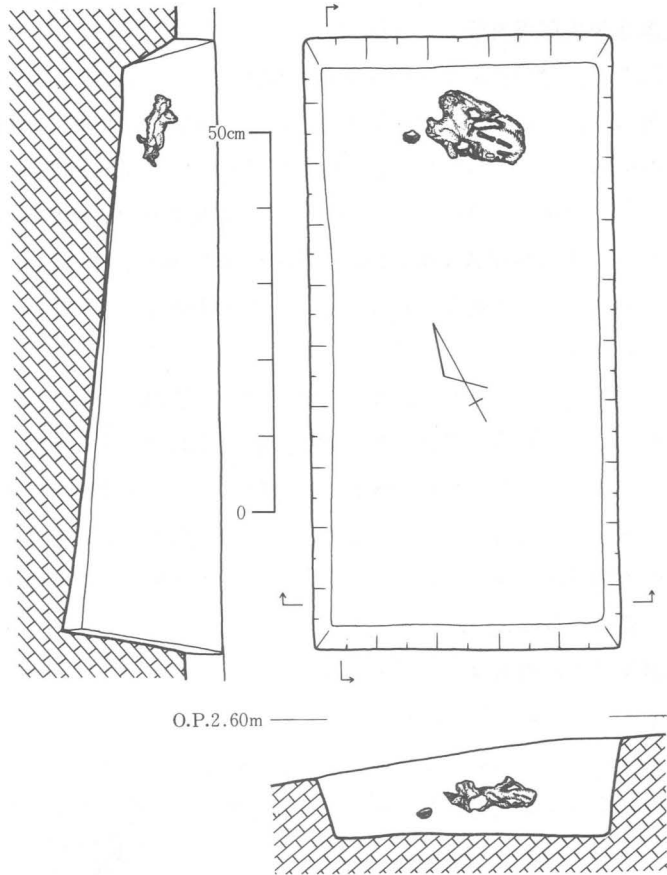


第8図 第2号方形周溝墓第1主体部実測図(1/10)



第9图 第2号方形周溝墓第2主体部实测图(1/10)

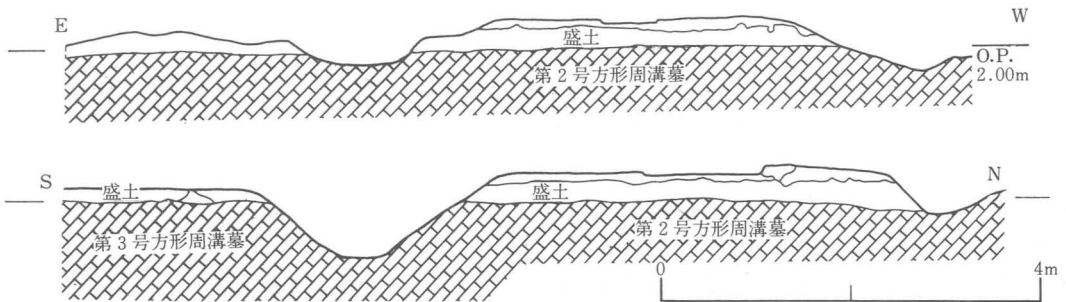
した。人骨の遺存状態は良好であり、仰臥屈肢で埋葬されている。成人骨である。埋葬犬骨は墳丘の北西に位置し、墓壇と犬骨の一部を確認した。墓壇の規模は長さ81cm、幅41cm、深さ18cmの長方形で、長軸がS-30°-Wを向く。犬骨の遺存状態は悪く、頭骨のみを検出した。他の例から木棺を使用していたと考えられるが、現状では確認できなかった。第2主体部は北西側の周溝内で検出した。周溝がほぼ埋まった状態の時に追葬されており、いわゆる溝内埋葬と考えられる。墓壇と人骨を確認した。墓壇は長さ115cm、幅62cm、深さ40cmで底面とし、さらに小口板の部分幅



第10図 第2号方形周溝墓 埋葬犬骨実測図(1/10)

10cm、深さ20cmに2段に掘る。木棺は上蓋、側板、小口板、底板が比較的良好に残っている。木棺の長軸はN-19°-Wを向く。人骨の遺存状態は良くないが頭骨、大腿骨を検出した。仰臥屈肢で埋葬されている。小児骨である。副葬品は認められないが、南東周溝部で大形の甕1個体分(図版6-73)を検出した。破片ではあるが1ヶ所にまとまった状態で検出した。原位置を保っているとは考えられず、供献後に溝内に落ち込んだものと思われる。

第2号方形周溝墓は第1主体部・犬・第2主体部の順に埋葬され、溝内出土の甕から畿内第II様式の時期の築造と考えられる。



第11図 第2・3号方形周溝墓盛土断面図(1/80)

〈第3号方形周溝墓〉 (付図4)

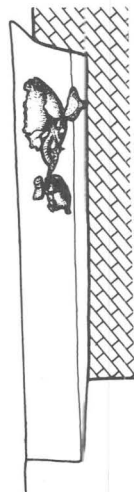
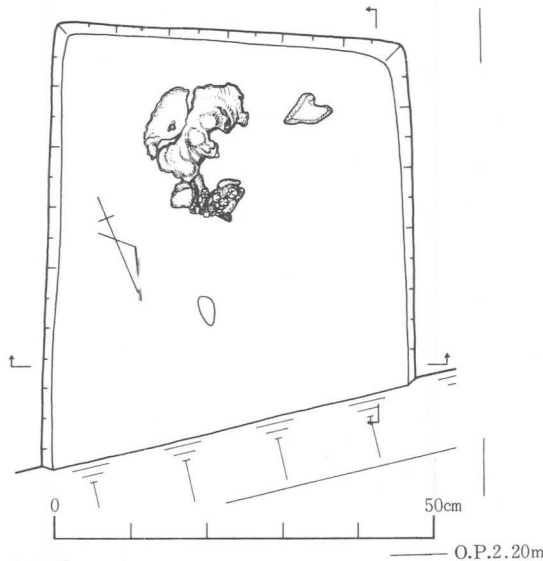
第3号方形周溝墓はE地区南西で検出した。1/2以上は調査範囲外にある。第23層をベースに築造され、墳丘は削平を受けていない。周溝部は北東、北西側で検出した。墳丘の規模は全容を検出していないので不明であるが、現状で一辺5m以上となる。高さはベース面より約16cmである。北東側周溝は東より西に向かって深くなり、幅2.6m、深さは東側0.5m、西側0.8mである。北西側周溝は幅1.8m、深さ0.5mである。また、北側コーナー部は幅50cmを残し周溝を掘削せず、陸橋部としている。主体部は検出できなかったが、南側の調査範囲外にあると考えられる。

北東側周溝内より壺(図版6-69)、甕(図版6-70)、スコップ状鋤(第24図-2)が出土した。また、北西側周溝内からも鋤の柄(第25図-7)が出土した。壺は供献後に溝内に落ち込んだものと考えられる。鋤2点は供献用となるかは不明である。

第3号方形周溝墓に伴う遺物は上記の4点である。第3号方形周溝墓は第2号方形周溝墓の南東側周溝を切っていることから、これより新しい時期の築造と考えられる。出土した土器から畿内第Ⅱ様式の時期と考えられる。

〈第4号方形周溝墓〉 (付図4)

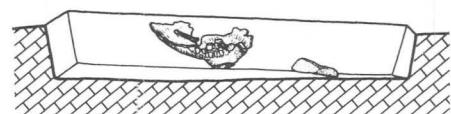
第4号方形周溝墓はE地区の北東で検出した。当周溝墓の大部分は北側の調査範囲外にある。第23層をベース面にして築造され、墳丘は削平を受けていない。第4号方形周溝墓は第2号方形周溝墓の北東側周溝を共有している。墳丘の規模は不明であるが、高さはベース面となる第23層より約30cmである。



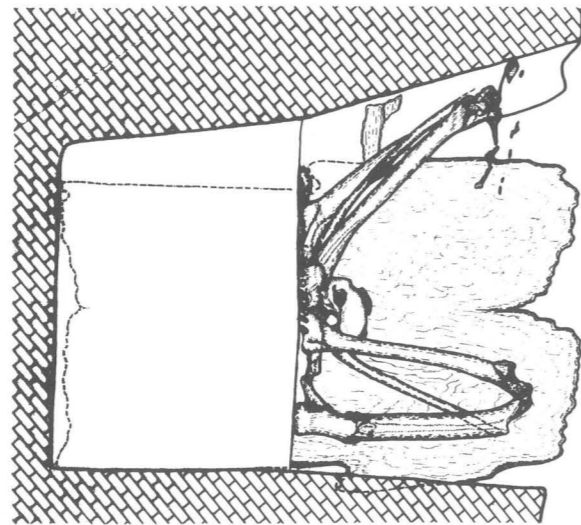
主体部は北東側周溝寄りで1ヶ所検出した。墓壇と人骨の一部を検出した。墓壇は残存長60cm、幅50cm、深さ7cmの長方形で、長軸がS-28°-Wの方向を向く。

人骨の遺存状態は悪く、頭骨だけが残っていた。成人骨である。他の例から木棺を使用していたと考えられる。

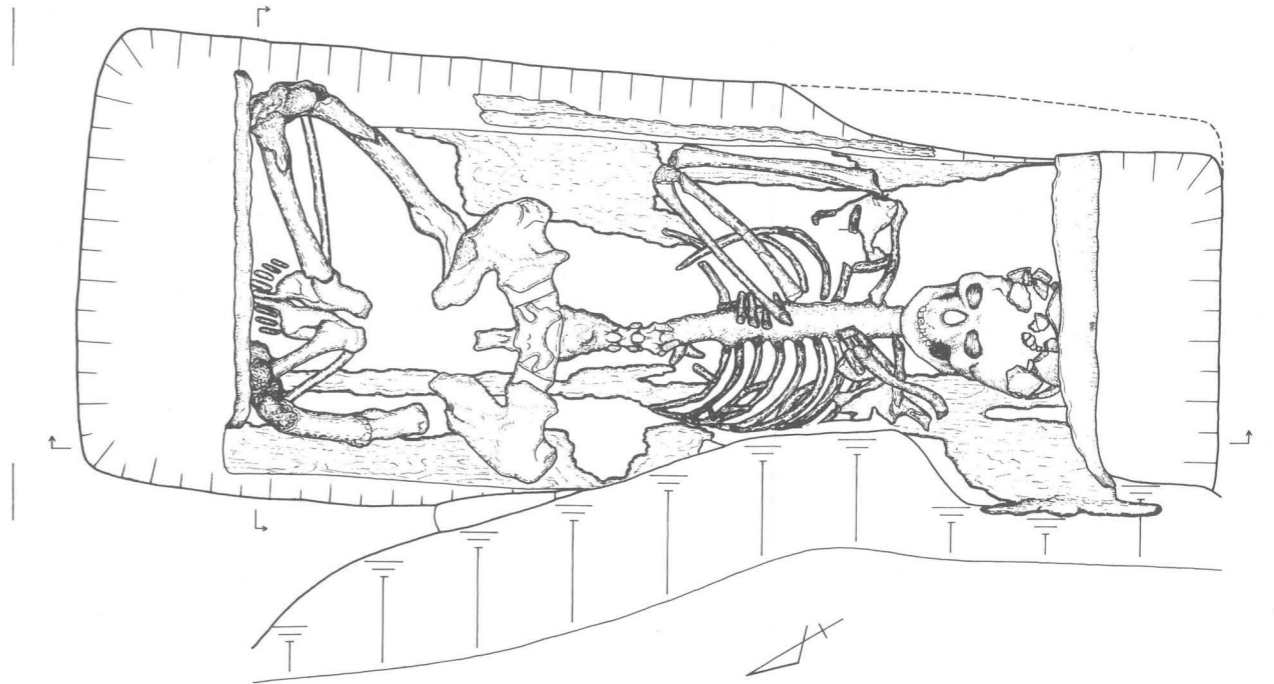
第4号方形周溝墓は第2号方形周溝墓と北東側周溝を共有することから、同時期の築造と考えられる。また、主体部は墳丘中央より南側に大きくずれており、追葬の可能性が考えられる。



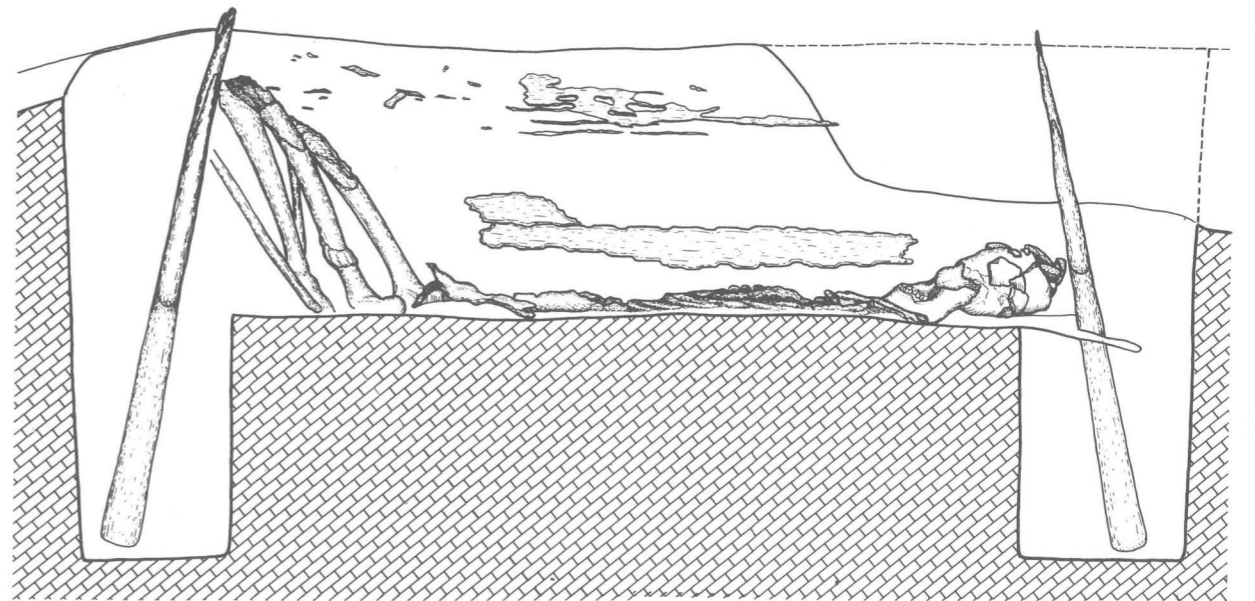
第12図 第4号方形周溝墓主体部実測図(1/10)



0 50cm



O.P.2.60m

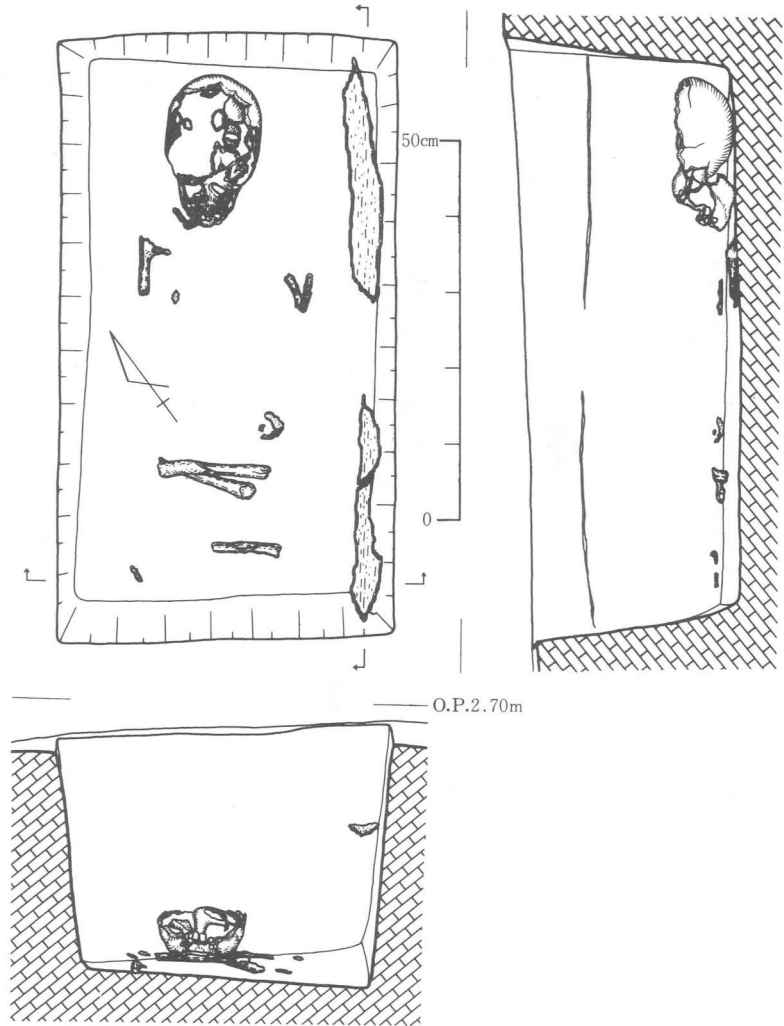


第13图 第5号方形周溝墓第1主体部实测图(1/10)

〈第5号方形周溝墓〉 (付図4)

第5号方形周溝墓はF地区の西端で検出した。当周溝墓の1/2は調査範囲外にある。第23層をベース面にして築造されている。墳丘の中央部は近世の溝によって南北方向に削平を受けている。周溝部は北西、北東、南東側の3溝を検出した。墳丘の規模は、1/2が調査範囲外にあるため全容は不明であるが、ほぼ正方形を呈し、北東側で一辺4.3mである。高さはベース面となる第23層より約58cmである。北西側周溝は幅95cm、深さ30cmのU字溝である。北東側と南東側は溝の立ち上がりがなく、墳丘の斜面だけで終わる。

主体部は2ヶ所で検出した。第1主体部は墳丘の西隅に位置し、墓壇と人骨を検出した。墓壇は第2号方形周溝墓の第3主体部と同形態である。墓壇の規模は長さ150cm、幅60cm、深さ38cmで底板面とし、さらに、小口板のところだけを幅21cm、深さ33cmで2段に掘る。木棺は上蓋、側板、小口板、底板が残る。木棺の軸線はS-29°-Wの方向を向く。人骨の遺存状態は今回の調査例中では最も良く、大部分が残っていた。成人骨で仰臥屈肢の形態をとる。第2主体部は墳丘東隅で検出した。墓壇と人骨の一部が遺存していた。墓壇の規模は長



第14図 第5号方形周溝墓第2主体部実測図(1/10)

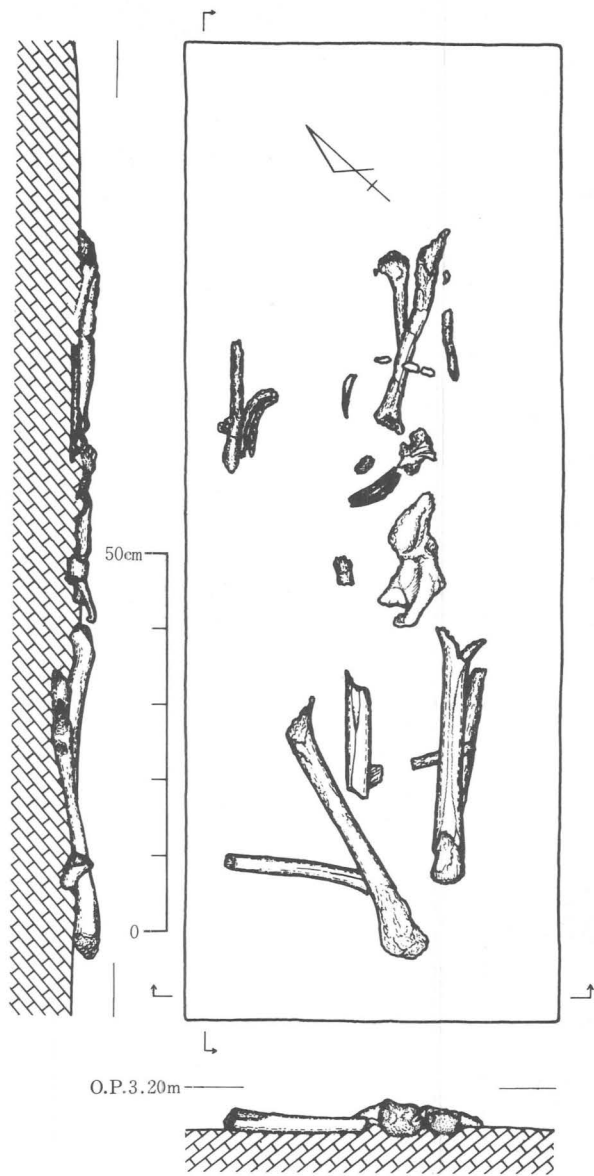


第15図 第5号方形周溝墓断面図(1/80)

さ80cm、幅44cm、深さ30cmの長方形で長軸がS-37°-Wの方向を向く。木棺は上蓋のみを検出した。人骨は小児骨で、頭骨、大腿骨などの大きいものしか残っていない。仰臥屈肢で埋葬したと考えられる。

第1主体部の南東墳丘上で高杯（図版6-71）を検出した。高杯は周辺に割れた状態で散乱していたが、1個体分である。供献用で原位置をさほど動いていないと考えられる。

第5号方形周溝墓に直接伴う遺物は上記の高杯1点だけである。第1・2主体部は共に方形周溝墓の中央からずれており、これらは追葬の可能性が高い。調査範囲外に築造時の主体部があると考えられる。第5号方形周溝墓は、出土した高杯から畿内第II様式の時期と考えられる。



第16図 第6号方形周溝墓主体部実測図(1/10)

る。

〈第6号方形周溝墓〉（付図5）

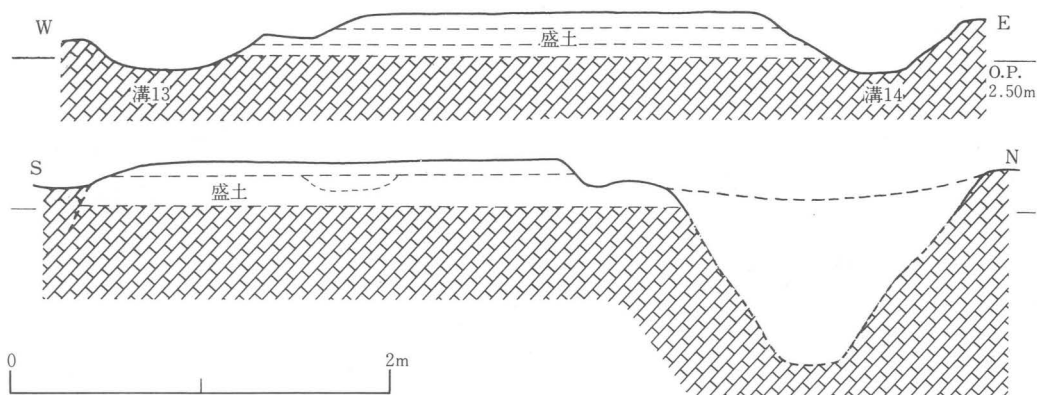
第6号方形周溝墓はG地区中央でほぼ全体を検出した。第16層をベースにして築造され、墳丘は削平を受けている。周溝は北東・南西部で確認した。北西部周溝は溝13、南東部周溝は溝14で切られている。

墳丘はほぼ正方形を呈し、北東辺は4.3m、南東辺3.8mを測る。高さはベース面より約30cmが残る。

周溝の規模は、北東側で幅80cm、深さ25cmで、断面が浅い椀状を呈す。南西側周溝は、溝15が上層近くまで埋まり、浅い溝状になった状態を利用している。したがって、北東側周溝に見るような明確な溝状を呈するものではなく、墳丘よりゆるやかに傾斜し、溝との境は不明瞭である。

主体部は墳丘のほぼ中央に位置し、墓壇の残欠と人骨の一部を検出した。墓壇の規模は、長さ128cm、幅68cmの長方形を呈し、長軸はN-50°-Eの方向を向く。木棺の痕跡は残っていない。

人骨は胸部より下半を検出した。第2～5号方形周溝墓の例から、木棺を



第17図 第6号方形周溝墓盛土断面図(1/40)

使用したものと考えられる。検出した部分の遺存状態は比較的良好であり、仰臥屈肢の形態と考えられる。

副葬品は認められないが、南西側周溝部で大形の甕（図版6-74）1個体を検出した。すべて破片となっており、原位置を保っているとは考えられない。供献後に溝内に落ち込んだものと考えられるが、甕棺の可能性も考えられる。

第6号方形周溝墓の構築は、第23層をベースにしてつくられた溝15・16の掘削排土の上に行なわれている。この排土上面には凹凸があり、その凹部に第16層が堆積している。墳丘盛土はしたがって、この第16層、排土（第21層）、第23層がブロック状に混じっている。溝の掘削は浅く、第23層中で終わり、第2～5号方形周溝墓で確認した第24・25層のブロックは混入しない。溝15・16の排土が大半を占めるため、他の方形周溝墓の盛土に比べ砂粒が多く、非常に細かいブロックの混合となっている。

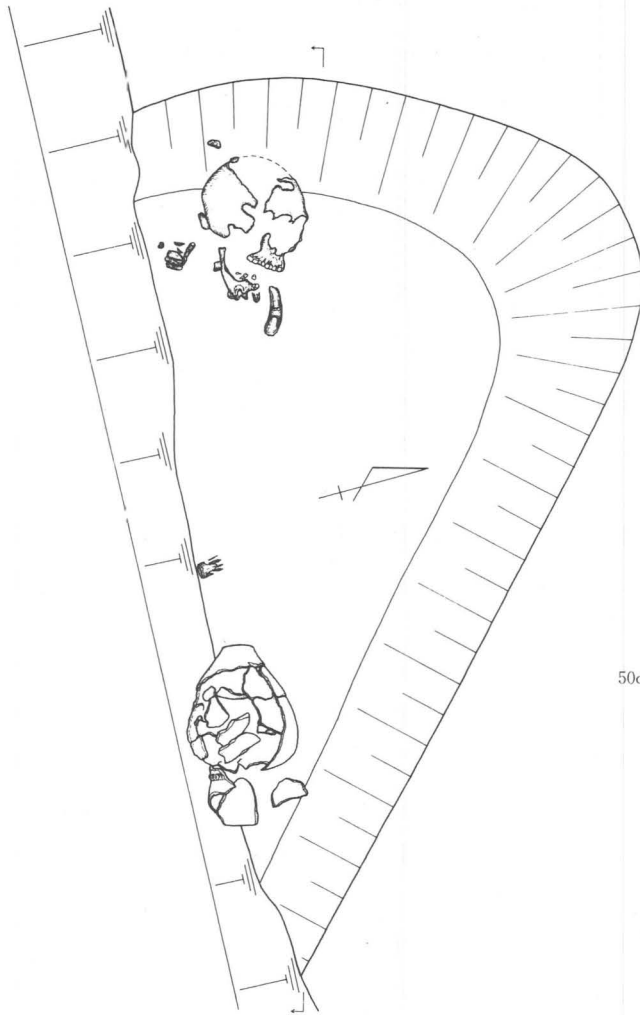
盛土の厚さは現状で約30cmを測り、上面より墓壇が掘られているように観察される。しかしながら、昭和61年に実施された鬼虎川遺跡第30次発掘調査では、第1次の盛土を行った後、墓壇を掘り、さらに盛土を行って墳丘を構築していることが確認されている。この例から、第6号方形周溝墓においては、第1次の盛土上面まで削平を受けていると考えられる。

第6号方形周溝墓に伴なう遺物は上記の甕1点のみであるが、溝16の上層において同時期と考えられる甕を検出した。これらの土器から、第6号方形周溝墓の築造は溝15・16が埋まった直後の畿内第Ⅲ様式のころと考えられる。

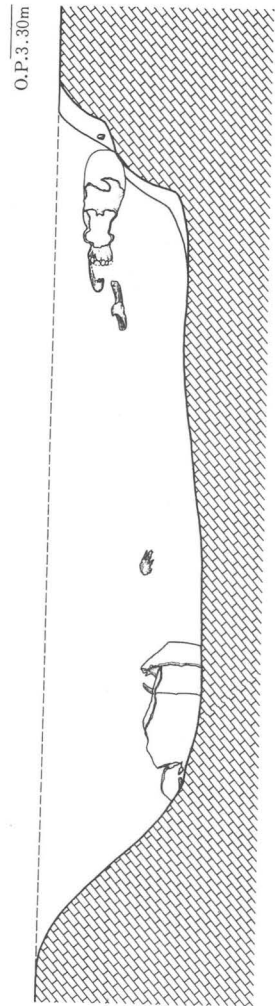
〈土壇墓〉（第18図）

H地区で検出した。平面形は楕円形を呈する。南東側は調査範囲外にあたるため、全容は不明であるが、現状での規模は長径170cm、短径110cm、深さ31cmである。長軸の方向はN-46°-Wを向く。墓壇内には人骨頭部のみが遺存している。右側頭部を上にして、横向きに置かれている。埋葬姿勢は不明。墓壇内の堆積状況から木棺の使用は認められない。また、墓壇内に供献用の壺（図版6-75）が1点出土し、これより、畿内第Ⅳ様式の時期の埋葬と考えられる。

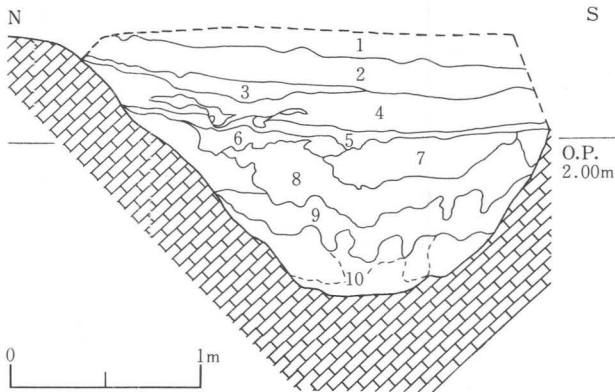
この土壇墓は溝16が完全に埋没した段階でつくられており、今回の調査地点は、弥生時代中



第18図 土墳墓実測図(1/15)



50cm
0



第19図 溝15断面図(1/40)

期を通じての墓域となっていたことが考えられる。

〈溝15・16〉 (付図5)

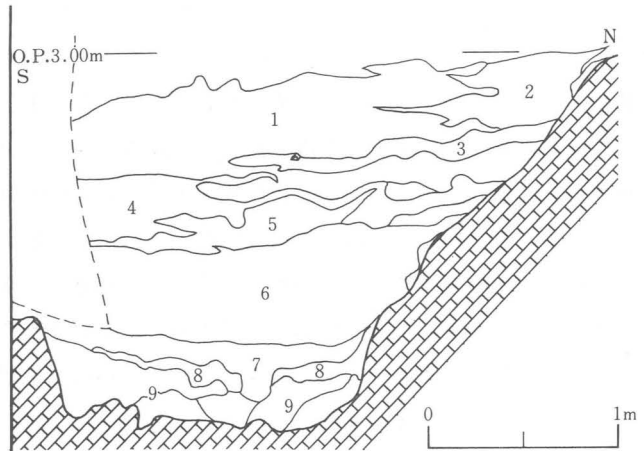
第23層上面より掘削された溝で、溝15はF地区よりG地区にかけて、溝16はG地区よりH地区にかけて検出した。

溝15は、幅3m、深さ2.1m、底部幅0.3mで、V字形に近い断面を呈している。方向はN-50°-Wを向き、調査範囲内で約10cm

の比高をもって北西に傾斜する。

溝内の堆積土は、大きくわけて、上部が細粒砂から粗粒砂の互層、中部がシルト質粘土、下部が粘土となり、中・下部は植物遺体が多量に混じっている。

出土遺物は弥生土器と木製品がわずかに出土している。土器は実測不可能なもののみである。



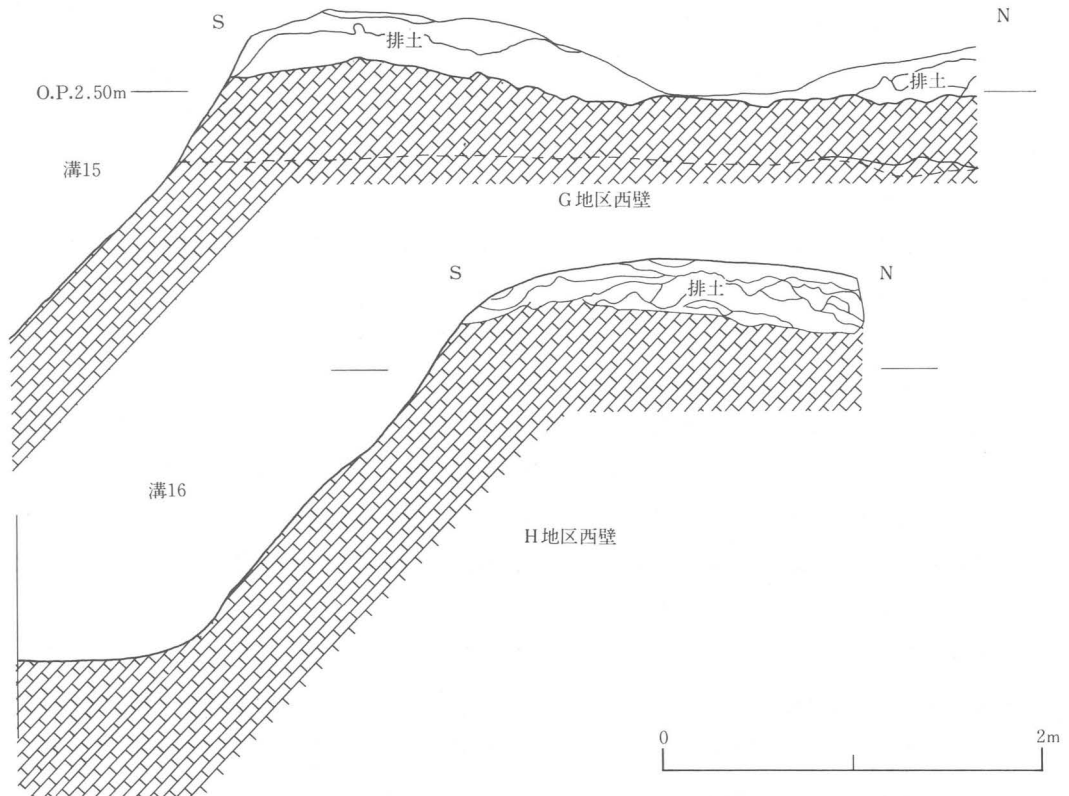
第20図 溝16断面図(1/40)

溝16は幅約3m、深さ2.1m、底部幅0.7mの断面V字形の溝である。方向はN-60°-Wを向き、調査範囲内で約15cmの比高をもって北西にわずかに傾斜する。

溝内の堆積土は、大きくわけて上部が極細粒砂から中礫の互層、中部が粘土から細粒砂の互層、下部が粘土質シルト、極細粒砂の互層からなる。中・下部には植物遺体を多く含む。

出土遺物は溝15と同様に弥生土器は少なく、木製品が少量出土している。

溝15、16の検出面は第21層であるが、第21層は溝掘削時の排土である。微地形を観察すると、



第21図 溝15・16掘削時の排土断面図(1/40)

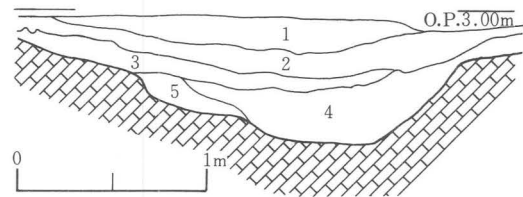
溝15、16の間と溝16右岸（北東側）が各溝に並行して土手状に高くなっているのがわかる。特にG地区の溝間では中央部が浅い溝状のくぼみを呈している。溝15の左岸（南西側）には排土は認められない。排土の厚さは、G地区中央で最大約0.3m、溝16右岸（H地区）で最大約0.3mである。したがって、溝の規模は掘削土量に比して拡大している。

溝15、16の掘削時期は出土遺物がすくないため確定できない。各方形周溝墓、溝との前後関係は、溝15が埋まった後に第7号方形周溝墓が築造されていることから、畿内第Ⅲ様式以前であり、溝15左岸に隣接する第2～5号方形周溝墓の上下層に溝掘削時の排土が認められないことから、これらより後の掘削になると考えられる。このことは、排土が溝15の左岸に認められない点から、すでに方形周溝墓群が築造されていたため、排土を右岸側に盛ったことを推定させる。

〈溝12、13、14〉（付図4・5）

溝12は、F地区で検出した。幅1.8m、深さ0.5mで、断面皿状を呈する。底部は約10cmの比高をもって北東側に傾斜する。溝内の堆積は上層よりシルト質粘土、粘土ブロックの混じる中粒砂から中礫である。時期決定し得る遺物は無い。

溝13は、G地区にて検出した。第6号方形周溝墓の北西側周溝部を切ってつくられている。南西から北東方向の断面皿状の溝で、北東側が幅広くなる。幅1.8～0.8m、深さ0.3～0.35mを測り、わずかに北東側に傾斜する。溝内の堆積は砂混じりのシルト質粘土で人為的に埋められたと考えられる。遺物は無く、時期は不明である。



第22図 溝13断面図(1/40)

溝14はG地区からH地区にかけて検出した。第6号方形周溝墓の南東側周溝部と重複し、幅2.2m、底部幅北東側1m、南西側0.5mを測る。溝内の堆積は、上部極細粒砂、中部は粘土から極細粒砂の互層、下部は粘土となり、溝12、13と異なり、人為的に埋められたものではなく自然堆積と考えられる。出土遺物は無く、時期は不明。

溝12～14は、中心で約15mの等間隔にあり、また、ほぼ平行していること、層序関係からはほぼ同時期の所産と考えられる。また、溝13・14はともに第6号方形周溝墓の周溝と重複し、周辺に足跡が残っていることから、第6号方形周溝墓の上部が第15層によって削平された時期、言い換えれば、土塚墓がつけられた時期に、土塚墓あるいはその他の埋葬施設をつくるための所産と考えられるのではなかろうか。

〈土塚6、7〉（図版40）

E地区南よりの第24層上面で土塚を検出した。土塚6は東半が不明であるが、平面形は円形を呈すると考えられる。規模は直径95cm、深さ20cmである。土塚7は平面形が楕円形を呈し、長径60cm、短径50cm、深さ20cmである。土塚6、7内からは遺物は出土しなかった。また、遺構の性格も不明である。遺構の時期は層位から考えると畿内第Ⅱ様式より新しくならない。

5. 出土遺物

今回の調査では弥生時代の土器と木製品、石器、土製品、骨製品が出土している。土器以外の遺物は出土量が少ない。また若干ではあるが、古墳時代の土器も出土した。

〈弥生土器〉

弥生時代の土器は中期のものが出土した。第Ⅱ～Ⅳ様式の土器が認められる。出土量は第Ⅱ様式の土器が圧倒的に多く、一部、第Ⅲ・Ⅳ様式のものがある。おもに溝、方形周溝墓、土坑などの遺構内と包含層から出土した。土器の詳細については観察表に記したので、本文中では各器種の概略について記す。

第Ⅱ様式の土器は壺・無頸壺・細頸壺・甕・鉢・高杯・壺蓋の器種がある。

壺は1～8（溝11出土、以下出土は省略）、55・57（溝9）、69（第3号方形周溝墓）、76（焼土坑1）、88～97（包含層）である。形態は胴の長い体部に細長い頸部のものと、体部の張りが大きく頸部の短いものなどがある。頸部から胴上半部に文様を施すもの（1・90）と文様を施さないもの（3～5）がある。圧倒的に文様を施すものが多い。また、口縁部は面を持たずに終わるものが大部分であるが、一部、面を持ち文様を施すもの（91）もある。文様は櫛描文様がほとんどであるが、キザミ目を施す例も1例ある。櫛描文様は直線文が多いが、直線文と扇形文を組み合わせた流水文、波状文などもある。

無頸壺は9（溝11）、72（第2号方形周溝墓）、82（焼土坑2）、98（包含層）である。形態は卵形を呈する体部より口縁部が内弯するもの（9・84・98）と、わずかに外反するもの（72）がある。文様を施すものと施さない二者がある。

細頸壺は58（溝11）、93、94（包含層）がある。卵形を呈する体部より口縁部がわずかに外方へ広がる。頸部から胴上半部にかけて櫛描文様を施す。

甕は10～29（溝11）、59（溝9）、70（第3号方形周溝墓）、73（第2号方形周溝墓）、77～79（焼土坑1）、80（土坑2）、81（焼土坑2）、82・83（焼土坑3）、105～108（包含層）がある。形態はいわゆる倒鐘形を呈し、口縁部径が最大腹径より大きいか、ほぼ同じ程度である。形態的にはさほど差異はなく、わずかに最終調整が変わる程度であり、ハケメ調整、ナデ調整、ヘラミガキ調整などがある。また、口縁端部にキザミ目を施すもの（12）や、口縁端部にキザミ目を施し、胴部に櫛描直線文を施すもの（11）、胴部に櫛描直線文を施すもの（106）、櫛描直線文の下に一带の櫛描波状文を施すもの（10）がある。

鉢は33～36（溝11）、60（溝9）、99～103（包含層）がある。形態は椀状の体部で口縁部が直口するもの（34～36・99）や、口縁部が外反し、胴部に瘤状の把手がつくもの（100）がある。また、直口の口縁部を有するものの中には半環状の把手を付けたもの（60・103）もある。大部分のものは体部に櫛描直線文を施すが、一部、無文のものもある。

高杯は30・31（溝11）、71（第4号方形周溝墓）、104（包含層）がある。杯部は浅い椀状を呈し、口縁部がわずかに外反する。

壺蓋は32（溝11）がある。つまみ部を残すのみで、他は不明である。

第Ⅲ様式の土器は壺、甕の器種が出土した。

壺は56（溝9）がある。胴部の破片であり、張りが大きい。上半部に櫛描直線文と簾状文を施し、下部を横方向のヘラミガキ調整する。

甕は68（溝16）、74（第5号方形周溝墓）、109（包含層）がある。形態は、胴部の張りが大きく、口縁部がくの字状を呈する。口縁端部にキザミ目を施すもの（68）や大形のもの（74）もある。調整はヘラミガキ調整を多く使用する。

第Ⅳ様式の土器は壺のみである。壺は75（土塚墓）であり、体部は卵形を呈し、口縁部が筒状を呈する。口縁部に凹線文、頸部と胴部の境に貼付圧痕文凸帯を施す。

〈古墳時代の土器〉

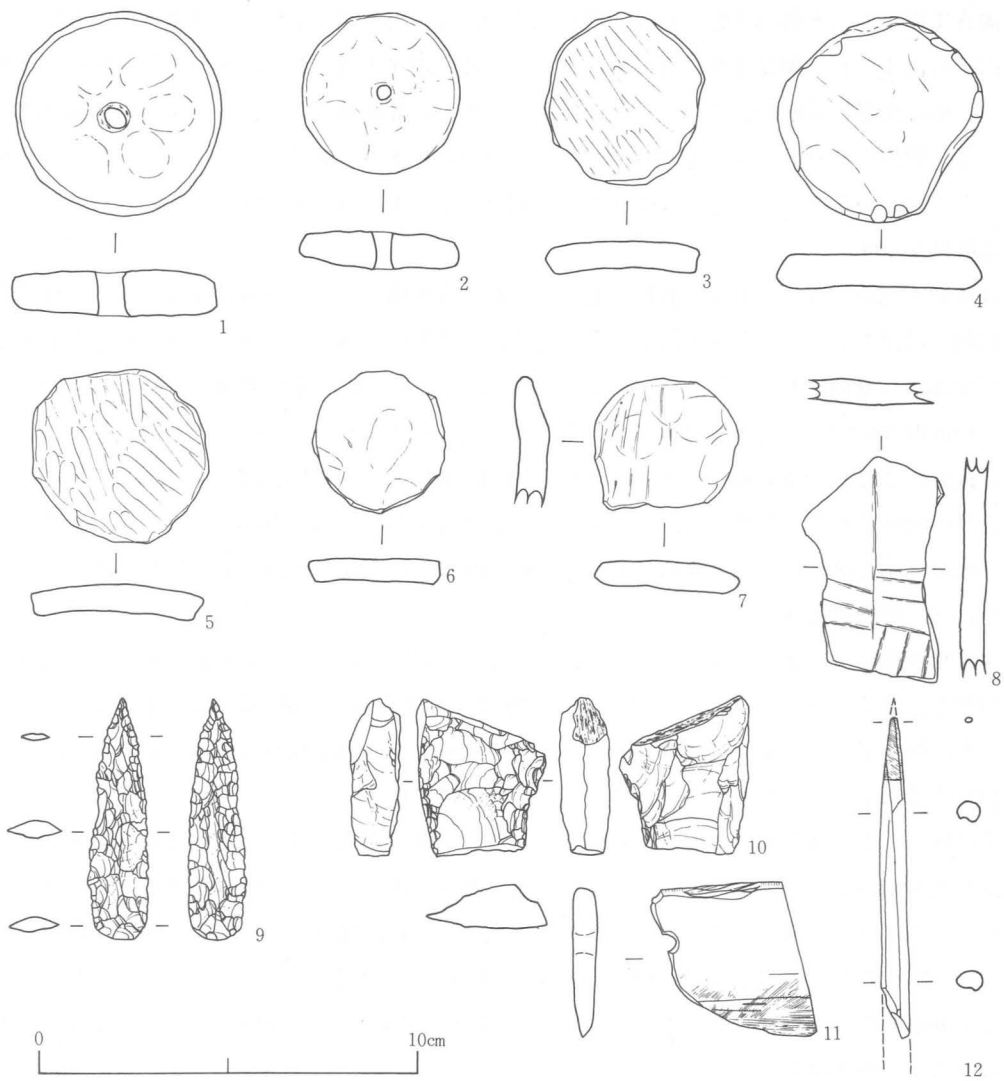
古墳時代の土器は須恵器と土師器がある。いずれも破片である。須恵器は杯身（110～112）、杯蓋（114・116・117）、高杯（113）、甕（115・118）がある。土師器は甑（119）がある。

〈石器〉

石器は石鏃、ピエス・エスキーユ、石庖丁が出土した。9は円基無茎石鏃である。横長剝片を素材とし、表裏面から縁片に細かな2次調整を加え、鋸歯状の側縁をつくる。長さ4.8cm、幅1.6cm、厚さ0.7cm、重さ5.2gを測る。石材はサヌカイト。A地区の溝11より出土。10はピエス・エスキーユである。一側縁に自然面を残すものである。截断は正面左側縁に上方からなされている。正面両側縁には細かな階段剝離が施され、使用による剝落も激しい。また、正面上面に左方向からの槌状剝離が見られる。長さ4.2cm、幅3.2cm、厚さ1.3cm、重さ21gを測る。石材はサヌカイト。B地区の溝11より出土。11は石庖丁である。大半は欠損しているが、形態は細長い半月形内弯刃と推定される。刃部は片刃で、刃に対して平行および斜方向の条痕が見られる。背部は研磨により丸みをおびており、紐孔右上方に数回にわたる剝離痕がある。また、剝離痕付近に集中しながらも、背部全域に条痕を含む摩耗が見られる。紐孔は両面から穿っている。紐孔の稜線は一部に摩耗が見られる。残存長4.3cm、幅4.0cm、厚さ0.5cm、残存重量17.4gを測る。石材は緑泥片岩。E地区の第2号方形周溝墓盛土内より出土。

〈土製品〉

土製品は紡錘車、円板状土製品、土偶状土製品が出土した。他に土器片に線刻を入れたものもある。1・2は紡錘車である。1はほぼ円形を呈し、周縁部に対し、中央部がやや厚い。側面部は面をもつ。孔断面は真直であるが傾いている。器表面の摩滅が著しいが指頭圧による成形の後、ナゲ調整と思われる。孔は焼成前に一方から穿ち、他方に穿孔時の粘土の盛り上がりが見られる。最大径5.5cm、最大厚1.2cm、最大孔径0.8cm、重さ44gを測る。A地区の包含層より出土。2はほぼ円形を呈し、周縁部に対し、中央部がやや厚い。側面部のつくりは雑であるが面をもつ。2も1と同様の成形と調整法である。最大径4.3cm、最大厚1.0cm、最大孔径0.7cm、重さ22gを測る。C地区の包含層より出土。3～6は円板状土製品である。すべて不正円形を呈する。土器片を打ち欠いて円形にし、側面に部分的、あるいは全周に研磨を加え



第23図 石器・土製品・骨製品実測図(1/2)

ている。3はE地区の第2号方形周溝墓、4はG地区の包含層、5はA地区の溝11、6はG地区の溝16より出土。7は土偶状土製品である。円板状で一方に割れ口をもつ。調整はヘラケズリの後ヨコナデを加えている。指頭圧痕が残る。横幅3.8cm、厚さ0.7cmを測る。A地区の包含層より出土。8は線刻を加えた土器片である。外面はナデの後、線刻を入れている。内面は板ナデ。E地区の包含層より出土。

〈骨製品〉

12は骨製の刺突具である。先端および下部は欠損する。暗褐色を呈し、全体をよく研磨している。先端から1.5cmのところに入り込みが入り、先端部には斜め方向の条痕が見られる。裏面には縦方向の凹み部分がある。残存長8.5cm、幅0.7cm、厚さ0.5cmを測る。溝11より出土。

〈木製品〉

調査で出土した木製品は弥生時代中期のものである。出土量は少ない。溝や方形周溝墓の周溝内から出土した。製品は農耕具、生活用具、工具、用途不明木製品などがある。農耕具は狭鋏、平鋏、又鋏、長柄鋤、スコップ状鋤がある。また、農耕補助具の槌もある。生活用具は杓子、蓋、腰掛があり、工具は手斧の柄がある。以下、各々の木製品について記す。挿図の横断面に弧や同心円を入れた。これは模式的に年輪を表し、木取り法を示す。また、列点部分は焼けた痕跡を示す。

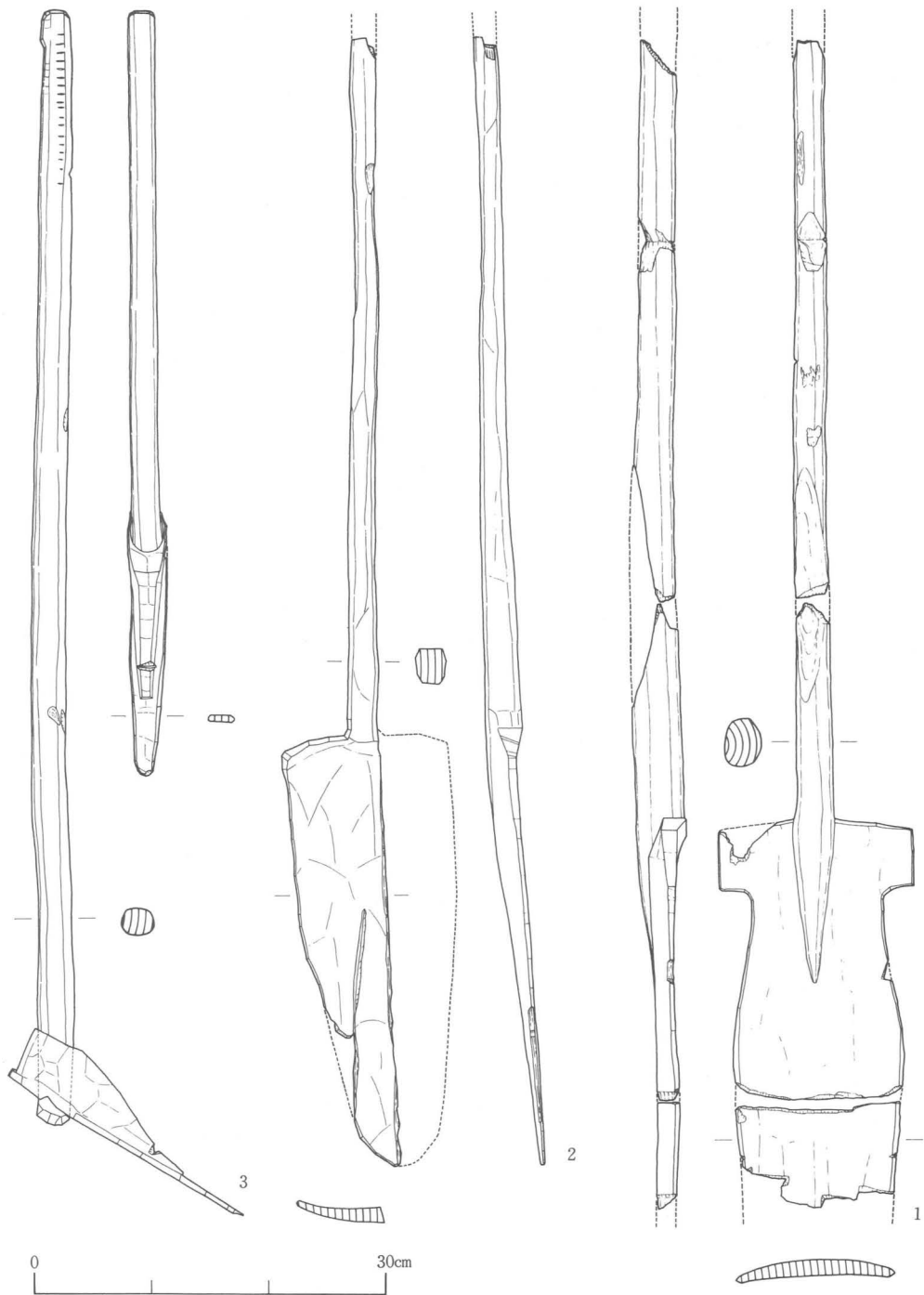
3は柄と身が完存しており、着柄状態が良くわかる狭鋏である。身幅は極度に狭く、舟形突起の幅とはほぼ等しい。頭部先端は長方形であり、刃部先端は薄く尖りぎみである。舟形突起は頭部先端から身の3/4まで伸びる。柄孔は楕円形を呈する。柄は舟形突起を内側にして挿入する。柄の握部先端は一辺を瘤状に削りだしており、これはすべり止めの工夫と考えられる。また、握部には長さ1cm、幅5～8mmの加工痕が顕著に残る。身は長さ23.5cm、最大幅3.4cm、最大厚0.8cmである。舟形突起は長さ13.2cm、最大幅4.6cm、最大厚3.4cmである。柄は長さ66.8cm、長径2.9cm、短径2.3cmである。着柄角度は舟形突起を内側にして121°である。溝16より出土。畿内第Ⅲ様式。

4は幅が狭く尖りぎみの頭部より、刃部にいくにしたがい幅広くなる平鋏である。平面形は三角形を呈する。身の1/2を欠損する。舟形突起は、頭部先端から身の3/4ほどまで伸びる。柄孔は楕円形を呈する。身は長さ19.3cm、現存幅7.9cm、最大厚1.6cmである。着柄角度は舟形突起を内側にして130°である。溝16より出土。畿内第Ⅲ様式。

5は柄の一部と身が残っており、着柄状態が判る平鋏である。身の平面形は長方形を呈し、頭部で最も幅が広く、刃部にいくにしたがい狭くなる。身の一面は中央部が隆起し、頭部や刃部にいくにしたがい薄くなる。反対面は平らである。柄孔は隅丸方形を呈し、柄は隆起面を内側にして挿入する。身の長さは28.3cm、最大幅11.8cm、最大厚2.4cmである。柄孔は長辺3.6cm、短辺3.4cmである。柄は現存長2cmである。着柄角度は隆起面を内側にして115°である。溝9より出土。畿内第Ⅱ様式。

6は身の平面形が半円形を呈する又鋏である。身の下端には本来4本の歯を削りだしていたが、現存するのは1本のみである。身の一面は中央部が隆起し、頭部や歯にいくにしたがい薄くなる。反対面は平らである。身の中央部に長方形の柄孔を穿つ。身の長さは9.4cm、最大幅13.6cm、最大厚2.1cmである。柄孔は長辺3.4cm、短辺2.1cmである。歯は長さ7.1cm、最大幅1.1cm、最大厚1.6cmである。着柄角度は平らな面を内側にして83°である。溝16より出土。畿内第Ⅲ様式。

1は一木よりなる長柄の鋤である。把手と刃部を欠損する。身は平面形が長方形を呈し、刃部にいくにしたがいやや幅広くなる。肩の下5.7cmの両側縁には逆L字形のえぐりを入れる。肩は少し下がりぎみで角ばる。身の横断面はゆるく湾曲する。柄は現存長67cm、長径4.2cm、短径3.1cmである。身は現存長33.2cm、最大幅16.8cm、最大厚2.4cmである。溝9より出土。



第24图 木製品実測図(1/6)

畿内第II様式。

2は一木よりなるスコップ状の鋤である。把手と身の1/2を欠損する。身は肩部で最も幅が広く、刃部にいくにしたがい狭くなる。肩はなだらかに下がる。身の横断面はゆるく弯曲する。柄は角ばる。柄は現存長59.5cm、長径3cm、短径2cmである。身は長さ36.7cm、現存幅8cm、最大幅2.6cmである。第3号方形周溝墓北東側周溝内より出土。畿内第II様式。

7は平面形がほぼ逆三角形を呈する鋤の把手である。把手より下は欠損する。孔は半楕円形を呈する。把手は現存長9.8cm、最大幅11.5cm、最大厚3cmである。第3号方形周溝墓北西側周溝内より出土。畿内第II様式。

8は槌である。長さ16cm、径3.8cmの一木に握部を削りだす。握部の先端は瘤状に削りだしており、これはすべり止めの工夫と考えられる。槌部は先端部と握部境の周辺だけを加工し他は自然面である。一部には樹皮が残る。握部は長さ6.2cm、径2.3cm、槌部は長さ9.8cmである。溝16より出土。畿内第III様式。

9は槌である。長さ31cm、径5.2cmの一木に握部を削りだす。槌部は先端部と握部境のみを加工し、他は自然面を残す。握部は長さ12.2cm、径2.5cm、槌部は長さ18.8cmである。全体的に摩滅が著しい。溝16より出土。畿内第III様式。

10は槌状を呈する木製品である。長さ18cm、径1.9cmの一木に握部を削りだす。一部を欠損するが握部の先端は瘤状に削りだしており、これはすべり止めの工夫と考えられる。槌部は先端部と握部を加工し、他は自然面である。握部は長さ8.9cm、径1.3cm、槌部は長さ9.1cmである。溝15より出土。畿内第III様式。

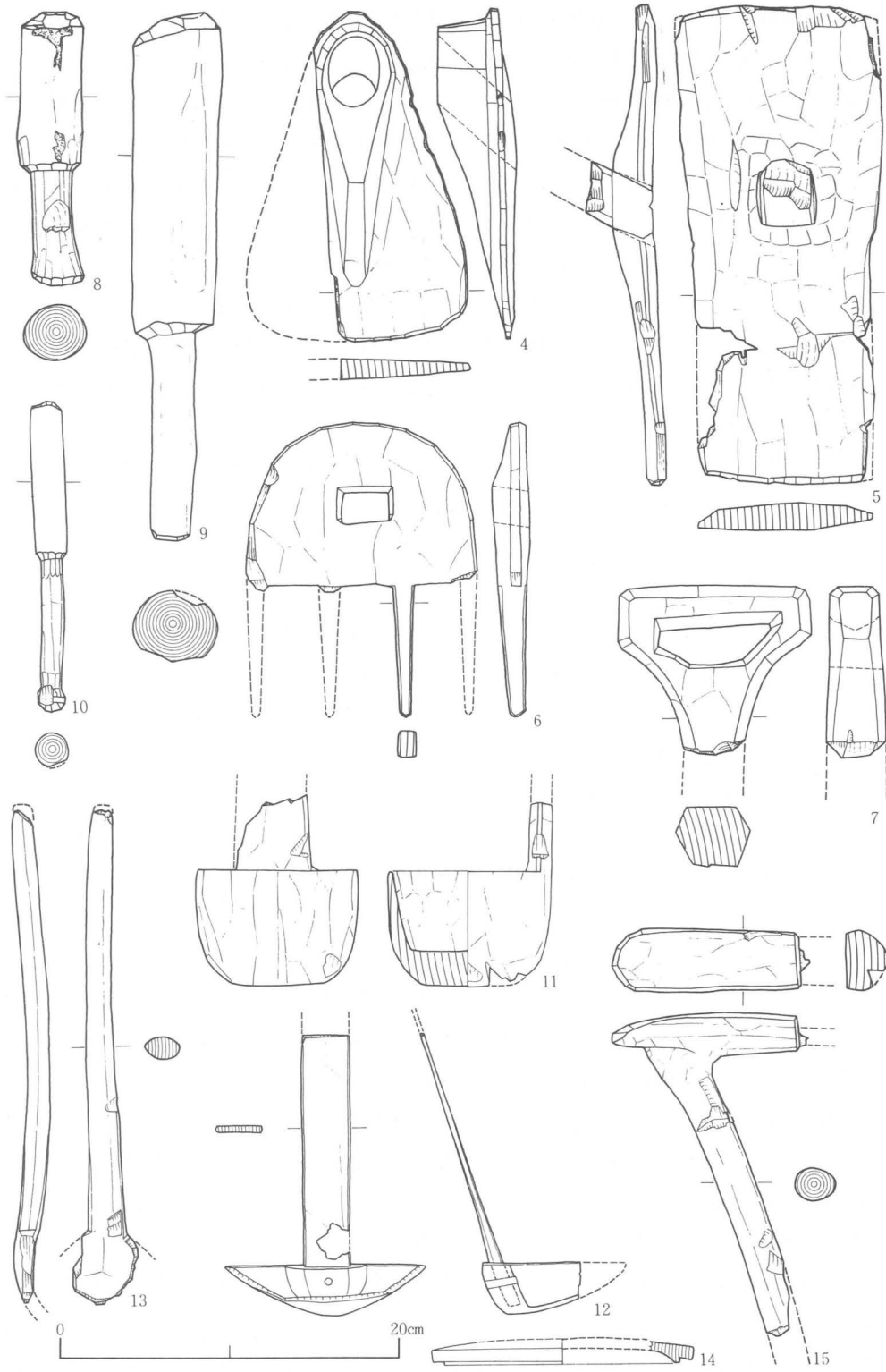
11は柄が身の口縁部に対して直角につく杓子である。柄の大部分は欠損する。身の底部は丸底にちかい平底である。底部の器壁は厚い。柄は幅広で、横断面が楕円形を呈する。身は口径9cm、高さ6.7cm、最大厚2.1cmである。柄は現存長4.3cm、現存幅4.4cm、最大厚1.4cmである。溝11より出土。畿内第II様式。

12は柄が身の口縁部に対してくの字状につく組合せ式の杓子である。柄と身の一部を欠損する。身は柄を挿入する部分の内側を厚くつくり、長方形の柄孔を穿っている。身の中ほどで径4mmの木釘で柄と身を止める。柄は現存長14.1cm、幅2.7cm、最大厚9mmであり、身に近い部分で最も厚い。身は口径12cm、高さ3cm、厚さ3mmである。身と柄の着柄角度は110°である。内外面に黒い漆状のものを塗る。溝15より出土。畿内第II様式。

13は杓子の柄である。柄の先端と身の大部分を欠損する。柄はわずかに弯曲して、横断面が楕円形を呈する。現存長は29cmであり、柄の長径2.1cm、短径1.4cmである。溝16より出土。畿内第III様式。

14は蓋である。体部はほぼ平らで口縁部が面をもつ。口縁部内面には幅3mmの凸帯を削りだす。外面に焼け痕が残る。復原径15.4cm、現存高1.8cm、最大厚8mmである。溝16より出土。畿内第III様式。

15は扁平片刃石斧の柄である。着装部と握部の一部を欠損する。基部は平坦に面を削りだし、



第25图 木製品実測図(1/4)

着装部を7mm低くつくる。着装部の長さは欠損のため不明である。握部と台部の境まで加工するが、握部は削らずに自然面を残す。横断面は台部が半円形、握部が楕円形を呈する。台部は現存長11.4cm、最大幅3.2cm、最大厚2.5cmである。握部は現存長18.2cm、長径2.3cm、短径1.9cmである。握部と台部の角度は56°である。溝9より出土。畿内第II様式。

16は手斧の柄である。台部と握部の一部を欠損する。また、握部は二つに割れて接合不可能であるが、同一個体である。台部の中央には稜線が残る。台部の一端に幅4mmの溝を切り込み、瘤状に形づくっている。これは紐結縛時のすべり止めの工夫と考えられる。握部と台部の境に幅3～4mmの帯状にくぼんだ痕跡が4ヶ所残っており、紐ずれ痕である。横断面は台部が半円形、握部が楕円形を呈する。台部は現存長13.6cm、最大幅4.5cm、最大厚2.6cmである。握部は現存長17cm、長径2.8cm、短径2.4cmである。握部と台部の角度は45°である。溝11より出土。畿内第II様式。

17は一木よりなる腰掛である。脚部と台部の一部が残っており、他は欠損する。全体的に腐食が激しく、加工痕が不明瞭である。脚部は八字形に開き、台部は中央でややくぼむ。現存長22cm、現存幅6.7cm、現存高5.4cmである。部分的に焼け痕が残る。溝11より出土。畿内第II様式。

18は上を円形、下を長方形に削りだした用途不明の木製品である。円形部と長方形部の境を欠損する。円形部の一面は隆起し、他の一面は平らである。長方形部は先端に向かって薄く削る。円形部は最大径3.2cm、最大厚1cm、長方形部は長さ4.2cm、最大幅2cm、最大厚7mmである。溝16より出土。畿内第III様式。

19は棒材の一端を逆L字形に切り込んだ用途不明の木製品である。全体的に腐食が激しい。横断面は多角形を呈する。最大長10cm、最大径2.5cmである。溝15より出土。畿内第II様式。

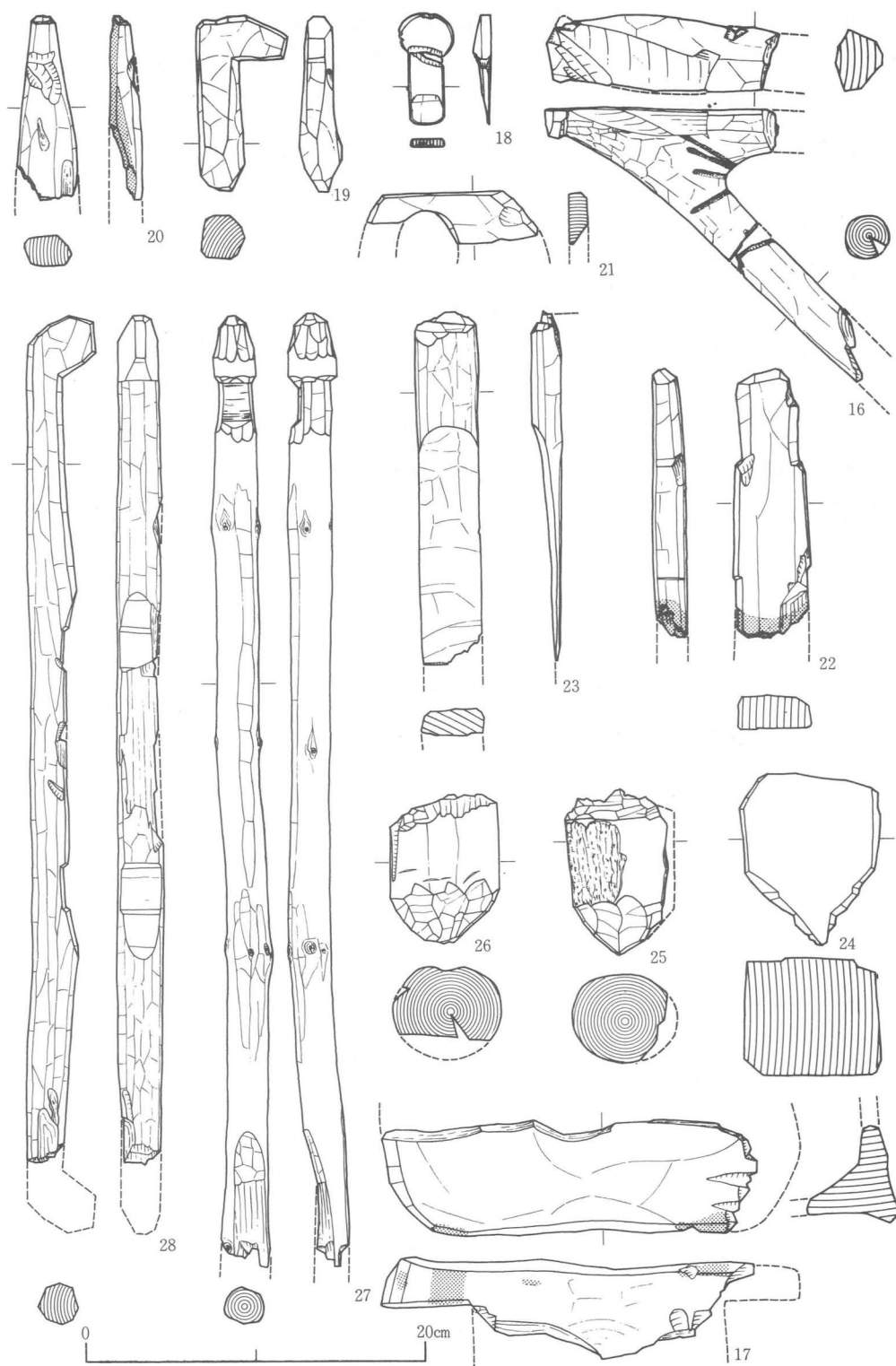
20は上より下にいくにしたがい幅広になる用途不明の木製品である。下端は欠損する。横断面は楕円形を呈する。一面には焼け痕が残る。現存長10.7cm、最大幅3.5cm、最大厚1.8cmである。溝11より出土。畿内第II様式。

21は上が平らで下にいくにしたがい弧を描きながら広がる用途不明の木製品である。板材の1ヶ所に斜め方向の円孔を穿つ。現存幅10.2cm、現存高3cm、最大厚1.1cmであり、円孔は推定径3.5cmである。溝16より出土。畿内第III様式。

22は板材の側面にえぐりを2対入れた用途不明の木製品である。下の部分は欠損する。えぐりは上より5.3cmと11.2cmの2ヶ所で深さ5mmほど入れる。下の部分には焼け痕が残る。現存長15.7cm、最大幅4.5cm、最大厚2cmである。溝11より出土。畿内第II様式。

23は角材の一面にえぐりを入れた用途不明の木製品である。裏面と下部を欠損する。現存長20.6cm、最大幅3.6cm、現存厚1.7cmである。第3号方形周溝墓北西側周溝内より出土。畿内第II様式。

24は角材の一端を尖らせた用途不明の木製品である。長さは10.1cm、最大幅8.1cm、最大厚6.9cmである。溝15より出土。畿内第II様式。



第26图 木製品実測図(1/4)

25は棒材の一端を尖らせた用途不明の木製品である。他の一端も削る。両端の間は加工せずに終わり、部分的に樹皮が残る。横断面が円形を呈する。長さ9.8cm、径5.5cmである。溝16より出土。畿内第Ⅲ様式。

26は棒材の一端を尖らせた用途不明の木製品である。他の一端も削る。両端の間は加工せずに終わり、自然面を残す。横断面は円形を呈する。長さ8.7cm、径6.4cmである。溝16より出土。畿内第Ⅲ様式。

27は一端を瘤状に削りだしている有頭棒である。一端を欠損するが削り方からみて、本来は両端に瘤状のものがあつたと推定される。瘤状を呈するところ以外は部分的に削り、自然面を残すところもある。現存長56cm、最大径2.8cmである。溝11より出土。畿内第Ⅱ様式。

28は用途不明の木製品であるが、機織具のちまきの可能性が高い。一端を瘤状に削りだしているが、本来は両端にあつたと考えられる。中央に長さ21.6cmのえぐりを入れる。えぐりは2段である。横断面は多角形を呈する。現存長49.8cm、最大径2.3cmである。溝11より出土。畿内第Ⅱ様式。

IV. まとめ

昭和50年より鬼虎川遺跡の本格的な調査を実施してきたが、今回で第12次調査になる。当遺跡は弥生時代前期～中期に大集落を形成していたらしく、広範囲にわたって遺構、遺物が発見されている。遺構は水田施設の一部と考えられる杭列や杭群、建物の柱、柱穴、土壇、溝、貝塚、壺棺墓、自然流路などがすでに発見されている。今回の調査地は当遺跡のほぼ北限に位置し、調査では大溝や方形周溝墓、土壇墓、木棺墓などの遺構を検出した。以下、今回の調査によって得られた知見を列記してまとめにかえておきたい。

1) 溝について

今回の調査では弥生時代の溝を7本検出した。大部分の溝は東西方向か、南東から北西方向に延びている。A～C地区で検出した溝11は第Ⅱ様式の時期であり、幅5m、深さ1.2～1.3mを測る大規模な溝である。溝11より東の地区では方形周溝墓、土壇墓、木棺墓などの遺構を検出したが、集落と結びつくような建物跡や井戸などの遺構は存在しなかった。今回までの調査例によると、第4～7次調査地の地点で建物跡や井戸などの遺構が発見されており、溝11より南側に集落の中心が広がっているものと思われる。

また、溝11より東の溝15や溝16の溝肩に木の株が残っているのを確認した。両溝内は下層に粘土層、上層に砂層が堆積していた。溝は一時的に砂の堆積によって埋まり、以後、使用されなくなったものと思われる。木の株の出土状況であるが、木の根が砂層内に入っておらず、すべて溝肩内に伸びている。このことから、溝が砂によって埋まった後に木が植わっていたのではなく、溝が使用されていた時期に植わっていたものと思われる。また、木が植わっている時期の溝内の堆積物をみると、一定量の水が溜まっていたものと思われる。樹種鑑定の結果によると、木の種類はクマシデ属、カシ類、ムクノキ、ケヤキ、ヤマグワ、イヌエンジュ属の多種に及んでいる。当時、溝肩に点々と木が植わっていた状況が想像できる。

2) 墓について

今回の調査で検出した溝11より北及び東の地区では、方形周溝墓、木棺墓、土壇墓などの弥生時代の墓を検出した。方形周溝墓は第Ⅱ～Ⅲ様式のを6基、詳細な時期は不明であるが、中期の木棺墓を1基、第Ⅳ様式の土壇墓を1基検出した。溝11の南に集落が広がっているのに対し、北及び東の地区には墓が集中しており、鬼虎川遺跡の墓域が一带に広がっているものと思われる。また、昭和41年に当地点より南300mの位置で木棺の底板と側板が採集されており、今回の調査地だけでなく、南側にも他の墓域が存在する可能性がある⁽¹⁰⁾。第7次調査では集落内に位置するところで新生児骨を納めた壺棺墓が1基検出されており、すべての遺体が一定の墓域に埋葬されるとは限らないことが判明した⁽¹¹⁾。

今回の調査で確認した方形周溝墓は、調査範囲が限られており全形を知り得たものは第2号方形周溝墓と第6号方形周溝墓の2基にすぎない。主体部の数は第1号方形周溝墓は0基、第2号方形周溝墓は2基と犬1体、第3号方形周溝墓は0基、第4号方形周溝墓は1基、第5号

方形周溝墓は2基、第6号方形周溝墓は1基であった。その中で木棺の遺存しているものは3基であった。他は長方形の墓塚を検出したが、その規模から、木棺を使用していたものと考えられる。木棺の組み合わせが観察されるものは2例あり、第2号方形周溝墓第2主体部の小児用と、第5号方形周溝墓第1主体部の成人用がある。共に長方形の墓塚を掘り、さらに両小口部を1段低く掘り込み、小口板を埋めた形式のものである。瓜生堂遺跡などに類例があり、II-a、II-b形式に分類されているものに比定できる。⁽¹²⁾当遺跡の例は側板の遺存状態が悪いので、両形式のいずれになるかは不明である。

木棺材はコウヤマキを使用することが多いが、今回の調査で出土した木棺は第2号方形周溝墓第2主体部のものは西側板はケヤキ、上蓋・東側板・南北小口板・底板はヒノキを使用していた。第5号方形周溝墓第1主体部の南北小口板はコウヤマキ、他はヒノキを使用していた。また、第2主体部は上蓋の破片ではあったがヒノキである。瓜生堂遺跡ではII形式の木棺にコウヤマキ以外の樹種を使用する機会が多いことが指摘されており、モミ、ヒノキ、クスノキなどが使われていることがわかっている。第101号墓1号木棺では3種類の樹種の異なるもので組み合わせている。鬼虎川遺跡の木棺も瓜生堂遺跡と同様のII形式に属し、樹種も一部にコウヤマキが使用されているものの、他はヒノキやケヤキである。また、1種類の樹種ではなく、複数のもので組み合わせていることなどの類似点があげられる。II形式に属するものは発見も少なく、今後の調査によって樹種の違いがあきらかになっていくことを期待したい。

人骨の遺存状態は良好であり、埋葬姿勢を確認できたものすべてが仰臥屈肢であった。时期的には第6号方形周溝墓が第Ⅲ様式であり、他の方形周溝墓が第Ⅱ様式である。第Ⅳ様式の土塚墓は頭骨しか残っていなかったもので、埋葬姿勢は不明であるが、少なくとも第Ⅱ～Ⅲ様式の間は仰臥屈肢で埋葬がなされていたと考えられる。他遺跡では伸展葬が中心であるのに比して当遺跡では仰臥屈肢であるのが特徴である。また、仰臥屈肢による埋葬は木棺にも影響を与えており、伸展葬に使用される木棺は長さが2m前後のものが多いのに対し、当遺跡の木棺は成人用でも1m前後である。小児用のものになるとさらに小形になる。

また、方形周溝墓には供献用土器が盛土上や周溝内から発見されることが多いが、当遺跡の例をみると1つの方形周溝墓に1個～3個ほどしかなく、非常に数が少ないことが指摘できる。器種も壺、甕、高杯などが使用されている。

今回の調査で鬼虎川遺跡の墓域を確認したのは大きな成果である。また、弥生時代の墓制を考えるうえで、仰臥屈肢で埋葬する当遺跡の例は、時期や地域性を明らかにするための重要な資料となることを期待したい。

文 献

- 註1 那須孝悌・樽野博幸・下村晴文・才原金弘『鬼虎川遺跡調査概要Ⅰ』1980 東大阪市遺跡保護調査会
- 註2 上野利明「東大阪市長田・恩智川間の遺跡確認調査」『調査会ニュース』No.18 1981 東大阪市遺跡保護調査会
- 註3 梶山彦太郎・市原 実『統大阪平野発達史』1985 古文物学研究会
- 註4 那須孝悌・樽野博幸他『河内平野の生いたち』1981 大阪市立自然史博物館
- 註5 註2に同じ
- 註6 註1に同じ
- 註7 註1に同じ
- 註8 那須孝悌・樽野博幸・芋本隆裕・松田順一郎他『鬼虎川遺跡第7次発掘調査報告3—遺構編—』1984 (財)東大阪市文化財協会
- 註9 福永信雄(東大阪市教育委員会)の教示による。近刊予定。
- 註10 島田義明「弥生時代木棺の一資料」『河内考古学』1 1967 河内考古学研究会
- 註11 註8に同じ
- 註12 今村道雄・安部幸一・曾我恭子他『瓜生堂遺跡Ⅲ』1981 瓜生堂遺跡調査会

V. 鬼虎川遺跡第12次調査出土人骨および犬骨について

大阪市立大学医学部解剖学第二講座 多賀谷 昭
安部みき子

弥生中期の方形周溝墓から成人3体、小児3体、周溝を伴わない土塚墓と木棺墓から成人、若年者各1体の人骨が出土した。成人骨のうち、性別が判定できたものは男性・女性それぞれ1体で、残る2体の性別は不明である。保存状態は全般に良くないが、成人男性と判定された人骨は比較的よく保存されており、その特徴を調べることができた。また、人骨として鑑定を依頼された遺物のうち、方形周溝墓の木棺の一つから出土した骨はイヌのものであった。鑑定は、人骨については多賀谷が、犬骨については安部が分担した。

第2号方形周溝墓第1主体部人骨

北東—南西方向に置かれた木棺の中央から北東端にかけて上肢骨の一部と下肢骨の大部分が残存する。上肢骨では左上腕骨遠位1/2、左尺骨肘頭、左橈骨骨体、下肢骨では左右の寛骨、大腿骨、脛骨、腓骨のいずれも骨体が残存し、これ以外に足根骨および中足骨と思われる骨片が数片存在する。骨はほぼ原位置にあり、頭位は南西である。上肢は両肘を伸ばし、下肢は股関節を伸ばして両膝を完全に屈した状態で埋葬されていた。

保存状態は全体にあまり良くないが、そのうちでは左右の大腿骨が比較的良く保存されており、その大きさおよび筋付着部の発達程度からすると女性である可能性が大きい。骨の表面の状態からみて成人と推定されるが、より詳細な年齢を推定するための手がかりを欠いている。

第2号方形周溝墓埋葬犬骨

第1主体から北西に約1m離れてこれと平行して掘られた長さ約75cm、幅約30cmの土塚の南西端付近からイヌの頭蓋骨が出土している。土塚内には木棺が存在したものと推定されている。頭蓋骨は下顎骨を欠いており、頭蓋底を上に向けていた。骨の保存は極めて悪く、左上顎第4前臼歯槽付近を除くと、辛うじてその輪郭を認めることができるにすぎない。残存する歯は、左の上顎第4前臼歯と第1後臼歯とともに歯冠の一部のみであるが、比較的良く保存されている。歯の大きさから、体の大きさは長谷部の中小型犬に相当するものと推定される。

第2号方形周溝墓第2主体部人骨

北北東—南南西方向に置かれた木棺内に、南南西を頭位とし、おそらく仰臥位で埋葬されたと推定される小児骨が残存する。

残存部位としては、頭蓋骨の他、四肢の長骨と推定される骨片がいくつか存在する。頭蓋骨では後頭骨、蝶形骨、左頭頂骨のそれぞれ一部と下顎骨体が存在する。下顎骨には乳歯が釘植

し、また未萌出の永久歯が骨内にある。これら以外に、上顎の乳歯と永久歯が遊離して存在する。歯式を下に示す。

\diagup M ₂ M ₁ P ₂ P ₁ C I ₂ I ₁	I ₁ I ₂ C P ₁ P ₂ M ₁ \diagup \diagup
m ₂ m ₁ c i ₂ \diagup	\diagup \diagup \diagup m ₁ m ₂
m ₂ m ₁ c i ₂ \diagup	\diagup i ₂ \diagup m ₁ m ₂
\diagup \diagup M ₁ P ₂ P ₁ C I ₂ I ₁	I ₁ I ₂ C P ₁ P ₂ \diagup \diagup \diagup

(○：歯槽開放、 \diagup ：欠損、△：歯根のみ。以下同じ。)

永久歯はいずれも歯冠のみが形成されており、年齢は3ないし4歳と推定される。性別の判定はできない。

土塚と木棺の長さはそれぞれ約100cmと約90cmで、この年齢の身長に近く、伸展位での埋葬が可能であったと推定されるが、下肢骨は股関節、膝関節ともかなり強く屈曲した状態で出土している。なお、上肢は両肘を直角に近く曲げていたものと考えられる。

第4号方形周溝墓主体部人骨

南西－北東方向の土塚の南西端付近に頭蓋骨と歯だけが残存する。残存部位は上・下顎骨、後頭骨、右側頭骨であるが、いずれも変形と風化が著しい。上・下顎骨には乳歯が釘植しており、骨内に未萌出の永久歯を入れている。下に歯式を示す。

\diagup \diagup M ₁ P ₂ P ₁ C I ₂ \diagup	I ₁ I ₂ \diagup P ₁ P ₂ M ₁ \diagup \diagup
m ₂ m ₁ c i ₂ i ₁	i ₁ i ₂ \diagup m ₁ m ₂
m ₂ m ₁ c i ₂ i ₁	i ₁ i ₂ c m ₁ m ₂
\diagup M ₂ M ₁ \diagup P ₁ C I ₂ I ₁	I ₁ I ₂ C \diagup \diagup M ₁ \diagup \diagup

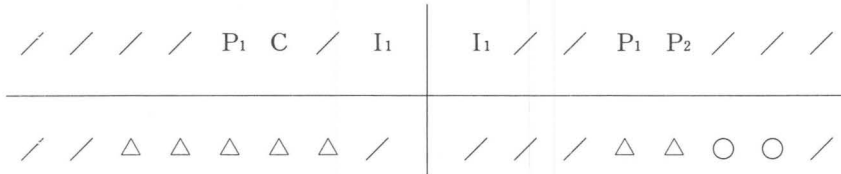
切歯、犬歯、小臼歯は歯冠の形成が完了し、第1大臼歯は歯根の基部まで形成が進んでいるので、年齢は4ないし5歳と推定できる。性別は判定できない。

第5号方形周溝墓第1主体部人骨

北東－南西方向に置かれた木棺内に、成人骨が南西を頭位として埋葬されていた。今回の調査で出土した人骨の中では最も良く保存されており、残存する骨はほとんど全てが原位置を保っている。埋葬姿勢は仰臥位で、顔面を上方に向け、右上肢は肘関節を約60°に屈して手を胸に

載せ、下肢は左右とも膝関節を強く屈して立て膝のかたちをとっている。

左の上腕と前腕を除いたほぼ全身にわたる骨が残っているが、多くの骨は風化と土圧による変形が著しく、取り上げて復原することができたのは、脳頭蓋、歯、四肢長骨の骨幹部のみである。残存する歯は下に示す通りで、抜歯の有無は不明である。



性別については、大坐骨切痕が狭く、乳突上隆線や粗線などの筋付着部がよく発達していることから男性と判定できる。主三縫合の内板は完全に閉鎖し、外板も半ば閉鎖している。歯は何れも象牙質が面状に露出している。これらのことから、年齢は熟年の前半（40代）と推定される。最大長を計測できる長骨は残っていないが、右大腿骨は、発掘時の概測値、残存部位からの推定値ともに約43cmで、Pearson 式による推定身長は約162cmとなる。

頭蓋骨と四肢骨の計測値を第1、2表に示す。頭骨は顔面が計測できないが、脳頭蓋は幅高示数で中頭に属し、最大長の値がやや不確実であるが、長幅・長高示数では中頭・高頭に属している。上腕骨は骨端を欠くが、残存部からその最大長は30cmを越えるものと推定され、きゃしゃで、三角筋粗面の発達は弱い。大腿骨は軽度ないし中程度の柱状性を示し、強大である。一方、脛骨の中央断面示数は大きく、扁平性は見られない。これらの特徴は縄文人とは異なっており、土居ヶ浜を含む北九州地方の弥生人と共通している。

第5号方形周溝墓第2主体部人骨

北東—南西方向に置かれた木棺内の南西端付近に頭蓋骨が残存する。これ以外に、中央部には上肢の長骨、南西端付近には下肢の長骨と推定される骨片がそれぞれ残存するが、これらの長骨は何れも風化が著しく、取り上げて観察することができなかった。骨は何れも原位置を保っている。南西を頭位とする仰臥位で埋葬され、下肢は股関節、膝関節ともかなり強く屈曲していたものと思われる。

頭蓋骨はほぼ全体が残存するが、頭蓋冠は圧平されて破損しており、顔面は上顎骨の歯槽部と下顎骨のみが残存する。また、いずれの骨も風化と変形が著しい。一方、歯は良く保存されており、歯式は下の通りである。永久歯は何れも未萌出で、第1大臼歯は歯冠のみが形成され、切歯、犬歯、小臼歯は歯冠の形成が完了していない。

／	／	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	／	P ₁	P ₂	M ₁	／	／
		m ₂	m ₁	／	／	／	／	／	／	m ₁	m ₂				
		m ₂	m ₁	c	i ₂	i ₁	i ₁	i ₂	c	m ₁	m ₂				
／	／	M ₁	／	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	／	M ₁	／	／

死亡時の年齢は、永久歯の形成状況から、3ないし4歳と推定できる。この年齢の身長はほぼ90cmから100cmで、土塚の長さ（約70cm）に比べてはるかに大きいので、下肢を屈曲していたものと考えられ、人骨の出土状況もこれと一致している。

第6号方形周溝墓人骨

北東—南西方向の土塚内に北東を頭位とする人骨が仰臥位で埋葬されていた。保存は全般に不良であるが、下肢骨では比較的良く、頭方に向かって悪くなり、頭蓋骨は残っていない。

残存部位は、胴骨では右中位肋骨と左下位肋骨の破片が各2個存在し、上肢骨では骨頭を欠いた左上腕骨の他、おそらく左橈骨および右上腕骨と思われる長骨の破片が存在するが、確実な同定はできない。下肢骨では、左寛骨の腸骨翼前半部および恥骨下枝を除いた部分、左右大腿骨の骨体のはほぼ全部分、左右脛骨の骨体中央部が存在し、さらに、左右は同定できないが、腓骨と思われる骨片が存在する。人骨の配置は全体としてはほぼ原状を保っているが、脛骨は左右ともその遠位端を大腿骨の遠位端に近く位置させており、明かに埋葬時の状態から動いている。この状態は立て膝で埋葬されたとすれば説明がつく。

骨の大きさと表面の状態から、成人であることは確実であるが、詳細な年齢は推定できない。性別は判定できない。

H地区土塚墓人骨

北西—南東方向の土塚墓の北西端付近から成人の頭蓋骨が右側頭部を上に向けて出土した。土塚墓の他の部分は未発掘である。顔面と頭頂部を除く部分が残存するが、風化が著しく、取り上げることができたのは上・下顎骨に釘植していた歯の歯冠のみである。下にその歯式を示す。

／	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	／	C	／	／	／	／	／
／	／	／	／	P ₁	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／

第1・第2大臼歯は咬耗によって象牙質が点状に露出しており、年齢は壮年前半（20代）と

推定される。性別は判定できない。

C地区木棺墓人骨

北西—南東方向の木棺墓から頭位を北西とする人骨が出土している。取り上げて調べることができたのは歯のみである。歯式を下に示す。

/ / / / / / / / I ₁	I ₁ I ₂ / P ₁ P ₂ / / / /
/ / / P ₂ P ₁ C I ₂ /	/ / C P ₁ P ₂ / M ₂ /

咬耗はごく弱く、左下顎第2大臼歯では、エナメル質のみに点状の摩耗が認められるにすぎない。年齢は15歳前後と推定される。

文 献

- 永井昌文・他、1985：土井ヶ浜遺跡第9次調査出土人骨。山口県埋蔵文化財センター編、土井ヶ浜遺跡第9次発掘調査概報。豊北町教育委員会。
- 清野謙次・宮本博人、1926：津雲貝塚人人骨の人類学的研究、第2部 頭蓋骨。人類学雑誌第41巻第3、4号。
- 清野謙次・平井隆、1928：津雲貝塚人人骨の人類学的研究、第3部 上肢骨の研究。人類学雑誌第43巻第3付録。
- 清野謙次・平井隆、1928：津雲貝塚人人骨の人類学的研究、第4部 下肢骨の研究。人類学雑誌第43巻第4付録。
- 長谷部言人、1952：犬骨。埋蔵文化財発掘調査報告第1号「吉胡貝塚」、146—150。文化財保護委員会。

	4号墓人骨(♂)	土井ヶ浜弥生人(♂)		津雲縄文人(♂)	
		n	M	n	M
1	頭骨最大長 (184)	52	182.8	16	186.4
2a	ナジオン・イニオン長 (168)			15	165.3
3	グラベロ・ラムダ長 (182)			16	181.3
5	頭骨底長 (104)			13	103.4
8	頭骨最大幅 143	54	142.6	18	144.4
9	最小前頭幅 (97)			18	95.5
10	最大前頭幅 115			15	120.9
11	両耳幅 126			16	125.2
12	最大後頭幅 113			15	114.0
13	基底幅 (106)			16	106.1
17	バジオン・ブレグマ高 138	43	134.7	13	134.0
20	耳ブレグマ高 120			16	112.9
23	頭骨水平周 (524)	44	526.8	15	532.3
24	横弧長 325	50	315.2	16	310.3
26	正中矢状前頭弧長 133			17	121.9
27	正中矢状頭頂弧長 133			17	130.9
28(1)	正中矢状上鱗弧長 71			16	85.8
29	正中矢状前頭弦長 116			17	108.9
30	正中矢状頭頂弦長 117			17	117.2
31(1)	正中矢状上鱗弦長 67			16	77.5
71	下顎枝幅(左) 36			18	33.7
8/1	頭骨長幅示数 (77.7)	48	78.1	16	77.7
17/1	頭骨長高示数 (75.0)	42	73.7	13	71.6
17/8	頭骨幅高示数 96.5	43	94.3	13	92.2

第1表 頭蓋骨計測値表

	4号墓人骨(♂)		土井ヶ浜弥生人(♂)		津雲縄文人(♂)	
	左	右	n	M(左)	n	M(左)
上腕骨						
5		22	53	22.6	20	23.7
6		17	54	17.2	20	17.7
7		61	53	64.5	21	64.7
7a		66			20	68.8
6/5		77.3	53	77.4	20	74.6
大腿骨						
6	32	30	53	28.6	20	28.9
7	29	28	53	26.6	20	25.5
8	95	92	54	87.4	20	86.6
9		34	51	32.9	19	30.4
10		28	51	25.8	19	24.8
6/7	110.3	107.1	53	107.7	20	113.2
9/10		82.4	51	79.4	19	81.7
脛骨						
8	30	30	50	29.6	21	31.3
9	22	22	50	21.2	21	19.7
10	82	82	50	81.4	20	82.5
10b	75	75	44	74.8	17	75.6
9/8	73.3	73.3	50	70.9	21	62.4

第2表 四肢骨計測値表

VI. 鬼虎川遺跡より出土した棺材の樹種

京都大学名誉教授 島地 謙
 京都大学木材研究所 林 昭三
 伊東隆夫

鬼虎川遺跡第12次調査（東大阪市西石切町5丁目）において、弥生時代中期の方形周溝墓から発掘された棺のうち、第5号方形周溝墓第1主体部、第2号方形周溝墓第2主体部については、それぞれ4側面と上蓋板、底板の計6点ずつ、第5号方形周溝墓第2主体部の棺については上蓋板1点、合計13点の供試材について樹種の識別を行なった。13供試材のうち11点については、木口、柾目、板目の3断面をハンドセクション法により、また劣化のとくに著しい2点についてはセロイジン包埋法により、切片を作製、アルコールシリーズで脱水、キシレンで透徹をしたのち、ビオライトで封入した永久プレパラートとして顕微鏡観察により樹種の識別を行なった。その結果は第3表のとおりである。

	第5号墓第1主体部	第2号墓第2主体部	第5号墓第2主体部
上蓋板	ヒノキ	ヒノキ	ヒノキ
西側板	ヒノキ	ケヤキ	
東側板	ヒノキ	ヒノキ	
南小口板	コウヤマキ	ヒノキ	
北小口板	コウヤマキ	ヒノキ	
底板	ヒノキ	ヒノキ	

第3表 棺材樹種一覧

各試料別の観察結果は以下のとおりである。

第5号方形周溝墓第1主体部（成人棺）

〈上蓋板〉（試料No.1）

針葉樹材で樹脂細胞が散在し、樹脂道は認められない。年輪界における晩材の幅は狭く、早材から晩材への移行も急ではない（写真1）。写真1の空隙は乾燥による割れである。放射組織は単列で、高さは2～13細胞である（写真2）。分野壁孔は多少とも劣化して大きく開いていたが、ヒノキ型のものが一つの分野に1～2個存在している（写真3）。放射仮道管や水平樹脂道は認められない。以上の結果からヒノキ（*Chamaecyparis obtusa*）と同定した。

〈西側板〉（試料No.2）

垂直樹脂道のような空隙が木口面で認められたが、これは乾燥によるものである。樹脂細胞

が散在し、早材から晩材への移行は緩やかである。分野壁孔の劣化は著しく、スギ型のように見える部分もあるが、仮道管の有縁壁孔の著しい烈火状態から推察して、またごくまれにヒノキ型分野壁孔が残っていることから、この材はヒノキ (*Chamaecyparis obtusa*) であると同定した。

〈東側板〉 (試料No. 3)

晩材の幅はきわめて狭いが、樹脂細胞の分布数は上記の上蓋板、西側板と比較して、偽年輪的なものが存在するためか、かなり多い (写真4)。分野には平均2個の壁孔があるが、劣化してスギ型に見える部分もある。放射組織は単列で高さは3~8細胞である。以上の観察結果を総合してこの材はヒノキ (*Chamaecyparis obtusa*) と同定した。

〈南小口板〉 (試料No. 4)

樹脂道も樹脂細胞も認められない針葉樹材である (写真5)。樹脂道のような孔隙が散見されたが、これは二次的に発生した異常組織で木材本来の構造ではない (写真15参考)。放射組織は単列で、高さは3~10細胞あり、分野の壁孔は窓状で、一つの分野に1~2個存在する (写真6)。放射仮道管は存在しない。以上の結果からコウヤマキ (*Sciadopitys verticillata*) と同定した。

〈北小口板〉 (試料No. 5)

樹脂道も樹脂細胞もない (写真7)。仮道管の有縁壁孔は比較的良好な状態で残っている。放射組織は単列で3~10細胞高ある。放射仮道管はなく、分野壁孔は1~2個の大きい窓状壁孔である (写真8)。この材の樹種はコウヤマキ (*Sciadopitys verticillata*) と同定した。

〈底板〉 (試料No. 6)

乾燥による割れが生じているが、樹脂道はなく、樹脂細胞が散在しており、晩材の幅はきわめて狭い (写真9)。仮道管の壁孔も分野の壁孔もその縁の劣化が著しく、分野壁孔はスギ型に見えるが、実際にはヒノキ型の内孔口部が劣化してスギ型に変化したと考えられる。放射組織は単列で、高さは2~8細胞ある。仮道管は多少とも丸みを帯び、細胞間隙も多く認められ、あて材を形成している。以上の観察結果よりヒノキ (*Chamaecyparis obtusa*) と同定した。

第2号方形周溝墓第2主体部 (小児棺)

〈上蓋板〉 (試料No. 7)

早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は小さく、樹脂細胞が散在していた。壁孔縁の劣化が著しく、スギ型分野壁孔のように見える部分もあるが、本来はヒノキ型であり、それが確認される部分もある (写真10)。放射組織は単列で、高さは2~13細胞である。以上の結果

からこの材はヒノキ (*Chamaecyparis obtusa*) と同定した。

〈西側板〉 (試料N o. 8)

広葉樹材で、年輪界に沿った道管の大きい環孔材である。乾燥により接線方向に収縮した道管もあったが、孔圏の道管は1列で、まれに2~3列になる(写真11)。孔圏外の小道管には螺旋肥厚があり、接線状ないし波状の紋様状に集合している。柔細胞は独立に分布し、放射組織は異性で(写真12)、周辺部の大きい細胞には結晶が認められる(写真13)。道管内には樹脂様の着色物質が存在するものがある。これらの結果からこの材はケヤキ (*Zelkova serrata*) と同定した。

〈東側板〉 (試料N o. 9)

樹脂道がなく、樹脂細胞がわずかに散在している。早材から晩材への移行はやや緩で、晩材の幅はきわめて狭い(写真14)。分野には平均2個の壁孔があるが、スギ型と観察されるものが多い。しかし仮道管有縁壁孔の劣化が著しいことから考え、分野壁孔でも同様の劣化が生じているとすれば、早晩材の移行や樹脂細胞の分布数などを考えあわせると、元来はヒノキ型であったものが劣化してスギ型になったとするのが妥当である。放射組織は単列で、高さは2~10細胞ある。これらの結果、この材はヒノキ (*Chamaecyparis obtusa*) と同定した。

〈南小口板〉 (試料N o. 10)

樹脂細胞が散在している。晩材の幅はきわめて狭い。樹脂道のような空隙があり、その中に異常構造が認められた(写真15)。これは木材本来の組織ではなく、二次的に形成された異状組織である。分野壁孔は劣化がとくに著しいためか認めにくい。菌糸の侵入も大きく、仮道管の有縁壁孔もかなり激しく破壊されており、仮道管二次壁に螺旋構造が認められる(写真16)。これはあて材の構造とは異なったもので、壁の劣化によってフィブリルの走向が出現したものと考えられる。すなわちこの試料では細胞の内表面の劣化が他の試料よりとくに激しく、分野壁孔も完全に破壊されたと考えられる。放射組織は単列で、高さは2~11細胞ある。以上の結果を総合して、この材はヒノキ (*Chamaecyparis obtusa*) と同定した。

〈北小口板〉 (試料N o. 11)

劣化が著しく、極度に軟化しているため、セロイジン包埋によって切片を作製した。早材から晩材への移行は緩やかで、樹脂細胞が散在している。分野には平均2個の壁孔があるが、劣化のために外孔口部を残すのみで、型の区別は困難である。ごくまれにヒノキ型のように認められる部分がある。放射組織は単列で、高さは3~8細胞ある。この材の樹種はヒノキ (*Chamaecyparis obtusa*) と同定した。

〈底板〉（試料No.12）

樹脂細胞が散在し、樹脂道は認められない。晩材幅は狭く、早材から晩材への移行は緩やかである。分野壁孔はヒノキ型で、部分的には劣化によりスギ型に変形したものもある。放射組織は単列で、高さは3～11細胞ある。この材の樹種はヒノキ（*Chamaecyparis obtusa*）と同一とした。

第5号方形周溝墓第2主体部（小児棺）

〈上蓋板〉（試料No.13）

乾燥と落込みによる変形が著しく、試料がきわめて薄くなっていたため、セロイジン包埋によって切片を作製した。樹脂細胞が散在しており、そこから晩材にかけての移行は緩やかで、晩材幅も狭いように思われる。早材部分は落込みのために完全に崩壊し、細胞の形態を留めるものは見当たらないし、晩材の細胞もかなり収縮していると考えられ、放射組織も直角に曲げられている（写真17）。したがって柁目切片にも放射組織の接線断面が単列に現れており、分野壁孔も観察することが不可能で（写真18）、適確な樹種の判定は困難であるが、いろいろの見知から総合してヒノキ（*Chamaecyparis obtusa*）であると考えられる。

以上3つの棺の13試料について樹種の識別を行なった結果、10点がヒノキ、2点がコウヤマキ、1点がケヤキであった。第5号方形周溝墓第1主体部（成人棺）の南北両小口板がコウヤマキであり、発掘時に他の部材と比較して保存状態が良好であったということは既往の通説とよく一致している。すなわちコウヤマキは耐朽、保存性は中庸であるが、よく水湿に耐え、また加工も容易であることから、古くから耐水湿用材として定評のあるところであり、古墳などの棺材は多くがコウヤマキを使用しており、ヒノキやスギなどはかえって少ない。しかし今回の鑑定結果ではコウヤマキは13点のうちわずか2点のみで、大部分がヒノキであった。またケヤキは国産広葉樹の中では第一級の優良材であるが、関西地方で出土した棺材では今までに報告された例がなく、これが最初のものである。ただ第5号方形周溝墓第1主体部（成人棺）も第2号方形周溝墓第2主体部（小児棺）も同一樹種の材を全面に用いていないことは興味のある点ではあるが、その理由は判らない。多分手近にあった板材を用いて棺を作ったものと想像する。

Ⅶ. 鬼虎川遺跡より出土した根材の樹種

京都大学名誉教授 島地 謙

京都大学木材研究所 林 昭三

伊東隆夫

鬼虎川遺跡第12次調査（東大阪市西石切町5丁目）において、発掘された溝肩に成育していた10本の樹木の根の部分から試料を採取した。それぞれの試料から、木口、柾目、板目の3断面の切片をハンドセクション法により作製、アルコールシリーズで脱水、キシレンで透徹したのち、ビオライト封入した永久プレパラートとして顕微鏡観察により樹種の識別を行なった。各試料ごとにその結果を述べると以下のとおりである。

試料No.0

広葉樹材。根株材であるため正常な樹幹材ほど確実な年輪は認めにくいが環孔材である（写真1）。また年輪幅が狭く、ぬか目の様相を呈している部分もある（写真2）。孔圏道管の大きさは200ミクロン程度の中庸の大きさで、孔圏の道管は1列、穿孔は単一である。孔圏外の小道管は螺旋肥厚があり、接線状、波状に集合して紋様状に配列をしている。放射組織はほとんど同性で（写真3）、1～6列の幅をもつ（写真4）。放射柔細胞には結晶はない。以上の観察結果からこの材はイヌエンジュ属の一種（*Maackia* sp.）で、この属の現在の分布状態から考えるとハネミイヌエンジュ（*M. floribunda*）ではないかと思われる。

試料No.1

放射孔材。道管の直径は、半径方向200ミクロン、接線方向100ミクロン程度で、年輪界を横切って単独で放射状に分布する（写真5）。放射組織は単列のものと集合のものとがあり、いずれも同性である（写真6）。柔細胞は接線状に分布する。以上の観察結果からこの樹種は常緑カシ類の一種（*Quercus* sp. Subgen *Cyclobalanopsis*）と同定した。ただし材の識別のみではカシ類のうちどの種であるかは判らない。

試料No.2

供試材の一部に乾燥のために落込みを生じた部分があった。はっきりした孔圏は示さないが、環孔材である。道管の径は100ミクロン程度で、チロースがかなり発達している（写真7）。単穿孔で、放射方向に2～3個複合することもあり、小道管には螺旋肥厚が認められる。柔細胞は道管の周囲に分布する。放射組織は単列のものから4列くらいまであり、異性である（写真8）。道管との間の分野壁孔はやや大きい。これらの結果からこの材はヤマグワ（*Morus bombycis*）と同定した。

試料No. 3

散孔材で道管の大きさは100~200ミクロンあり、孤立のものゝ2~4個複合したものゝがある(写真9)。穿孔は単一で小道管には螺旋肥厚が認められる。柔細胞は帯状に分布し、その量は多い。放射組織は異性で、単列のものゝ4~5列の多列のものゝがある(写真10)。これらの観察結果からこの材はムクノキ (*Aphananthe aspera*) と同定した。

試料No. 4

散孔材で孔圏の道管は1列、直径は200~300ミクロンと大きく、単穿孔である。孔圏外の小道管は螺旋肥厚をもち、接線状あるいは波状の紋様状に集合している(写真11)。柔細胞は道管の周囲に配列している。放射組織は異性で、縁辺の大きい細胞には結晶が認められる(写真12)。これらの結果からケヤキ (*Zelkova serrata*) と同定した。

試料No. 7

道管の配列は弱い環孔性を示し、直径は100~200ミクロンある。単穿孔で2~3個複合することがあり、螺旋肥厚を有するものゝある。柔細胞は道管の周囲に分布する(写真13)。放射組織は単列のものゝ4~5列のものゝがあり、異性である。道管と放射組織間の壁孔はやや大型で横長の楕円形をしている。これらの観察結果からヤマグワ (*Morus bombycis*) と同定した。

試料No. 8

散孔材で道管の直径は100ミクロン以下で小さく、分布数もそれほど多くない。孤立管孔と4~5個が放射方向に複合したものゝがある(写真14)。穿孔は単一で、まれに階段状がある。柔細胞は多く、接線方向に1列の幅でかなり規則的に配列する。放射組織は単列のものゝ4~5列のものゝがあり、同性のものゝと異性のものゝがある(写真15)。以上の結果からこの材はクマシデ属の一種 (*Carpinus sp.*) と同定したが、種名までは確定できない。

試料No. 9

散孔材で道管の直径は100ミクロン以下、孤立のものゝ4~5個が放射方向に複合したものゝがあり、穿孔はほとんど単一、まれに階段状である。接線方向に柔細胞が1列幅で規則的に配列している。放射組織は単列のものゝ4列くらいゝの多列のものゝがあり、同性と異性が混在する。以上の結果この材はクマシデ属の一種 (*Carpinus sp.*) と同定したが、種名までは判定できない。

試料No. 10

はっきりした孔圏は示さないが環孔材である。道管の径は100~200ミクロンある。2~3個

複合することもあり、単穿孔でチロースを多く含む。小道管には螺旋肥厚がある。道管の分布数はあまり多くない。柔細胞は道管の周囲に分布する。放射組織は異性で、単列のものから4細胞幅のものまでである(写真16)。放射組織と道管との間の壁孔はやや大きく、楕円形をしている。これらの観察結果からこの材はヤマグワ (*Morus bombycis*) と同定した。

試料No.11

孔圏の道管が大きく環孔材である。道管の径は100~200ミクロンで中庸、チロースが発達しているものもある(写真17)。小道管には螺旋肥厚がある。放射組織は異性で、単列のものから4~5列の幅のものまでである(写真18)。道管と放射柔細胞との間の壁孔は横長の楕円形でやや大きい。以上の結果からこの樹種はヤマグワ (*Morus bombycis*) と同定した。

以上、鬼虎川遺跡の溝肩に生育していた10本の樹木の根について樹種の識別を行なったが、正常な樹幹材と比較して、組織構成要素の大きさや配列に差異があり、樹種名の決定にかなりの困難を感じた。たとえば試料No.10と11とはほとんど同様の組織構造を示している(写真16と18)が、試料No.2、7とはかなり違った道管の配列である(写真7、13と17)にもかかわらず、いずれもヤマグワという結論に達した。一般に樹幹の中心部の幼令期の材や根材では構成要素の配列が変化するもので、成熟幹材で環孔材に分類されるものでも、幼令根材では環孔性が弱く、放射孔材や散孔材の形態を示すことがある。写真7や13が散孔材のようであり、写真17が環孔材にみえるのは、倍率にもよるが、上記の理由も考えられる。

いずれにしても調査した10点の試料のうち、クマシデ属2点、カン類1点、ムクノキ1点、ケヤキ1点、ヤマグワ4点、イヌエンジュ属1点で、花粉分析の結果から当時は照葉樹林帯であったと考えられている遺跡からの自然木としては多少疑問を感ずる点もあるが、溝肩に生育していた樹種という特殊事情によるものかもしれない。

VIII. 自然史関係の遺物

大阪市立自然史博物館

那須孝悌

日浦 勇

樽野博幸

宮武頼夫

1. 動物遺体

調査地内の弥生時代の包含層および遺構から発掘された脊椎動物遺体は、哺乳類3種、両生類1種である(第4表)。このなかでは、イノシシが大部分をしめる。調査面積の割には、発掘点数が少なく、調査地が「ゴミ捨場」からは、ややはなれて位置していたと考えられる。また発掘点数が少ない割に、イヌの遺骨が多いことが目だつ。骨は、表面がやや風化したり、骨端部が破損あるいは、イヌにかじられた状態で出土しているものが多い。

E地区においていわゆる「地山層」確認のため、深掘りを行ったところ、第26層下面より約1m下位から、海成砂質粘土層となり、そこから、オキシジミとミドリシャミセンガイが多産した。ともに内湾のごく浅い海に生棲する動物である。ミドリシャミセンガイは、現在、大阪湾では見られない。
(樽野)

種 類	時代 様式 遺 地 構 区	弥 生 時 代							古墳 鎌倉	不 明
		II 様 式					III様式			
		溝9	溝11	溝15	溝16	26層	6号墓	11層	溝1	
	E	C~D	A~C	F~G	G~H	E	G	E	C	
イヌ		1			1	1			1	
イノシシ			2	1	1			1		
シカ					1					
カエル類							1			
オキシジミ	多し									
ミドリ シャミセンガイ	多し									

第4表 動物遺体出土一覧(数字は遺構または地層ごとの最小個体数を示す)

植物名	時代								不明		
	畿内第II様式				第II～III様式		第IV様式		土壇	?	
	3号墓周溝内		溝11上層		溝15		溝16				
	E		A～C		F～G		G～H		溝16上層		
						H溝肩の上		溝14			
								H下層粘土		F	E
木本植物											
ナラガンワ	78			15	1						
コナラ				2							
クスギ?							1				
コナラ亜属	12						1				
アラカン	9			2	1						
イチイガン				20	2		5			1	
アカガン亜属	2										
コナラ属	3						1				
シリブカガン				2	1						
クマシデ属	2	1									
ヤナギ属				1							
エナキ	7										
ムクノキ	5			1							
ヤブツバキ							1				
ブドウ属	1										
モモ		1	5	2	1	1		1			
草本植物 (双子葉)											
ヒョウタン					1	1					
ウリ類	7				4						
エゴマ	1										
タデ属				2							1
オナモミ	1										
ヨモギ属					—						
ヒシ											1
オニバス	3										
ジュンサイ				1							
単子葉植物											
イネ	+	+	+								
コナギ		1									
オモダカ		2									
カヤツリグサ科	1										
蘚苔植物					1	1					

第5表 植物遺体出土一覧

2. 植物遺体

発掘作業の過程で採取された植物遺体を別表（第5表）に示す。ただし、表中に示した種類のうち、クマンデ属の種子や、エゴマの分果、コナギやオモダカの種子など微小な遺体は、採取された大きな植物遺体をクリーニングする過程で検出されたものである。また、表中に示した数字は遺体の数を示し、植物体としての個体数を示すものではない。なお、イネは籾殻（一部は炭化している）の小さな破片のみのため、遺体数で表現することもできなかったため、+記号で表示した。

今回の発掘で得られた試料は、ナラガシワが著しく多いことと、イチイガシのどんぐりと炭化した子葉（どんぐりの中味）が多いこと、ヒョウタンの種子が少ないこと、針葉樹種が全く含まれていないこと、などの点で第6次までの鬼虎川遺跡発掘で得られている知見と異なる。

イネやヒョウタン、ウリ類が検出されたほか、オナモミやコナギのような史前帰化植物も検出されており、付近で農耕がおこなわれていたことを暗示しているものと考えられる。試料数が少ないため、後背地の生駒山山腹をおおっていたであろう森林が照葉樹林であったか否かは不明であるが、エノキ、ムクノキ、クマンデ属、ナラ類などの二次林要素がいくつか検出されていることから考えると、発掘地の近くにヤブツバキやアラカシのような常緑樹を含む二次林が存在したことが推定される。（那須）

3. 昆虫遺体

鬼虎川遺跡の第5次発掘によって37点の昆虫遺体が発見されているが、今回、主として植物遺体の洗い出しで、かなりの昆虫遺体が新たにみつかった。その結果は別表（第6表）の通りである。これにより気づいた点などを次に述べる。

1. 発見点数は28点で、その内甲虫が23点、甲虫以外の昆虫、クモなどが5点含まれている。（鞘翅などで明らかに1枚が数片にこわれていると思われたものは1点と数えた。）
2. 前回発見されたのはすべて鞘翅目（甲虫）であったが、今回甲虫以外の試料が数点含まれていたのは、溝15に集中的にあらわれてきたことによる。軟弱な虫体が比較的良好な状態で保存されていたのは、流れのない静かな堆積環境を推定させる。
3. センチコガネは前回も発見されたが、本種は森林にすみ、獣糞を幼虫の餌にするので、そのような環境が周辺にあったと考えられる。
4. シロテンハナムグリやコガネムシの発見は、二次林的な環境を思わせる。
5. ハエの蛹やエンマコガネ属（食糞性）が何点かずつでいるところから、人のすむ環境が近くにあったことが推定されるが、どちらも種類まで決定できていないので確実なことはいえない。（宮武 日浦 那須）

昆虫名		時代 遺構 地区	弥生時代畿内第II様式		
			3号墓周溝内	溝 15	溝 16
			E	F~G	G~H
甲 虫	歩行虫	ゴミムシ科の一種 HARPALIDAE	1 (鞘翅)		
	水生 甲虫	ダルマガムシ科? HYDRAENIDAE			2 (左右鞘翅)
	屍食	センチコガネ Geotrupes laevistriatus	1 (左鞘翅)		
	糞食	エンマコガネの一種 Onthophagus sp.	6 (鞘翅・胸・肢)		
	食葉性 甲虫	コガネムシ Mimela splendens シロテンハナムグリ? Protaetia orientalis	1 (左鞘肢)		1 (左鞘翅)
	その他	所属不明種	2 (鞘翅・頭) 7 (前胸・背破片)	2 (胸部腹板・肢)	
その他の 昆虫など	ヒメカメムシ? Rubiconia intermedia (PENTATOMIDAE) 蛾の幼虫 (科不明) ハエの幼虫 (科不明) クモの一種	1 (一部)	1 (頭部) 1 (一部) 1 (頭胸)		
計			19	6	3

第6表 昆虫遺体出土一覧

観 察 表

凡 例

番 号	器 種	法 量 (cm)	形 態 ・ 技 法 の 特 徴	備 考
1 ↓ 土器番号 	壺	○ 12.8 → 口径 ○ 6.1 → 底径 ○ 25.4 → 器高 (復) → 復原値 (現) → 現存値	○ 形態 ○ 技法	○ 焼成 ○ 胎土 ○ 色調 ○ その他
挿図・図版は共通の番号				

溝11出土の弥生土器 (図版1~4)

番号	器種	法量(cm)	形 態 ・ 技 法 の 特 徴	備 考
1	壺	○12.8 ○6.1 ○25.4	○斜めに短く外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。筒状の太い頸部。体部は球形に近く、頸部と肩部の境界は明瞭。最大腹径が器高の約2/5の高さにある。底部は突出し、平底。 ○外面全体に縦方向のハケメの後、口縁端部は横ナデ。口縁部から頸部上半と腹部より下は横方向のヘラミガキ。内面全体は右上がりのハケメの後、粗い不定方向のヘラミガキ。頸部下半から肩部に9条からなる櫛描直線文を7帯重ね、その下に扇形文を施す。文様帯間を研磨する。底面には木葉の圧痕が残る。	○良好。 ○1mm前後の長石、雲母を含む。 ○外面は褐灰色。内面はにぶい黄褐色。 ○口縁部から腹部下半にかけてと、その相対位置にあたる腹部に黒斑。腹部に穿孔。第II様式。
2	壺	○17.2(復) ○— ○8.8(現)	○斜めに外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。頸部は筒状。 ○外面は縦方向の粗いハケメの後、口縁部を板ナデ。頸部内面は縦方向のヘラミガキ。頸部に5条からなる櫛描直線文を施す。	○良好 ○石英、長石、雲母を含む。 ○暗灰褐色。 ○第II様式。
3	壺	○20.0 ○— ○11.0(現)	○短く外反する口縁部。口縁端部は丸みをもつ。頸部は太い。 ○頸部外面は縦方向の板ナデの後、押しぎみの指ナデ、口縁部は横方向の板ナデの後、横ナデ。頸部内面は横方向の板ナデ。口縁部は横方向の板ナデの後縦方向の板ナデ。	○良好。 ○白色砂粒、雲母、角閃石を含む。 ○外面は横褐色～灰褐色。内面は暗灰褐色。 ○口縁部内面と頸部外面に黒斑。第II様式。
4	壺	○— ○— ○14.6(現)	○球形にちかい体部。頸部から腹部へなだらかな曲線を描く。 ○体部外面は横ナデの後、部分的にヘラミガキ。内面の調整は外面に比べて粗く、腹部上半から頸部にかけて斜め方向のナデ。最大腹径部内面は横方向の強いナデ。	○良好。 ○雲母を多く含む。 ○外面は褐灰色。内面は褐灰色～灰褐色。 ○腹部の相対位置に黒斑。第II様式。
5	壺	○15.5(復) ○5.8 ○32.5(復)	○斜めに外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。太い筒状の頸部。卵形の体部。器壁は厚く、底部は特に厚い。 ○口縁端部は横ナデ。口縁部外面は下方から上方にむかう板ナデ。内面は横方向の板ナデ。外面は頸部から体部上半にかけて縦方向のヘラミガキ。下半は横方向のヘラミガキ。頸部内面は板ナデの後、縦方向のナデ。腹部は強い縦方向のナデ。底部内面は不定方向の板ナデ。	○良好。 ○白色砂粒、チャートを含む。黒褐色～灰褐色。 ○内面に付着物あり。第II様式。

番号	器種	法量(cm)	形態・技法の特徴	備考
6	壺	○ — ○ — ○ 10.5(現)	○ 頸部下半から肩部のみ残存。 ○ 頸部外面はナデ。肩部は不定方向のヘラミガキ。肩部内面は板ナデ。指頭圧痕が残る。頸部は6条からなる櫛描直線文を施す。	○ 良好。 ○ 1～2mmの角閃石、長石、雲母を含む。 ○ 外面はにぶい褐色。内面は褐灰色～黒色。 ○ 第II様式。
7	壺	○ — ○ — ○ 27.5(現)	○ 腹部のみ残存 ○ 外面は全体に斜め方向のハケメの後、ナデ。内面は全体に板ナデ。指頭圧痕が残る。腹部上半には6条からなる櫛描直線文を施す。直線文間には扇形文を千鳥型配置し、横型流水文を描く。	○ 良好。 ○ 2mm以下の角閃石、石英、長石を含む。 ○ 外面はにぶい褐色。内面は褐灰色。 ○ 第II様式。
8	壺	○ 16.5(復) ○ — ○ 17.0(現)	○ 短く斜めに外反する口縁部。口縁端部は丸みをもつ。頸部は短い。肩部はやや丸みをもちながら外下方へ伸び、腹部へ続く。 ○ 口縁部内外面は横方向の板ナデ。口縁端部は横ナデ。頸部は縦方向の板ナデ。肩部は右下がりの板ナデ。頸部から肩部内面は板ナデの後、部分的にヘラミガキ。口縁端部には不均等な刻み目を施す。頸部から肩部に9条からなる櫛描直線文を施す。	○ 良好。 ○ 雲母、角閃石を若干含む。 ○ 外面は黄褐色。内面は褐灰色。 ○ 第II様式。
9	無頸壺	○ 7.7(復) ○ — ○ 17.7(現)	○ 内湾する口縁部。口縁端部は内傾し面をもつ。体部は球形にちかい。 ○ 外面は全体に板ナデの後、斜め方向のていねいなヘラミガキ。口縁端部は横ナデ。口縁内面は指で強くナデあげる。内面の腹部上半はハケメの後、不定方向のヘラミガキ。	○ 良好。 ○ 1～3mm大の石英、長石、角閃石を含む。 ○ 外面は暗灰褐色。内面は黒灰褐色～暗灰黄褐色。 ○ 口縁部から腹部にかけて黒斑。 ○ 第II様式。
10	甕	○ 22.5(復) ○ — ○ 16.3(現)	○ 短く外反する口縁部。口縁端部は丸みをもつ。体部はややふくらむ。倒鐘形。口径は腹径より大。 ○ 口縁部内外面は横方向の板ナデの後、横ナデ。体部外面は全体に縦方向の細かいハケメの後、下半部をヘラミガキ。体部内面は、上半部を横方向、下半部を斜め方向の板ナデ。指頭圧痕が残る。口縁端部には細かいキザミ目を施す。体部上半に5条からなる櫛描直線文を4帯と、その下に1帯の波状文を施す。	○ 良好。 ○ 2mm以下の角閃石、雲母を含む。 ○ 外面は灰黄褐色、内面は褐色。 ○ 第II様式。
11	甕	○ 21.2(復) ○ — ○ 6.0(現)	○ ゆるく外反する口縁部。口縁端部はやや丸みをもつ。口径は腹径より大。 ○ 口縁部内外面は横ナデ。体部外面はハケメ。内面はナデ。口縁端部にはキザミ目を施す。体部には5条からなる櫛描直線文を施す。	○ 良好。 ○ 角閃石、雲母を含む。 ○ 外面は灰黄褐色。内面は褐色。 ○ 第II様式。
12	甕	○ 14.5(復) ○ — ○ 3.8(現)	○ 斜めに外反し、さらに曲折し、横方向に短かく開く口縁部。口縁端部は面をもつ。 ○ 口縁部内面は横方向のハケメ、外面は横ナデ。体部外面は縦方向の細かいハケメ、内面は細かいハケメ。口縁端部は深いキザミ目を施す。	○ 良好。 ○ 角閃石、石英、長石を含む。 ○ 褐色。 ○ 頸部に煤付着。第II様式。
13	甕	○ 22.8(復) ○ — ○ 11.7(現)	○ 斜めに短く外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。体部はややふくらむ。口径は腹径より大。 ○ 口縁端部は強い横ナデ。口縁部内外面と頸部内面は横方向のヘラミガキ。体部外面は縦方向のていねいなヘラミガキ。内面は横方向のハケメの後、板ナデ。	○ 良好。 ○ 雲母、角閃石、白色砂粒を含む。 ○ 外面は灰褐色。内面は褐灰色。 ○ 頸部から体部外面にかけて煤付着。第II様式。
14	甕	○ 23.5(復) ○ — ○ 6.6(現)	○ 短く斜めに外反する口縁部。口縁端部は丸みをもつ。体部はわずかにふくらむ。 ○ 口縁部内外面と端部は横ナデ。頸部と体部の外面は、ヘラケズリの後、非常に細かい縦方向のハケメ。体部内面はナデ。	○ 良好。 ○ 0.5～1mmの角閃石、雲母を含む。 ○ 外面は灰黄褐色。内面は褐灰色～黄灰色。 ○ 第II様式。

番号	器種	法量(cm)	形態・技法の特徴	備考
15	甕	○20.0(復) ○— ○4.9(現)	○短く外反する口縁部。端部は丸みをもつ。体部はややふくらむ。 ○口縁端部は横ナデ。口縁部と頸部内面は横方向の板ナデ。指頭圧痕が残る。外面は、表面が剝離しているため調整法不明。	○良好。 ○角閃石、石英を含む。 ○外面は暗褐色。内面は暗灰褐色。 ○外面に煤が若干付着。第II様式。
16	甕	○21.5(復) ○— ○8.3(現)	○短く外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。体部はややふくらむ。口径は腹径より大。 ○口縁部内外面と端部は横ナデ。頸部内面は横方向のハケメ。体部内面は右下がり方向のていねいなハケメ。外面は煤付着のため調整法不明。	○良好。 ○微粒の角閃石、雲母、長石を含む。 ○黒褐色。 ○外面全体に煤が付着。第II様式。
17	甕	○19.5(復) ○— ○6.1(現)	○斜めに外反する口縁部。口縁端部は丸みをもつ。体部はわずかにふくらむ。頸部と体部の境はわずかな稜をもつ。 ○口縁部内外面と端部は横ナデ。指頭圧痕と粘土紐の接合痕が残る。体部内面は下方から上方へ向う板ナデ。外面は煤付着のため調整法不明。	○良好。 ○長石、石英、雲母を含む。 ○外面は黒色。内面は灰褐色。 ○外面全体に煤が付着。内面にも炭化物が付着。第II様式。
18	甕	○20.0(復) ○— ○9.8(現)	○短く斜めに外反する口縁部。口縁端部はやや面をもつ。体部はわずかにふくらむ。 ○口縁部外面と端部は横ナデ。頸部と体部外面は全体に下方から上方に向うヘラケズリ。内面は全体に横方向の細かいハケメの後、体部にナデ。	○良好。 ○1～2mmの角閃石、雲母、長石、石英を含む。 ○外面は灰褐色。内面は赤灰色。 ○第II様式。
19	甕	○20.1(復) ○— ○10.0(現)	○短く外反する口縁部。口縁端部は丸みをもつ。体部はわずかにふくらむ。口径は腹径より大。 ○口縁部内外面と端部は横ナデ。体部外面は下方から上方に向うハケメ。体部内面は右下方から左上方に向う板ナデ。内面に指頭圧痕が残る。	○良好。 ○角閃石、雲母、長石を含む。 ○黒褐色。 ○外面全体に煤が付着。第II様式。
20	甕	○15.4(復) ○— ○14.5(現)	○口縁端部はやや面をもつ。体部はわずかにふくらむ。倒鐘形。口径は腹径より大。 ○口縁部内外面と端部は横ナデ。体部外面はナデ。体部内面の上半を斜め方向のハケ目、下半をナデ。	○良好。 ○角閃石、雲母をわずかに含む。 ○外面は黒褐色。内面は暗黄褐色。 ○外面全体に煤が付着。第II様式。
21	甕	○26.2(復) ○— ○14.4(現)	○斜めに短く外反する口縁部。口縁端部は丸みをもつ。体部はややふくらむ。口径は腹径より大。 ○口縁部内外面と端部は横ナデ。頸部と体部外面は不定方向のハケメ。口縁部内面下半から頸部は横方向のハケメ。体部内面は右下がり方向の細かいハケメの後、横方向のヘラミガキ。	○良好。 ○微粒の雲母を含む。 ○灰黄褐色。 ○体部中央部に黒斑。第II様式。
22	甕	○21.0(復) ○— ○9.6(現)	○斜めに短く外反する口縁部。口縁端部は丸みをもつ。体部はややふくらむ。 ○口縁部内外面と端部は横ナデ。体部外面は細かい縦方向のハケメ。内面は不明瞭なハケメ。	○良好。 ○1～2mmの長石、雲母、角閃石を含む。 ○暗灰褐色。 ○口縁部から体部にかけて相対位置に黒斑。第II様式。
23	甕	○25.0(復) ○— ○5.7(現)	○口縁部は短く外反し、さらに曲折して横方向に開く。口縁端部は尖り気味。体部はややふくらむ。 ○口縁部内外面と端部は強い横ナデ。体部外面は縦方向のハケメ。内面はナデ。指頭圧痕が残る。	○良好。 ○1mm前後の角閃石を多量に含む。 ○外面は黒褐色～灰黄褐色。内面は灰黄褐色。 ○頸部から腹部に黒斑。第II様式。
24	甕	○31.0(復) ○— ○7.0(現)	○斜めに短く外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。体部はややふくらむ。 ○口縁部内面と端部は横ナデ。口縁部外面は縦方向のハケメ。体部外面は不定方向のナデ。体部内面は右下がり方向のハケメ、及び横方向のハケメの後、部分的にナデ。	○良好。 ○長石、雲母、角閃石を含む。 ○外面はにぶい橙色。内面は橙色。 ○第II様式。
25	甕	○21.3(復) ○— ○8.1(現)	○短く外反する口縁部。口縁端部は丸みをもつ。体部はほとんどふくらみをもたない。口縁部の器壁が厚いのにならば、体部の器壁は非常に薄い。口径は腹径より大。 ○口縁部内外面と端部は横ナデ。頸部と体部外面は縦方向のハケメ。指頭圧痕が若干残る。体部内面は下方から上方に向う板ナデ。器面は非常に平滑。	○良好。 ○雲母を若干含む。 ○黒褐色～黒色。 ○外面に煤が付着。第II様式。

番号	器種	法量(cm)	形態・技法の特徴	備考
26	甕	○19.5(復) ○— ○6.0(現)	○斜めに短く外反する口縁部。口縁端部はやや面をもつ。頸部はやや屈曲し、体部がわずかにふくらむ。 ○口縁部内外面と端部は横ナデ。頸部と体部外面は縦方向のハケメ。内面は強いナデ。	○良好。 ○0.5～1mmの角閃石、長石、雲母を含む。 ○にぶい橙色。 ○第II様式。
27	甕	○23.5(復) ○— ○7.2(現)	○斜めに短く外反する口縁部。口縁端部は丸みをもつ。体部はややふくらむ。内面の頸部と体部の境界は明瞭。 ○口縁端部は横ナデ。外面は斜め方向のハケメの後、横方向のハケメ。口縁部と頸部内面は横方向のハケメ。頸部に指頭圧痕が残る。頸部と体部外面は縦方向のハケメの後、下方から上方に向う板ナデ。頸部と体部の境界に接合痕が残る。体部内面はナデ。	○良好。 ○角閃石、白色砂粒を含む。 ○外面は暗褐色～黒褐色。内面は褐灰色。 ○第II様式。
28	甕	○18.8(復) ○— ○9.0(現)	○斜めに短く外反する口縁部。口縁端部は面をもち、中央がやや凹む。体部はややふくらむ。 ○口縁部内外面と端部は強い横ナデ。体部外面は斜め方向のハケメ。頸部と体部内面は横ナデ。頸部には指頭圧痕が残る。	○良好。 ○微粒の角閃石、長石を含む。 ○外面は暗灰褐色。内面は黄灰色～灰色。 ○外面全体に煤が付着。第II様式。
29	甕	○17.0(復) ○— ○9.0(現)	○斜めに短く外反する口縁部。口縁端部は丸みをもつ。口縁部から肩部にかけてなだらかな曲線を描く。体部はふくらむ。口径は腹径より大。 ○口縁部内外面と端部、頸部外面は横ナデ。頸部内面は横方向のハケメ。体部外面は縦方向のハケメ。内面はナデ。指頭圧痕が明瞭に残る。	○良好。 ○微粒の雲母、角閃石、長石を含む。 ○黒褐色。 ○外面全体に煤が付着。内面に炭化物が付着。第II様式。
30	高杯	○26.5(復) ○12.0 ○18.0	○斜め外方に伸びる口縁部。口縁端部は面をもつ。やや浅めの杯部。柱状部は中実。裾広がりて水平に伸びる脚部。脚端部は面をもつ。 ○口縁部外面と端部は横ナデ。口縁部内面は横方向の細かいハケメ。杯部外面は横方向のていねいなヘラミガキ。内面は細かいハケメの後、ヘラミガキ。柱状部は縦方向のヘラミガキ。脚部は表面剝離のため調整法は不明。脚部内面はナデ。	○良好。 ○1～4mmの石英、長石、角閃石、雲母を含む。 ○黒褐色。 ○脚部外面に黒斑。第II様式。
31	高杯	○— ○10.2 ○6.4(現)	○脚部は中空。裾広がりて水平に伸びる脚部。脚端部は上方へやや肥厚し面をもつ。 ○柱状部内外面は縦方向の強いナデ。脚部外面と端部は横ナデ。脚部内面はナデ。脚端部にキザミ目を施す。	○良好。 ○1～2mmの長石、石英、角閃石、雲母を含む。 ○暗灰褐色～灰黄色。 ○脚部外面に黒斑。第II～III様式。
32	壺蓋	○— ○— ○3.3(現)	○笠形。上面中央部に1個乳頭状のつまみをもつ。 ○つまみ部は指押えにより貼り付け。外面は強いナデ。内面はナデ。つまみ部の裏面に指頭圧痕が残る。	○良好。 ○微粒の長石、角閃石を含む。 ○暗灰褐色。 ○第II様式。
33	鉢	○40.0(復) ○— ○8.8(現)	○短く外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。腹部上端に瘤状把手をもつ。 ○口縁部内外面と端部は横ナデ。体部外面は斜め方向のハケメの後、横方向のヘラミガキ。口縁部内面の下半は横方向のヘラケズリ。体部内面は横方向のヘラミガキ。把手は指押えによる貼り付け。	○良好。 ○0.5～2mmの角閃石、白色砂粒を含む。 ○外面はにぶい橙色。内面は褐灰色。 ○第II様式。
34	鉢	○24.7(復) ○— ○11.0(現)	○斜め外方へやや内弯しながら伸びる体部から口頸部。口縁端部は丸みをもつ。 ○口縁部内面と端部は横ナデ。体部外面の上半はナデ。下半は横方向のハケメの後、ヘラミガキ。体部内面は横方向のハケメの後、ヘラミガキ。体部外面に6条からなる櫛描直線文を4帯施す。	○良好。 ○1～2mmの長石、石英を含む。 ○外面は暗灰褐色。内面は暗赤褐色。 ○第II様式。

番号	器種	法量(cm)	形態・技法の特徴	備考
35	鉢	○16.7(復) ○6.7 ○13.2	○やや斜め外方へ伸びる口縁部。口縁端部は丸みをもつ。なだらかな曲線を描き裾すばまりになる碗形の体部。底部はわずかに凹む平底。 ○口縁部外面と端部は横ナデ。体部外面は全体に縦方向のハケメの後、軽くヘラミガキ。内面は全体に横方向の細かいハケメの後、部分的に軽くヘラミガキ。体部外面に8条からなる楕直線文を3帯施す。	○良好。 ○1mm前後の角閃石、長石、雲母を含む。 ○黒褐色。 ○第II様式。
36	鉢	○19.0(復) ○7.2 ○14.3	○斜め外方へ直線的に伸びる体部から口縁部。口縁端部は丸みをもつ。底部は平底。 ○口縁端部は横ナデ。口縁部外面は横方向の細かくていねいなヘラミガキ。体部外面の上半は右下がりのヘラミガキ。下半は縦方向のヘラミガキ。内面は全体に細かい横方向のハケメの後、粗いヘラミガキ。底部内面は表面磨滅のため、調整法は不明。底面はヘラミガキ。	○良好。 ○1～2mmの長石、角閃石、石英、雲母を含む。 ○外面は暗褐色～黒色。内面は灰褐色。 ○第II様式。
37	底部(壺?)	○— ○7.0 ○7.8(現)	○体部は丸みをもつ。底部は平底。 ○体部外面は横方向のヘラミガキ。内面は強いナデ。底部は縦方向のヘラミガキ。	○良好。 ○1mm前後の砂粒、雲母を含む。 ○外面は灰黄褐色。内面は灰色。 ○体部に黒斑。第II様式。
38	底部(壺?)	○— ○9.5(復) ○6.0(現)	○器壁の薄いやや上げ底の底部から丸みもちながら外上方に伸びる体部。 ○底部外面は縦方向のヘラミガキ。底面はヘラケズリ。底部内面は横方向のヘラミガキの後、不定方向のヘラミガキ。	○良好。 ○1～2mmの長石、石英、雲母を含む。 ○灰黄褐色。 ○体部内面に黒斑。第II様式。
39	底部(壺?)	○— ○10.0 ○11.2(現)	○体部は丸みをもつ。底部は平底。器壁は厚い。 ○底部外面は横方向の板ナデの後、全体にヘラミガキ。体部内面は非常に細かいハケメの後、粗いヘラミガキ。底部内面は板ナデ。	○良好。 ○石英、長石、角閃石、雲母を含む。 ○外面は暗灰褐色。内面は赤褐色。 ○底部外面に黒斑。第II様式。
40	底部(壺?)	○— ○10.5 ○11.1(現)	○平底の底部から大きくふくらむ体部。 ○体部外面は右下がり方向のハケメの後、ヘラミガキ。体部内面は横方向のハケメ。底部は押え気味の強いナデ。底面は無調整。	○良好。 ○1mm前後の角閃石、雲母、長石を含む。 ○にぶい褐色。 ○第II様式。
41	底部(壺?)	○— ○9.8(復) ○5.3(現)	○底部はやや上げ底。底部の器壁は薄い。 ○底部外面は斜め方向のハケメ。底部内面はハケメの後、強いナデ。	○良好。 ○石英、長石を含む。 ○灰黄褐色。 ○第II様式。
42	底部(壺?)	○— ○6.3 ○6.5(現)	○体部は丸みをもつ。底部は平底。 ○外面は表面が剥離しているため調整法は不明。内面は横方向の板ナデ。	○やや軟質。 ○長石、石英を含む。 ○外面は褐灰色～黒褐色。内面は灰褐色。 ○第II様式。
43	底部(壺?)	○— ○9.2 ○6.5(現)	○体部はやや急な角度で外上方に伸びる。底部は平底。 ○底部外面は縦方向のハケメの後、部分的にヘラミガキ。底部内面はハケメの後、ナデ。上半はヘラミガキ。底面はハケメの後、ヘラミガキ。	○良好。 ○白色砂粒を若干含む。 ○外面は黒色～褐灰色。内面は灰白色。 ○外面に煤が付着。第II様式。
44	底部(壺?)	○— ○9.1 ○3.7(現)	○平底の底部。 ○底部外面は縦方向のハケメの後、部分的に横方向のハケメ。底部内面はナデ。底面は不定方向のヘラケズリ。	○良好。 ○2mm以下の砂粒を含む。 ○灰白色。 ○第II様式。
45	底部(壺?)	○— ○10.0(復) ○4.4(現)	○平底の底部。 ○体部外面と底面は細かいハケメの後、ヘラミガキ。底部内面の上半は細かいハケメと粗いハケメを併用。下半はナデ。	○良好。 ○1mm前後の白色砂粒を含む。 ○灰色。 ○第II様式。

番号	器種	法量(cm)	形態・技法の特徴	備考
46	底部 (甕?)	○ — ○6.8 ○4.8(現)	○平底の底部。 ○底部外面は縦方向のハケメの後、下部を横ナデ。底部内面は不定方向のハケメ。	○良好。 ○雲母を多く含む。 ○外面は黄灰色～黒色。内面は褐灰色。 ○第II様式。
47	底部 (甕?)	○ — ○6.3 ○5.3(現)	○平底の底部。 ○底部外面は縦方向のハケメ。下部は粗い横ナデ。内面は横方向の板ナデ。底面は軽いヘラケズリ。	○良好。 ○角閃石、雲母、長石を含む。 ○褐灰色～黒色。 ○外面に煤が付着。第II様式。
48	底部 (甕?)	○ — ○5.3 ○3.5(現)	○平底の底部。 ○底部外面は縦方向のハケメの後、下部のみを部分的にヘラミガキ。内面は不定方向のハケメ。	○良好。 ○雲母、角閃石を含む。 ○黒褐色～灰褐色。 ○第II様式。
49	底部 (甕?)	○ — ○4.7 ○3.5(現)	○底部は平底。 ○底部外面は縦方向の強い板ナデの後、ナデ。下部に指頭圧痕が残る。内面は不定方向の板ナデ。指頭圧痕が残る。底面はナデ。	○良好。 ○雲母を含む。 ○外面は黒褐色。内面は暗灰黄色。 ○第II様式。
50	底部 (甕?)	○ — ○6.1 ○3.2(現)	○平底の底部 ○底部外面は縦方向のナデ。底部内面は横方向の板ナデ。底面は無調整。	○良好。 ○1mm前後の長石を含む。 ○外面はにぶい赤褐色。内面はにぶい黄褐色。 ○第II様式。
51	底部 (壺?)	○ — ○4.5 ○2.2(現)	○平底の底部。 ○底部内外面とも強いナデ。	○良好。 ○微粒の雲母を含む。 ○にぶい黄褐色。 ○第II様式。
52	底部 (壺?)	○ — ○5.2 ○4.0(現)	○底部は突出し、上げ底。下方はやや外側に開く。 ○内外面とも不定方向のヘラミガキ。	○良好。 ○1～3mmの角閃石、雲母、長石、石英を含む。 ○黒褐色。 ○第II様式。
53	底部 (甕?)	○ — ○6.0 ○5.9(現)	○上げ底の底部。 ○体部外面は下方から上方に向うヘラケズリ。下部には指頭圧痕が残る。体部内面はナデ。底部はヘラケズリ。底面はヘラミガキ。指頭圧痕が明瞭に残る。	○良好。 ○1mm前後の長石、石英、雲母を少量含む。 ○外面は灰褐色～暗灰褐色。内面は黒色。 ○第II様式。
54	底部 (甕?)	○ — ○6.2 ○5.4(現)	○やや上げ底の底部 ○底部外面は縦方向のハケメの後、部分的にヘラケズリ。底部内面は粗いヘラケズリの後、下方から上方へ向うナデ。底面はヘラケズリ。	○良好。 ○雲母、角閃石を含む。 ○灰褐色～黒色。 ○第II様式。

溝9・16出土の弥生土器 (図版5)

番号	器種	法量(cm)	形態・技法の特徴	備考
55	壺	○16.3(復) ○ — ○12.7(現)	○短く斜めに外反する口縁部。口縁端部は外面にやや肥厚し面をもつ。太く短い頸部。頸部から肩部にかけて、なだらかな曲線を描く。 ○口縁部内面上端から外面にかけて細かい横方向のヘラミガキ。口縁部内面は横方向のハケメ。内面は横ナデ。指頭圧痕が残る。端面は櫛描直線文を1帯施した後、下端にキザミ目を施す。頸部から肩部に8条からなる櫛描直線文を施し、直線文間に扇形文を描き、縦型流水文とする。	○良好。 ○1～2mmの角閃石、長石、石英を含む。 ○にぶい赤褐色。 ○口縁部に黒斑。溝9出土。第II様式。

番号	器種	法量(cm)	形態・技法の特徴	備考
56	壺	○ — ○ — ○18.8 (現)	○腹部が大きく張り出す。やや扁平な球形の体部。 ○腹部外面は横方向のていねいなヘラミガキ。内面はナデの後、細かいハケメ。粘土紐の接合痕が残る。肩部外面は12条からなる櫛描直線文を施す。直線文の所々に櫛工具を止めた跡が残る。最下段は1.5cm前後間隔の簾状文を施す。	○良好。 ○1~2mmの長石、石英、雲母、角閃石を含む。 ○外面は黒褐色。内面は暗灰褐色~灰褐色。 ○溝9出土。第II様式。
57	壺	○ — ○ — ○6.4 (現)	○丸みをもつ体部。 ○外面は縦方向のハケメの後、ナデ。内面はヘラ状のもので右上がり方向のナデ。指頭圧痕が残る。肩部に条の不明瞭な櫛描直線文を施す。	○良好。 ○1mm以下の角閃石、石英、長石を含む。 ○にぶい橙色。 ○外面に黒斑。溝9出土。第II様式。
58	壺	○6.5 (復) ○ — ○8.3 (現)	○やや斜め外方に伸びる口縁部。口縁端部は面をもつ。 ○口縁部内面上半と端部は横ナデ。内面は下半から頸部にかけて不定方向のハケメ。口縁部と頸部の外面は縦方向の非常に細かいハケメ。口縁部の上端以下、3条からなる櫛描直線文を施す。	○良好。 ○1mm前後の長石、石英、雲母を含む。 ○黒灰色。 ○溝9出土。第II様式。
59	甕	○25.0 (復) ○ — ○3.8 (現)	○短く斜めに外反する口縁部。口縁端部は丸みをもつ。頸部以下は裾すばまり。 ○口縁部内外面上半と端部は横ナデ。口縁部内外面下半と頸部内外面は横方向のハケメの後、板ナデ。	○良好。 ○5mm大の石英、角閃石を含む。 ○淡黄褐色。 ○外面に煤が付着。溝9出土。第II様式。
60	鉢	○16.0 (復) ○ — ○7.8 (現)	○やや斜め外方へ伸びる口縁部。口縁端部は丸みをもつ。口縁部から体部にかけて半環状の幅広の把手をつける。 ○口縁部は横ナデ。内面は斜め方向の細かいヘラミガキ。外面は粗いヘラミガキ。把手は口縁端部の上から粘土をのせてしっかりと取付けているが形がいびつ。口縁部から体部半ばに6条からなる櫛描直線文を施す。	○良好。 ○1~2mmの雲母、角閃石、長石を含む。 ○黒色。 ○溝9出土。第II様式。
61	底部 (甕?)	○ — ○4.8 (復) ○5.3 (現)	○やや斜め外方に伸びる体部。底部は平底。 ○体部外面は縦方向の板ナデの後、ヘラミガキ。底部外面は横方向のヘラミガキ。底面はヘラケズリ。内面は粗いヘラミガキ。	○良好。 ○砂粒をわずかに含む。 ○黒褐色。 ○溝9出土。第II様式。
62	底部 (壺?)	○ — ○7.2 ○5.6 (現)	○平底の底部 ○外面は横方向のヘラミガキ。内面はナデ。底面は無調整。	○良好。 ○1mm前後の角閃石、長石、雲母を含む。 ○外面は黒褐色。内面は黄灰褐色。 ○溝9出土。第II様式。
63	底部 (甕?)	○ — ○7.5 ○5.2 (現)	○平底の底部。 ○外面は縦方向の板ナデの後、横ナデ。内面は板ナデの後、やや強いナデ。	○良好 ○微粒の角閃石、雲母、長石を含む。 ○くすんだ黄灰色。 ○溝9出土。第II様式。
64	底部 (壺?)	○ — ○6.0 ○5.0 (現)	○平底の底部。 ○外面はナデの後ヘラミガキ。内面は強いナデ。底部内面に指頭圧痕が残る。	○良好。 ○雲母を含む。 ○外面はにぶい赤褐色~赤灰色。内面はにぶい橙色。 ○溝9出土。第II様式。
65	底部 (壺?)	○ — ○8.0 (復) ○1.4 (現)	○わずかに上げ底の底部。 ○外面はナデ。指頭圧痕が残る。内面は粗いヘラミガキ。底面は板ナデ。指頭圧痕が残る。	○良好。 ○1mm前後の石英、長石を多く含む。 ○灰黄褐色。 ○内面に炭化物が付着。溝9出土。第II様式。

番号	器種	法量(cm)	形態・技法の特徴	備考
66	底部 (甕?)	○ — ○7.0 ○5.0 (現)	○底部は平底。中央部の器壁は非常に薄い。 ○外面は縦方向のハケメの後、ヘラミガキ。内面はハケメの後、ナデ。指頭圧痕が底部内面に残る。	○良好。 ○1mm以下の砂粒を含む。 ○外面は黒色～黒褐色。内面は褐灰色。 ○溝9出土。第II様式。
67	底部 (壺?)	○ — ○8.8 ○3.4 (現)	○平底の底部。 ○外面と底面はヘラケズリの後、ヘラミガキ。内面はヘラケズリ。	○良好。 ○微粒の角閃石、雲母を含む。 ○灰黄褐色。 ○底面に靱痕。溝9出土。第II様式。
68	甕	○17.3 ○5.8 ○27.5	○頸部で極度に曲折し、短く斜めに伸びる口縁部。口縁端部は面をもつ。体部はふくらみをもつ。底部は平底。腹径は口径より大。 ○口縁部内外面は横ナデ。体部外面は上半を縦方向のハケメ、下半を下方から上方に向うヘラケズリの後、全体に斜め方向のヘラミガキ。底部外面は横方向のヘラミガキ。体部内面は上半を斜め方向のハケメの後、底部まで及ぶ斜め方向のヘラミガキ。底面はヘラミガキ。口縁端部にハケメ原体によるキザミ目を施す。	○良好。 ○1mm以下の砂粒を含む。 ○にぶい褐色。 ○腹部相対位置に黒斑。外面に煤が付着。溝16出土。第III様式。

方形周溝墓・土壇墓出土の弥生土器 (図版6)

番号	器種	法量(cm)	形態・技法の特徴	備考
69	壺	○17.5 (復) ○ — ○9.0 (現)	○口縁部は短く斜めに外反する。口縁端部は面をもつ。体部は丸みをもつ。 ○口縁端部から頸部外面にかけ、横方向のヘラミガキ。体部外面は縦方向のヘラミガキ。口縁部から体部内面にかけて横方向のハケメの後、口縁部の一部をヘラミガキ。頸部内面に若干指頭圧痕が残る。	○良好 ○1～5mmの石英、長石を多く含む。 ○外面は褐灰色～黒灰色。内面は灰黄色。 ○第3号方形周溝墓出土。第II様式。
70	甕	○18.5 ○ — ○9.2	○口縁部は短く外反する。口縁端部は面をもつ。体部はややふくらむ。 ○口縁部内外面と端部は横ナデ。体部外面は縦方向のハケメ。内面はナデ。指頭圧痕が残る。内外面とも磨減が著しい。	○良好。 ○0.1～1mmの雲母、角閃石、長石をわずかに含む。 ○明褐色～黒褐色。 ○第3号方形周溝墓出土。第II様式。
71	高杯	○16.0 (復) ○6.4 ○17.0 (復)	○碗形の杯部。口縁端部は内湾し、丸みをもつ。中実の柱状部。脚部は外方へ短く伸び、端部は面をもつ。 ○杯部は磨減のため調整法は不明。柱状部外面は縦方向のヘラミガキ。脚部外面は横ナデ。端面と内面は横方向の板ナデ及びナデ。内面に指頭圧痕が残る。	○良好 ○5mm以下の石英、雲母を含む。 ○にぶい黄褐色。 ○杯部外面と脚部に黒斑。第5号方形周溝墓出土。第II様式。
72	無頸壺	○8.0 (復) ○ — ○7.6 (現)	○垂直に立ち上がる口縁部。口縁端部は丸みをもつ。体部は丸みをもつ。 ○口縁部内外面と端部は横ナデ。体部内外面はナデ。内面に指頭圧痕が残る。体部に8条からなる櫛描直線文を施す。	○良好。 ○0.1～1mmの角閃石、雲母、白色砂粒を含む。 ○暗灰黄色。 ○口縁部から腹部にかけて黒斑。第2号方形周溝墓出土。第II様式。
73	甕	○25.8 (復) ○9.8 ○40.5	○短く斜めに外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。体部はややふくらむ。腹径は口径より大。底部は平底。 ○口縁部内面と端部は横ナデ。頸部外面には指頭圧痕が残る。内面は縦方向の板ナデ。体部外面全体に縦方向の板ナデの後、下半に横方向のハケメ。体部内面は全体に縦方向の強いナデの後、下半に板ナデ、及びハケメ。底部外面は横方向のヘラケズリ。内外面とも磨減が著しい。	○良好 ○1～5mmの石英を多く含む。 ○外面は橙色。内面は黄褐色。 ○腹部相対位置に黒斑。第2号方形周溝墓出土。第II様式。

番号	器種	法量(cm)	形態・技法の特徴	備考
74	甕	○24.4 ○— ○30.2 (現)	○短く外反する口縁部。口縁端部は下方にやや肥厚し、面をもつ。体部はふくらみをもつ。腹径は口径より大。 ○口縁部内外面と頸部外面は横ナデ。肩部外面は斜め方向のハケメの後、横方向のハケメ。腹部外面は、縦方向のていねいなヘラミガキ。頸部と肩部内面は横方向のヘラミガキ。腹部内面は縦方向のハケメ。	○良好 ○1~2mmの石英、長石、角閃石を含む。 ○にぶい褐色。 ○腹部の相対位置に黒斑。第6号方形周溝墓出土。第Ⅲ様式。
75	壺	○11.5 (復) ○5.9 ○34.2	○口縁部は筒状で、やや外反する。口縁端部はわずかに外傾し、面をもつ。体部は丸みをもち、球形に近い。底部は平底。 ○口縁部内外面は縦方向のハケメの後、横ナデ。内面には指頭圧痕が残る。体部外面は縦方向の粗いハケメの後、底部から腹部最大径部分に至る間をヘラミガキ。内面は肩部を左上がりの方向のハケメ。底部ちかくをハケメの後ヘラミガキ。口縁部には2条の凹線文を施す。頸部には貼付圧痕文凸帯を1帯施す。	○良好。 ○砂粒を含む。 ○灰白色~にぶい橙色。 ○腹部下半に煤が付着。腹部に黒斑。土抔墓出土。第Ⅳ様式。

その他遺構出土の弥生土器 (図版7)

番号	器種	法量(cm)	形態・技法の特徴	備考
76	壺	○14.8 (復) ○— ○4.7 (現)	○斜めに外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。 ○口縁端部はヘラ状のもので横ナデ。内面は横方向の板ナデ。外面は右下がり方向の板ナデ。頸部に4条からなる櫛描直線文を施す。	○良好。 ○雲母、角閃石、白色砂粒を含む。 ○灰褐色~黒褐色。 ○焼土塚1出土。第Ⅱ様式。
77	甕	○17.5 (復) ○— ○4.8 (現)	○短く外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。体部はわずかにふくらむ。 ○口縁部と体部の内面及び端部は横方向の板ナデ。口縁部と体部の外面は下方から上方へ向う板ナデ。	○良好。 ○0.5mm以下の角閃石、石英、長石、雲母を含む。 ○黒色。 ○焼土塚1出土。第Ⅱ様式。
78	甕	○18.8 (復) ○— ○10.0 (現)	○短く斜めに外反する口縁部。口縁端部は丸みをもつ。体部はややふくらむ。外面の頸部と体部の境界はわずかに稜をもつ。倒鐘形。 ○口縁端部は横ナデ。口縁部と頸部の外面は横方向の細かいハケメ。体部内面は斜め方向のヘラミガキ。口縁部と体部の内面は横方向の板ナデ。	○良好。 ○1~2mmの長石、角閃石、雲母を含む。 ○外面は灰褐色。内面は灰黄褐色。 ○焼土塚1出土。第Ⅱ様式。
79	甕	○19.4 (復) ○— ○11.2 (現)	○短く斜めに外反する口縁部。口縁端部は丸みをもつ。体部はわずかにふくらむ。倒鐘形。口径は腹径より大。 ○口縁部外面と端部は横ナデ。頸部外面に指頭圧痕が残る。口縁部内面は横方向の強い板ナデ。体部外面は縦方向のハケメの後、部分的にヘラミガキ。内面は斜め方向の板ナデの後、下半の一部をヘラミガキ。	○良好。 ○1~2mmの角閃石、石英、長石を含む。 ○黒褐色。 ○焼土塚1出土。第Ⅱ様式。
80	甕	○13.7 (復) ○— ○6.1 (現)	○斜めに短く外反する口縁部。口縁端部はやや垂下し、丸みをもつ。体部はわずかにふくらみをもつ。 ○口縁部外面と端部は横ナデ。口縁部と頸部内面は横方向の粗いハケメ。体部外面は縦方向の粗いハケメ。内面は縦方向の非常に細いハケメ。	○良好。 ○1~3mmの長石、石英を含む。 ○外面は灰褐色。内面は黄灰色。 ○外面全体に煤が付着。土抔墓2出土。第Ⅱ様式。
81	甕	○16.5 (復) ○— ○4.2 (現)	○短く斜めに外反する口縁部。口縁端部は丸みをもつ。体部はほとんどふくらみをもたない。 ○口縁部内外面と端部は横ナデ。頸部外面に指頭圧痕が残る。頸部内面は横方向の板ナデ。体部外面には複帯構成の櫛描直線文を施す。	○良好。 ○角閃石、長石、石英を含む。 ○外面は暗褐色。内面は淡褐色。 ○焼土塚2出土。第Ⅱ様式。
82	甕	○16.5 (復) ○— ○6.3 (現)	○短く外反する口縁部。口縁端部は丸みをもつ。体部はわずかにふくらむ。 ○口縁部外面と端部は横ナデ。口縁部と体部内面は横方向の強い板ナデ。指頭圧痕が残る。体部外面は斜め方向の板ナデ。	○良好。 ○1mm以下の雲母、角閃石を含む。 ○褐色。 ○外面全体に煤が付着。焼土塚3出土。第Ⅱ様式。

番号	器種	法量(cm)	形態・技法の特徴	備考
83	甕	○19.5 (復) ○— ○11.2 (現)	○短く斜めに外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。体部はややふくらむ。 ○口縁部内外面と端部は横ナデ。体部外面は斜め方向の粗いハケメ。体部内面は横方向の粗いハケメ。	○良好。 ○1mm以下の角閃石、石英、長石を含む。 ○外面は明赤灰色。内面はにぶい褐色。 ○外面全体に煤が付着。焼土壇3出土。第II様式。
84	無頸壺	○5.7 (復) ○4.9 ○11.5	○口縁部は直線的に内傾し、端部付近で立ち上がる。口縁端部は丸みをもつ。体部は丸みをもつが最大腹径が器高の約1/3にあり、縦長の器体。底部は平底。底面の形態はいびつで不正五角形を呈す。 ○口縁部内外面と端部は強い横ナデ。体部外面は全体に斜め方向の粗いハケメ。内面は指押え状の強い指ナデ。指頭圧痕が残る。底部にはへら状の工具痕が残る。底部外面は指頭圧痕が明瞭に残る。底面は無調整で凹凸がある。	○良好。 ○長石、石英、角閃石を含む。 ○外面は黒灰褐色。内面は明灰褐色。 ○体部から底部に黒斑。手捏ねの土器で、いびつな形をしている。焼土壇2出土。第II様式。
85	底部(甕?)	○— ○6.0 ○5.1 (現)	○平底の底部。 ○外面は下方から上方に向う板ナデ。内面は表面剝離のため調整法は不明。	○良好。 ○1mm前後の角閃石、長石、石英を含む。 ○外面は灰褐色。内面は暗赤灰色。 ○焼土壇1出土。第II様式。
86	底部(壺?)	○— ○6.6 ○6.8 (現)	○平底の底部。 ○外面は横方向、下部は縦方向のハケメの後、へらミガキ。体部内面は板ナデの後、ハケメ。底部はナデの後、ハケメ。底面は不定方向のハケメ。	○良好。 ○長石、角閃石を含む。 ○外面は暗灰褐色。内面は灰褐色。 ○焼土壇1出土。第II様式。
87	底部(甕?)	○— ○6.4 ○6.7 (現)	○わずかに上げ底の底部。 ○外面はナデ。へら状工具痕が残る。内面は縦方向の強い板ナデ。底面は強いナデ。	○良好。 ○長石、角閃石、雲母を含む。 ○淡褐色～黒色。 ○焼土壇2出土。第II様式。

遺物包含層内出土の弥生土器 (図版7～9)

番号	器種	法量(cm)	形態・技法の特徴	備考
88	壺	○20.2 (復) ○— ○7.2 (現)	○斜めに外反し、さらに曲折する口縁部。口縁端部はやや丸みをもつ。太い筒状を呈する頸部。 ○口縁部外面と端部は横ナデ。口縁部と頸部の内面は横方向のハケメの後、ナデ。頸部外面はナデ。頸部には6条からなる櫛描直線文を施す。	○良好。 ○1～5mmの角閃石、雲母を含む。 ○外面は灰褐色。内面は赤褐色。 ○口縁部に黒斑。D地区出土。第II様式。
89	壺	○17.2 (復) ○— ○9.0 (現)	○斜めに外反し、さらに曲折する口縁部。口縁端部は丸みをもつ。体部はふくらみをもつ。頸部外面には7条からなる櫛描直線文を施す。 ○頸部内面は板ナデ。他は表面剝離のため調整法は不明。	○良好。 ○2～5mmの角閃石を多く含む。 ○暗褐色。 ○出土地区不明。第II様式。
90	壺	○18.2 (復) ○— ○21.1 (現)	○斜めに外反し、さらに曲折し横方向に開く口縁部。口縁端部は面をもつ。長く太い頸部。体部は丸みをもち、頸部から体部にかけてはなだらかな曲線を描く。 ○口縁部外面と端部は横ナデ。外面下半、及び口縁部内面は横方向のへらミガキ。内面は縦方向の粗いへらミガキ。体部外面は板ナデの後、肩部は横方向のへらミガキ。内面には指頭圧痕が残る。頸部外面は10条からなる櫛描直線文を施す。直線文間は、横方向のへらミガキ。	○良好。 ○1～4mmの石英、長石、雲母を含む。 ○暗灰褐色。 ○体部内面に黒斑。A地区出土。第II様式。
91	壺	○21.0 (復) ○— ○3.7 (現)	○斜めに外反する口縁部。口縁端部は上下につまみ出して面をもつ。下方が拡張。 ○口縁部外面は縦方向のハケメの後、横ナデ。内面は磨滅のため調整法は不明。口縁端面には5条からなる櫛描波状文を施す。	○良好。 ○2mm以下の角閃石、石英、長石を含む。 ○外面は灰黄褐色。内面は褐色。 ○C地区出土。第II様式。

番号	器種	法量(cm)	形態・技法の特徴	備考
92	壺	○ — ○10.5 ○32.0 (現)	○太い頸部。体部は丸みをもつ。底部は平底。 ○体部外面は斜め方向の板ナデ。体部下半から底部にかけて指頭圧痕が残る。内面は全体にナデ調整。頸部から肩部、腹部下方に指頭圧痕が残る。底部外面は縦方向の板ナデ。頸部には6条からなる櫛描直線文を施す。	○良好。 ○2～3mm前後の砂粒、角閃石を含む。 ○灰褐色。 ○腹部に黒斑。A地区出土。第II様式。
93	壺	○10.0 (復) ○ — ○8.7 (現)	○直線的に外上方へ伸びる口縁部。口縁端部は丸みをもつ。 ○口縁部外面は横ナデ。内面は上方を横ナデの後、部分的な横方向のヘラミガキ。下方を指押えの後、ナデ。外面には8条からなる櫛描直線文を施す。	○良好。 ○1mm前後の石英、長石、角閃石を含む。 ○灰黄褐色。 ○口縁部に黒斑。B地区出土。第II様式。
94	壺	○7.8 ○ — ○19.2 (現)	○直線的に外上方へ伸びる口縁部。口縁端部は丸みをもつ。球形に近い体部。頸部から体部へなだらかな曲線を描く。 ○口縁部内外面は横ナデ。体部下半の外面はナデ。肩部内面は指頭圧痕が残る。体部内面は横方向のハケメ。口縁部直下から体部上半にかけて6条からなる櫛描直線文を7帯、その下に波状文を1帯施す。	○やや軟質。 ○1mm前後の白色砂粒を多量に含む。 ○灰黄色。 ○口縁部から腹部外面にかけて黒斑。地区不明。第II様式。
95	壺	○9.5 (復) ○ — ○6.6 (現)	○斜め外方に伸びる口頸部。口縁端部は垂下して面をもち、下方がやや拡張。 ○口頸部外面は板ナデ。内面は縦方向の板ナデの後、横方向の板ナデ。口縁端面には3条からなる櫛描波状文、頸部には9条からなる櫛描直線文を施す。	○良好。 ○角閃石、雲母、白色砂粒を含む。 ○暗褐色。 ○B地区出土。第II様式。
96	壺	○16.5 (復) ○ — ○21.3 (現)	○斜めに外反する口縁部。口縁端部は丸みをもつ。頸部は太く長い筒状。体部は張り出す。 ○口縁端部付近は横ナデ。内外面は横方向のヘラミガキ。腹部外面はヘラミガキ。頸部内面は縦方向の粗いヘラミガキ。体部内面は横方向の粗いヘラミガキ。腹部内面に指頭圧痕が残る。頸部から肩部にかけて6条からなる櫛描直線文を9帯施す。文様帯間は横方向のヘラミガキ。	○良好。 ○1～3mmの石英、長石、角閃石を含む。 ○灰黄褐色。 ○E地区出土。第II様式。
97	壺	○ — ○6.5 ○16.5 (現)	○球形に近い体部。底部は平底。 ○外面は腹部から底部にかけ、主に横方向のていねいなヘラミガキ。内面は全体に、横方向のハケメの後、ていねいなヘラミガキ。底部内面はナデ。肩部外面には7条からなる櫛描直線文を施す。	○良好。 ○1～5mmの長石、石英、角閃石を含む。 ○黒褐色。 ○A地区出土。第II様式。
98	無頸壺	○6.5 (復) ○6.2 ○20.2	○内湾する口縁部。口縁端部は丸みをもつ。体部は球形に近い。底部は平底。最大腹径は器高の中央よりやや下にある。 ○口縁部内外面と端部は横ナデ。内面には指頭圧痕が残る。肩部内面は縦方向の強いナデ。腹部外面は横方向のハケメの後、ナデ。腹部及び底部内面は横方向のハケメ。底部内面には指頭圧痕が残る。底部外面は縦方向のハケメ。底面はヘラケズリ。肩部外面には5条からなる櫛描直線文を8帯施した後、2帯おきに扇形文を入れ、隅丸長方形帯の流水文を描く。その下に扇形文を施す。	○良好。 ○1～2mmの長石、角閃石、雲母を含む。 ○暗灰黄褐色。 ○D地区出土。第II様式。
99	鉢	○27.2 (復) ○8.4 (復) ○17.3	○外上方へ直線的に伸びる体部から口縁部。口縁端部は内側へやや肥厚し、丸みをもつ。底部は平底。 ○口縁端部は横ナデ。体部外面は縦方向の板ナデ。内面は縦方向の板ナデの後、横方向の板ナデ。体部外面には6条からなる櫛描直線文を7帯施す。	○良好。 ○角閃石、雲母、白色砂粒を含む。 ○淡褐色。 ○体部外面に黒斑。出土地区不明。第II様式。
100	鉢	○ — ○ — ○21.3 (現)	○ややふくらむ体部。体部外面に半円状の把手をもつ。 ○体部外面は縦方向のハケメの後、頸部及び把手の周囲を横ナデ。頸部内面は横ナデ。体部内面は横方向のハケメ。	○良好。 ○長石、雲母、角閃石を含む。 ○外面は暗灰褐色。内面は赤褐色。 ○C地区出土。第II様式。

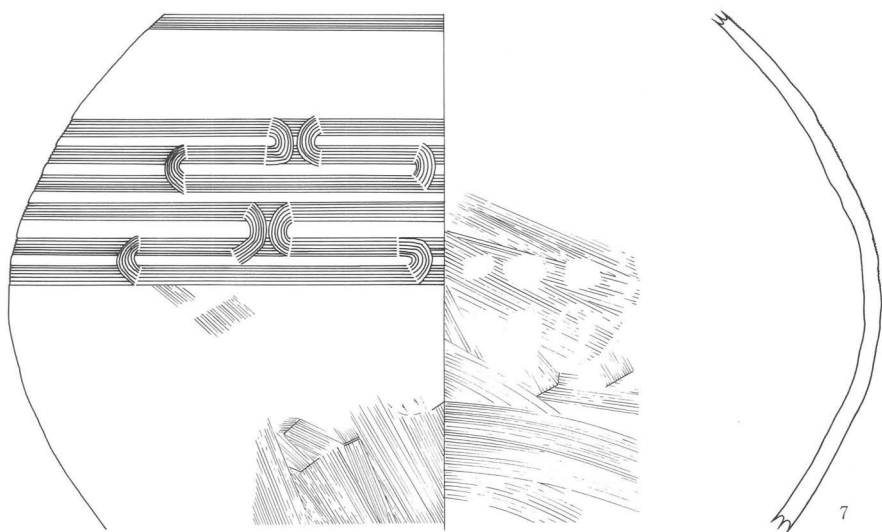
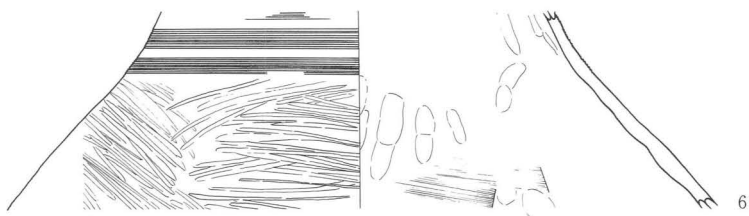
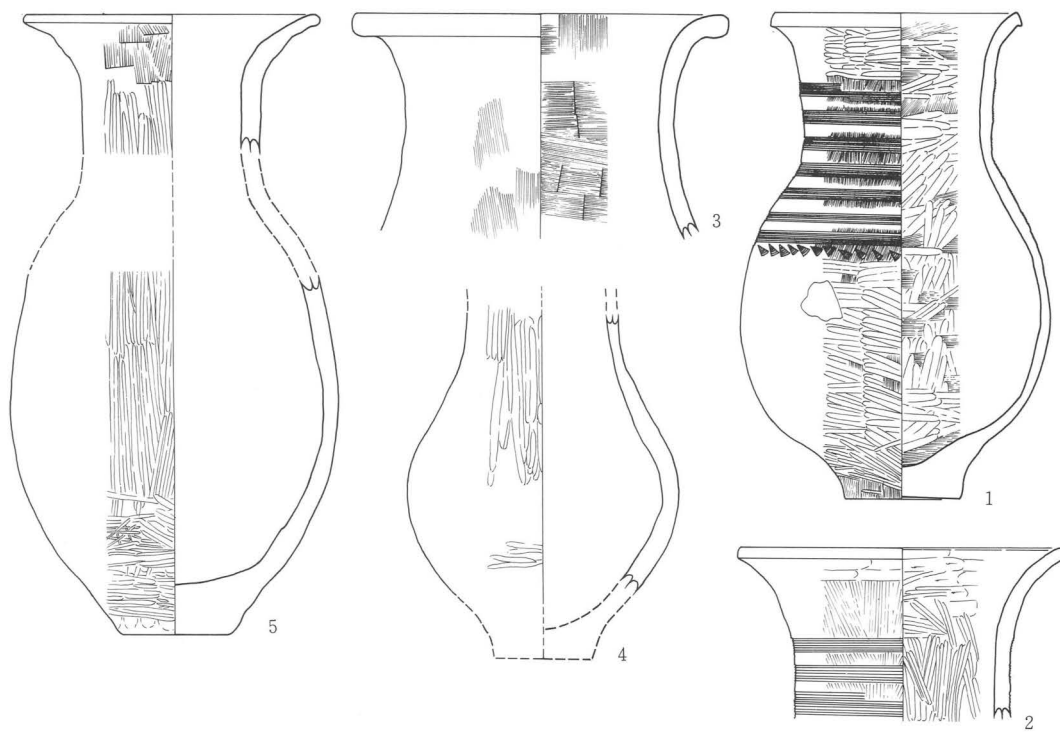
番号	器種	法量(cm)	形態・技法の特徴	備考
101	鉢	○12.0 (復) ○ — ○8.8 (現)	○口縁部は内弯し、端部は丸みをもつ。碗形の体部。 ○口縁端部は横ナデ。体部外面は非常にいねいなヘラミガキ。体部内面の上半は不定方向のナデ。下半は表面剝離のため調整法は不明。	○良好。 ○3～4mmの砂粒を含む。 ○外面は明褐色。内面は灰白色～橙色。 ○D地区出土。第II様式。
102	鉢	○19.0 (復) ○ — ○7.7	○斜め外方へ直線的に伸びる口縁部と体部。口縁端部は丸みをもつ。 ○体部外面は横方向のヘラミガキ。内面は縦方向のヘラミガキの後、横方向のいねいなヘラミガキ。指頭圧痕が残る。体部外面には9条からなる櫛描直線文に弧状文を挿入した縦形流水文を施す。	○良好。 ○角閃石、石英、長石を含む。 ○褐色。 ○A地区出土。第II様式。
103	鉢	○18.5 (復) ○7.5 (復) ○8.1	○斜め外方へ直線的に伸びる口縁部と体部。口縁部から体部下方向にかけて半環状の把手をつける。底部は平底。 ○口縁部内外面と端部は横ナデ。下半は横方向のヘラミガキ。体部内面の上半は横ナデ。下半は不定方向のヘラミガキ。指頭圧痕が残る。底部内面には部分的にハケメが残る。底部外面はヘラケズリ。体部外面には5条からなる櫛描直線文を5帯施す。把手部は全体にヘラミガキの後、上端に櫛描直線文を2帯施す。	○良好。 ○微粒の長石、雲母を含む。 ○灰褐色。 ○A地区出土。第II様式。
104	高杯	○ — ○13.5 (復) ○3.2 (現)	○裾広がり、水平に伸びる脚部。脚端部は面をもつ。 ○表面が磨滅し、調整法は不明。端部上端にキザミ目を施す。	○良好。 ○1～2mmの角閃石、石英、長石を含む。 ○褐色～浅黄橙色。 ○A地区出土。第II様式。
105	甕	○22.5 ○6.2 ○26.0	○口縁部は短く外反する。口縁端部は面をもつ。体部はわずかにふくらむ。倒鐘形。底部は突出し、中心よりややずれた位置に小孔を穿つ。 ○口縁部内外面と頸部外面は横ナデ。体部外面は粗い縦方向のハケメの後、一部ナデ。頸部と体部内面は横方向の粗いハケメ。底部内面は板状工具で下方からナデ上げている。	○良好。 ○2mm以下の角閃石、長石、石英を含む。 ○にぶい黄褐色。 ○A地区出土。第II様式。
106	甕	○13.5 (復) ○ — ○10.7 (現)	○短く外反する口縁部。体部はわずかにふくらむ。 ○口縁部内外面は横ナデ。体部外面は右下がり方向のハケメ。内面は横方向のハケメ。体部外面には4条からなる櫛描直線文を4帯施す。	○良好。 ○雲母、白色砂粒を含む。 ○外面は黒色。内面は灰褐色。 ○外面に煤が付着。A地区出土。第II様式。
107	甕	○17.0 (復) ○ — ○6.3 (現)	○口縁部は短く斜めに外反する。口縁端部は面をもつ。体部はわずかにふくらむ。口径は腹径より大。 ○口縁部外面と端部は横ナデ。頸部外面には指頭圧痕が残る。体部外面は剝離のため調整法は不明。口縁部から体部の内面は横方向のハケメ。	○良好。 ○1～2mmの角閃石、雲母、白色砂粒を含む。 ○外面は暗褐色。内面は淡褐色～褐色。 ○A地区出土。第II様式。
108	甕	○22.2 ○7.3 ○22.8	○口縁部は短く斜めに外反する。口縁端部は丸みをもつ。体部はわずかにふくらむ。倒鐘形。底部は平底。口径は腹径より大。 ○口縁部内外面と端部はナデ。体部内外面は斜め方向のヘラミガキ。底部内外面はナデ。内面には工具痕が残る。底面はヘラケズリ及びナデ。	○良好。 ○1mm前後の角閃石を多量に含む。 ○にぶい褐色～橙色。 ○体部上半の相対位置に黒斑。A地区出土。第II様式。
109	甕	○16.1 (復) ○5.2 ○21.6	○口縁部は強く斜めに外反する口縁端部は面をもつ。体部はわずかにふくらむ。底部はわずかに上げ底。 ○口縁部内外面と端部は横ナデ。頸部外面には指頭圧痕が残る。頸部内面は横方向のヘラミガキ。体部外面は右上がり方向のヘラミガキ。内面はナデ。底面はハケメ。	○良好。 ○1～2mmの砂粒を含む。 ○黒褐色。 ○D地区出土。第II様式。

須恵器・土師器 (図版 9)

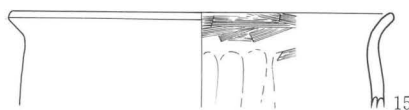
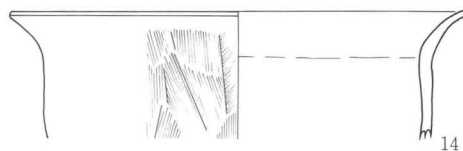
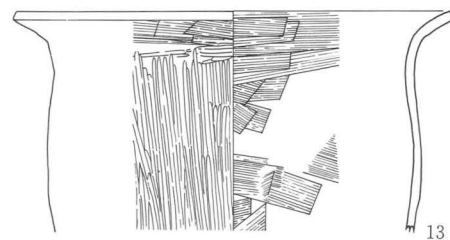
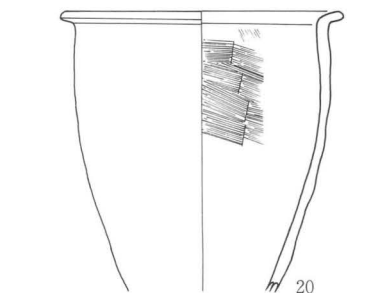
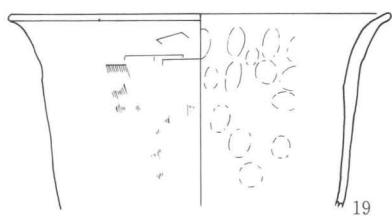
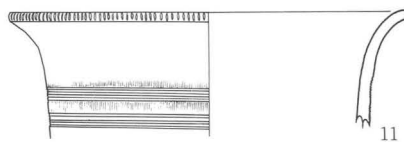
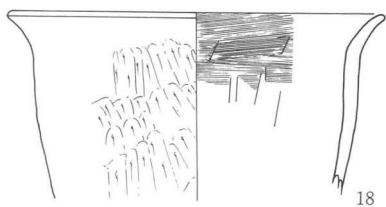
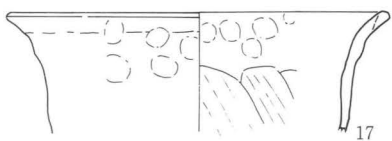
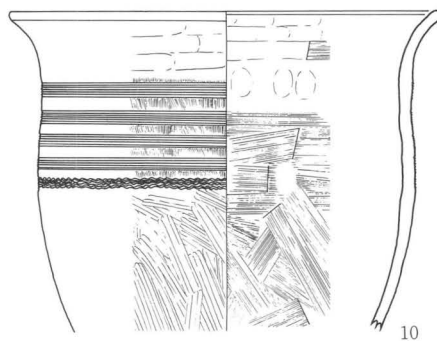
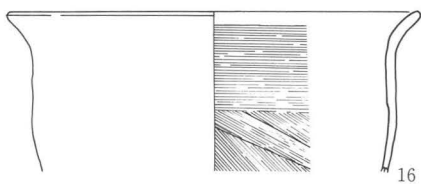
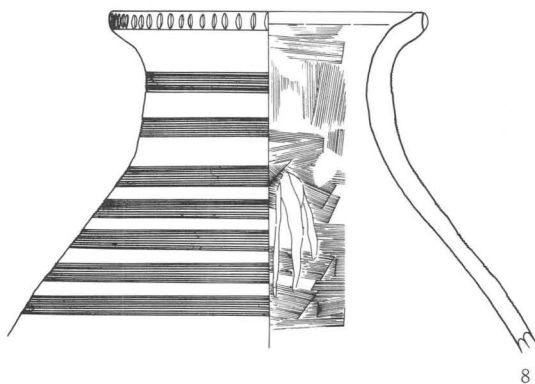
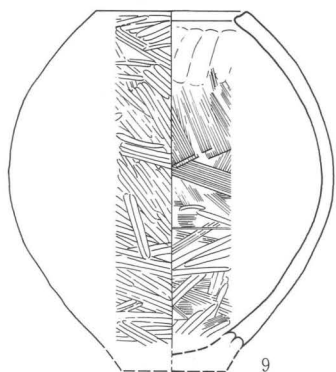
番号	器種	法量(cm)	形態・技法の特徴	備考
110	須恵器杯身	○11.2 (復) ○— ○2.9 (現)	○たち上がり部は、ほぼ垂直に伸び、口縁端部はやや肥厚して面をもち中央に沈線が入る。受け部は水平。 ○たち上がり部内外面、受け部、底部内面は回転横ナデ。底部外面は回転ヘラケズリ。ロクロの回転方向は時計回り。	○良好。 ○1mm前後の長石と微砂粒を若干含む。 ○灰青色。 ○G地区出土。
111	須恵器杯身	○9.5 (復) ○— ○3.0 (現)	○たち上がり部は内傾し、口縁端部はやや肥厚して面をもつ。中央はややくぼむ。受部は水平。 ○たち上がり部内外面、受け部、底部内面は回転横ナデ。底部外面は回転ヘラケズリ。	○良好。 ○微粒の砂を少量含む。 ○青灰色。 ○G地区出土。
112	須恵器杯身	○12.2 (復) ○7.4 (復) ○2.9 (現)	○外上方に伸びる口縁部と体部。端部は丸い。底部は平坦。 ○口縁部、体部内外面、底部内面は回転横ナデ。底部外面は回転ヘラケズリ。	○良好。 ○2mm大の白色砂粒を含む。 ○淡灰色。 ○出土地区は不明。
113	須恵器高杯	○— ○9.0 (復) ○4.0 (現)	○脚部は短く、四方に台形状の透し孔をもち、下方は段をなす。 ○脚部半ばにカキ目を施し、それ以外の部分は回転ナデ。透し孔は外方から刃の鋭利なもので穿っており、杯部底面には刃の痕が残る。調整はていねいである。	○良好。 ○1mm以下の白色砂粒をわずかに含む。 ○青灰色。 ○G地区出土。
114	須恵器杯蓋	○— ○4.1(つまみ部) ○1.7 (現)	○天井部のみ残存。扁平で丸い。中央がくぼむつまみをもつ。 ○天井部外面は回転ヘラケズリ。つまみ部は回転横ナデ。内面は回転横ナデ。	○良好。 ○砂粒をほとんど含まない。 ○外面は白灰色。内面は青灰色。 ○G地区出土。
115	須恵器甕	○12.0 (復) ○— ○2.5 (現)	○やや斜めに反外する口縁部。口縁端部は外側に肥厚し、丸みをもつ。 ○内外面とも回転横ナデ。口縁部外面に斜め方向のカキ目が残る。	○やや軟質。 ○微粒の白色砂粒をわずかに含む。 ○青灰色。 ○G地区出土。
116	須恵器蓋	○13.0 (復) ○— ○2.7 (現)	○口縁部は垂直に下がり、端部は丸みをもつ。口縁部内面は上方がやや肥厚する。 ○全体に回転横ナデ。ロクロの回転は時計回り。	○良好。 ○0.5~2mm大の砂粒を含む。 ○灰白色。 ○H地区出土。
117	須恵器蓋	○13.0 (復) ○— ○3.6 (現)	○口縁部は垂直に下がり、端部は内傾して浅い凹みをもつ。口縁部と天井部の境に断面三角形の稜をもつ。 ○全体に回転横ナデ。	○良好。 ○微粒~2mm大の白色砂粒を含む。 ○灰色。 ○G地区出土。
118	須恵器甕	○17.0 (復) ○— ○5.6 (現)	○外上方に直線的に伸びる口縁部。外面上端に断面四角形の凸帯を、中ほどに断面三角形の凸帯を施す。 ○内外面とも回転横ナデ。口縁部外面は列点文を施す。	○やや軟質 ○1mm前後の長石、石英を含む。 ○灰白色~明青灰色。 ○G地区出土。
119	土師器甌	○— ○8.0 (復) ○6.2 (現)	○外上方へ伸びる体部。底部には穿孔がみられ、中央に1つ、周囲に3つあるものと考えられる。 ○体部外面は平行タタキ目が残る。内面は横ナデ。底部の穿孔は外側から施しており、内面に粘土の盛り上がりが見られる。	○良好。 ○0.5~2mm大の砂粒を多く含む。 ○外面はにぶい橙色。内面は淡灰色。 ○H地区出土。

版 图

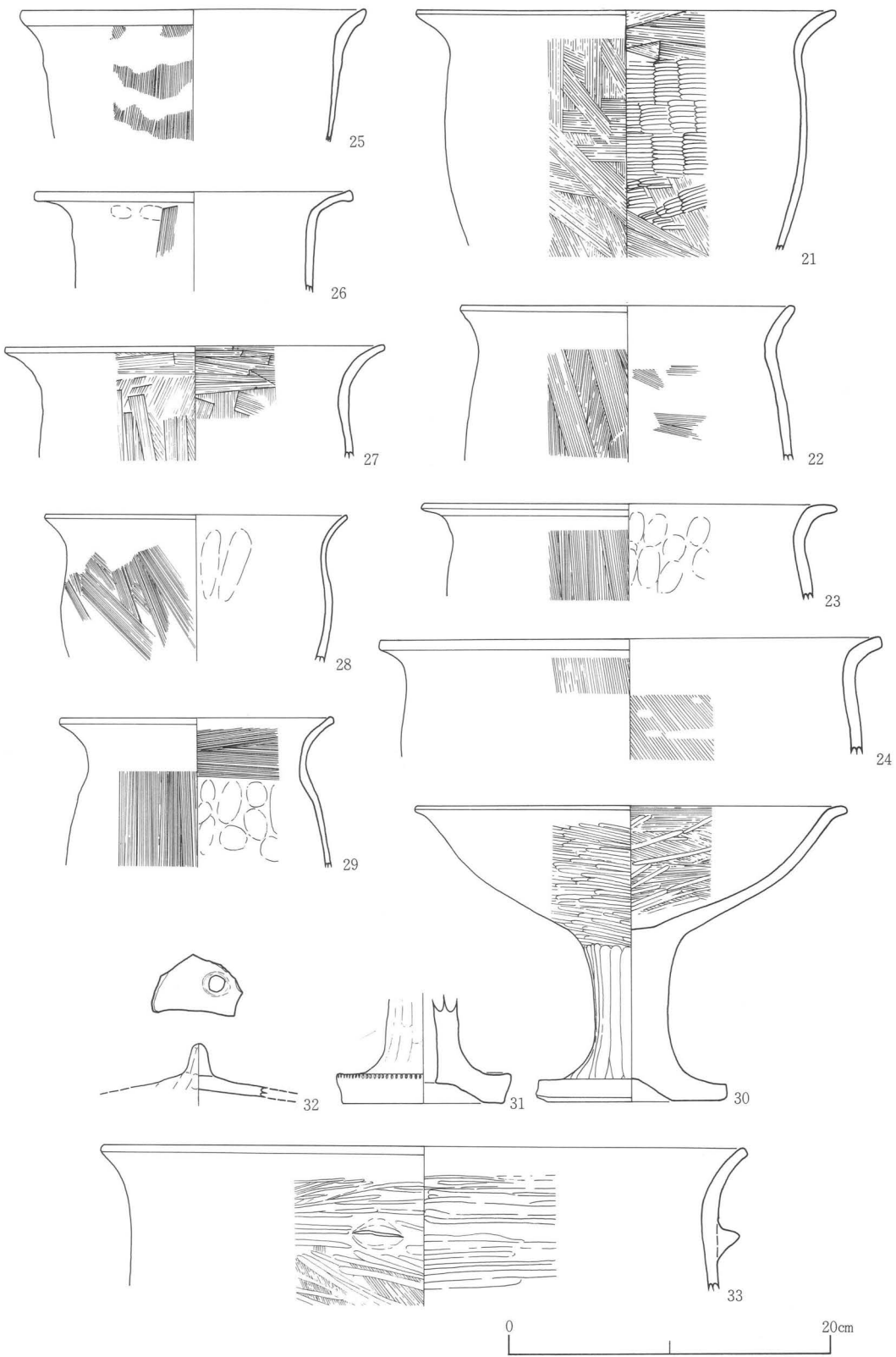
图版1
弥生土器实测图

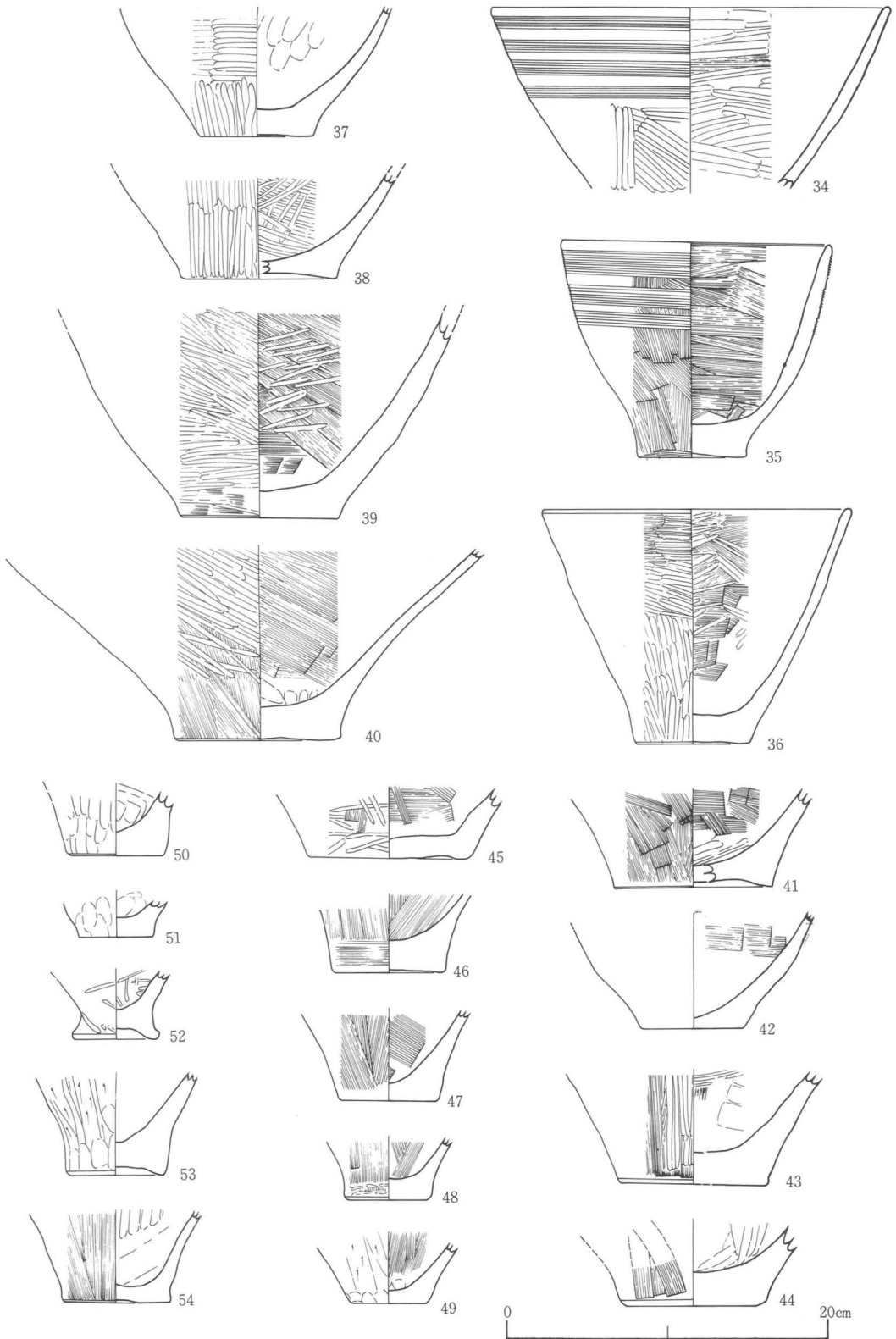


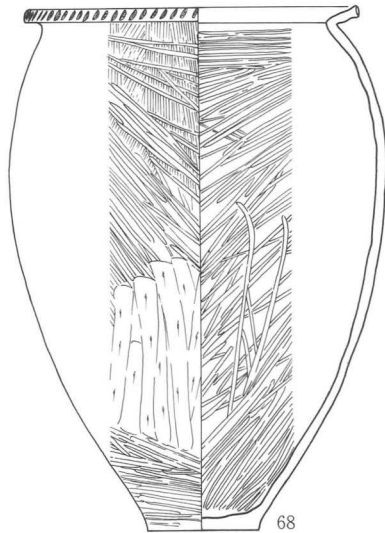
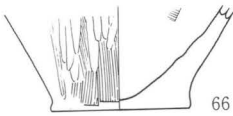
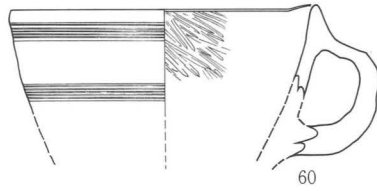
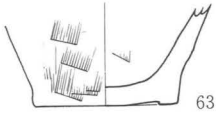
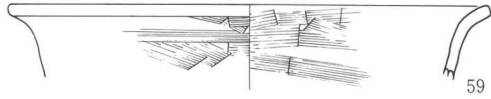
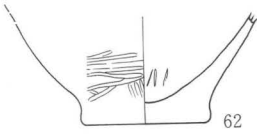
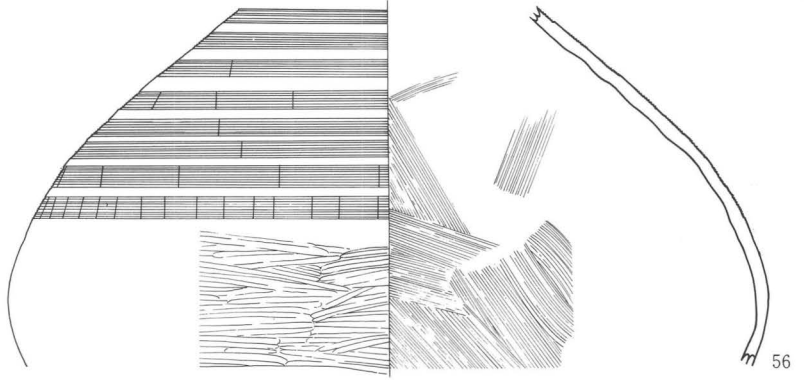
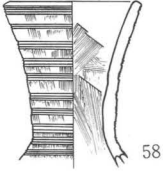
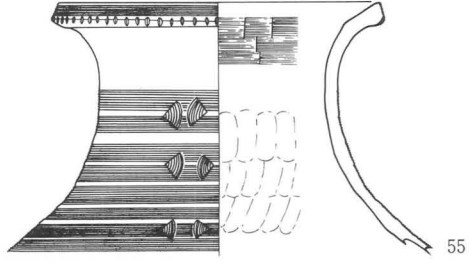
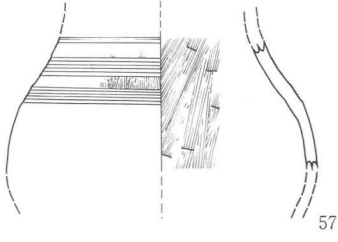
0 20cm



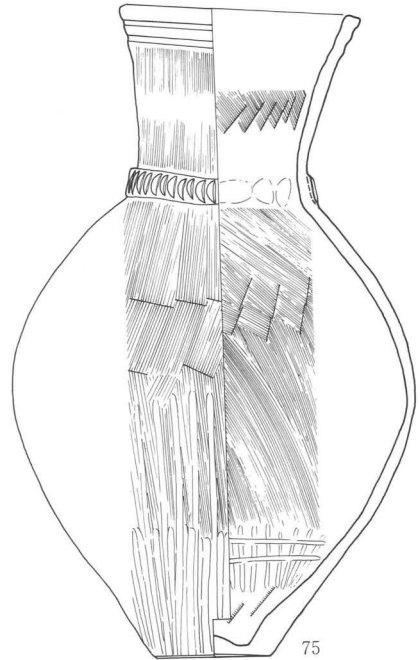
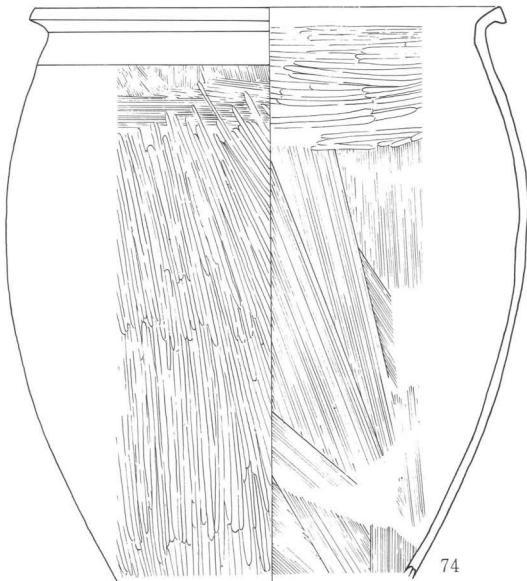
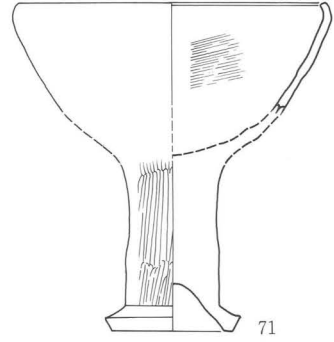
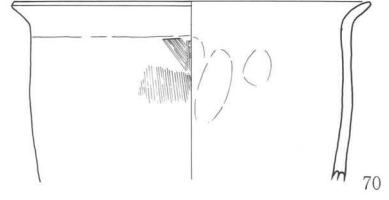
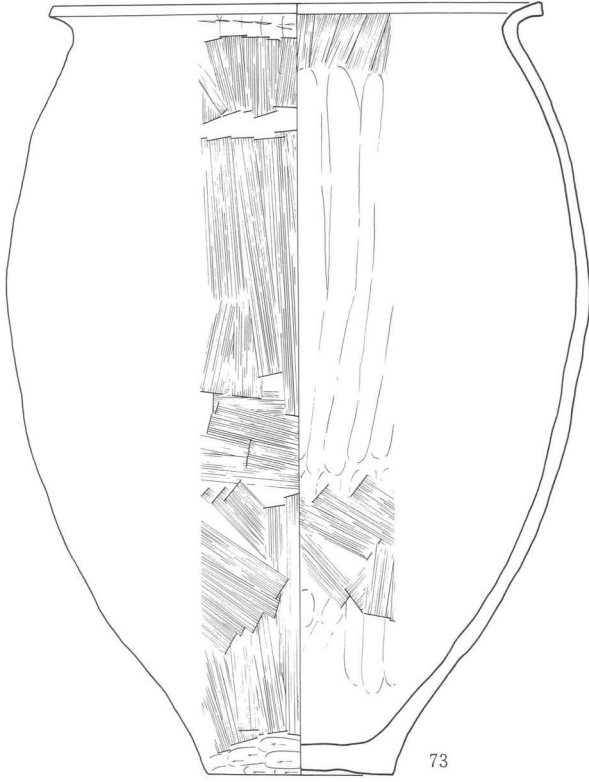
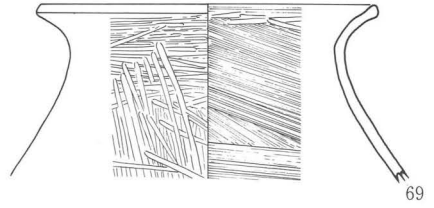
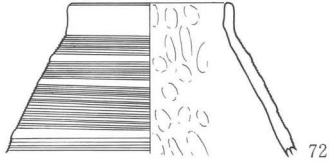
0 20cm

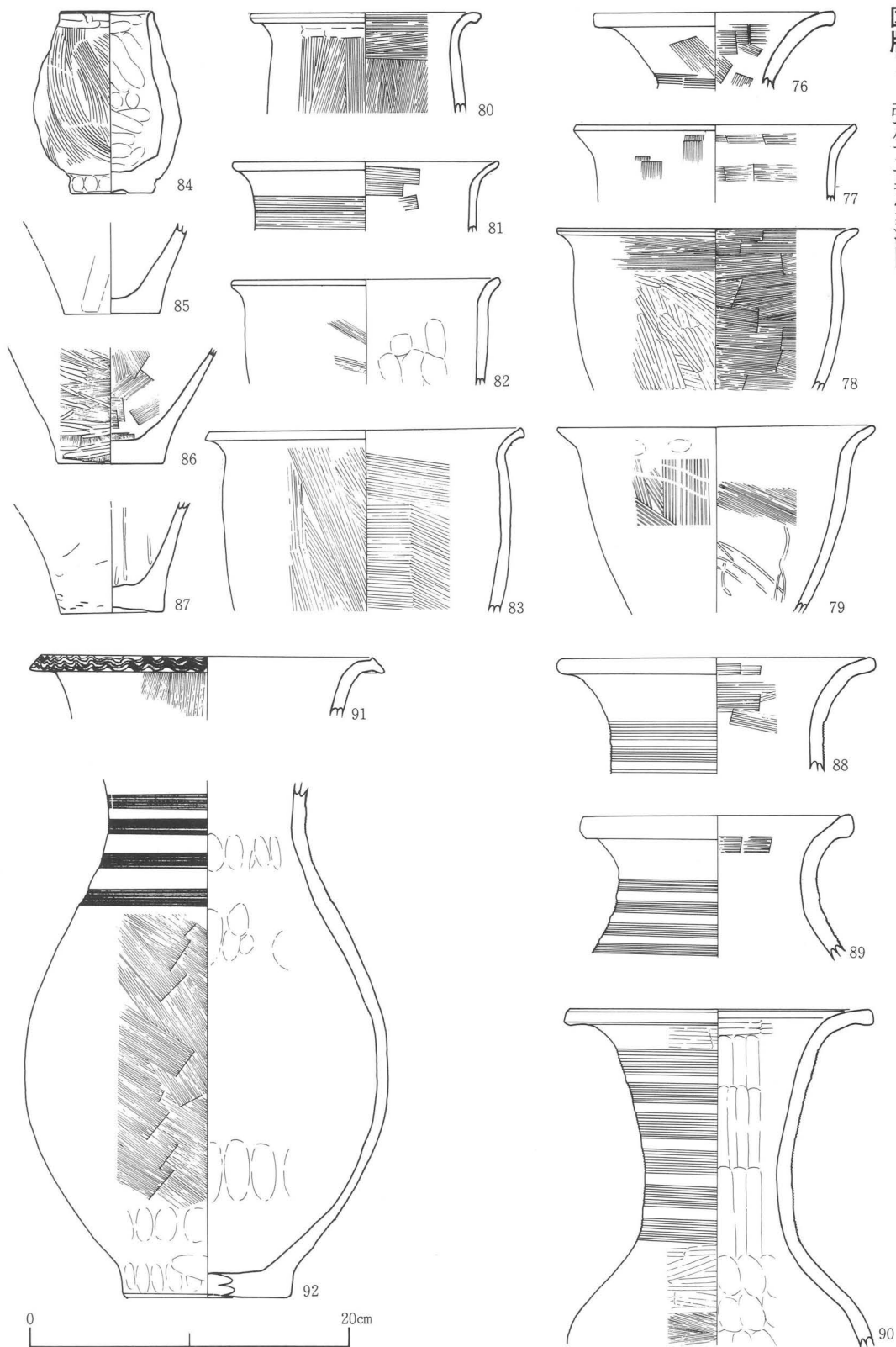


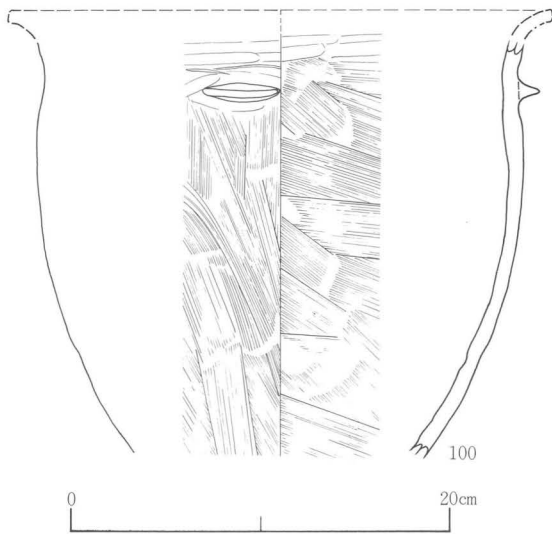
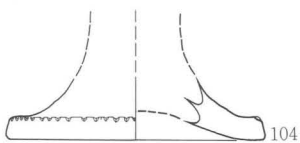
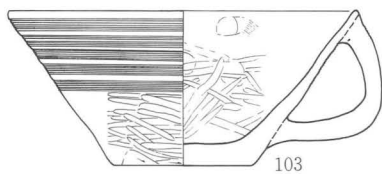
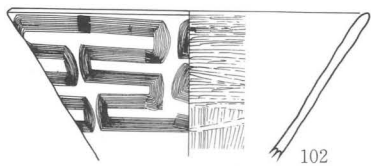
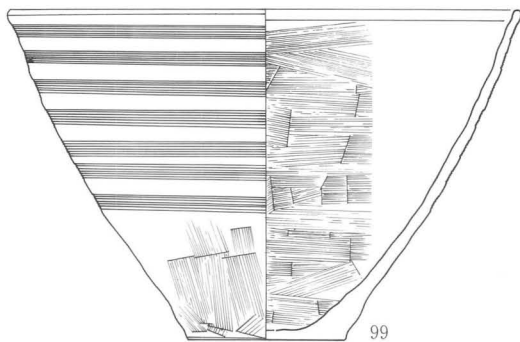
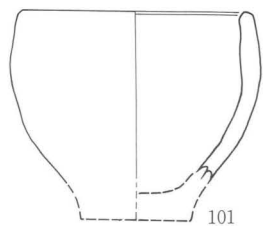
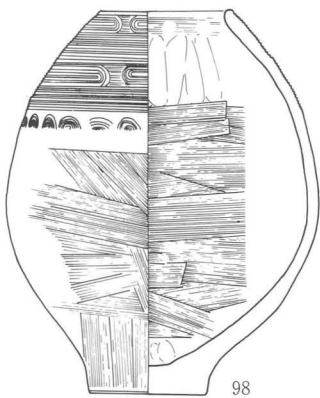
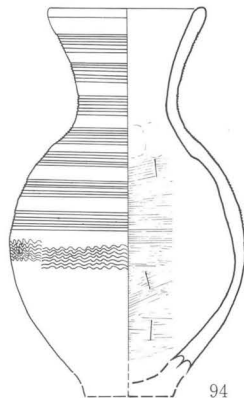
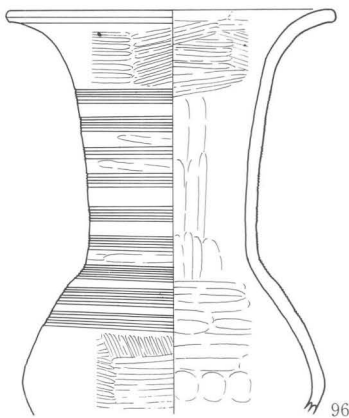
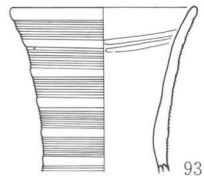
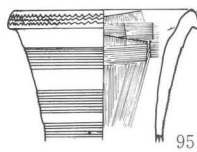
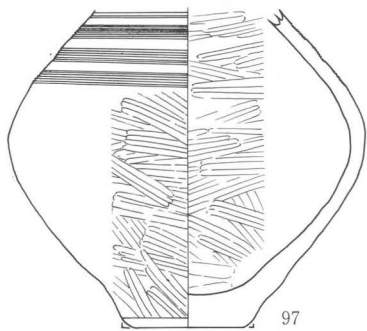


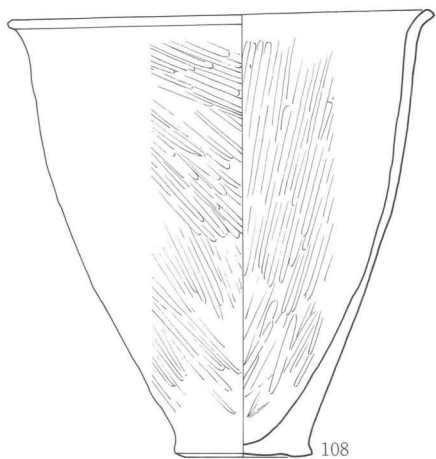


0 20cm

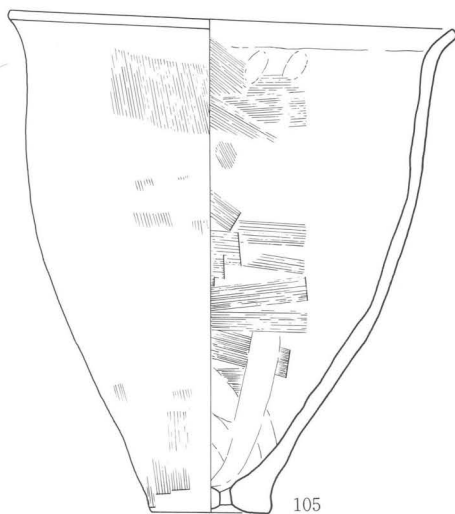




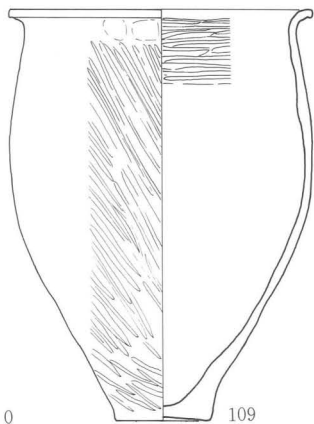




108



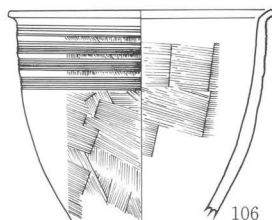
105



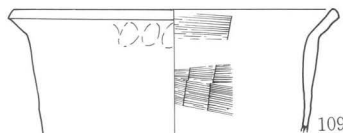
109

0

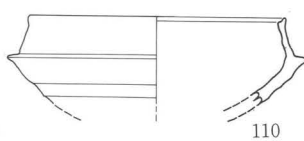
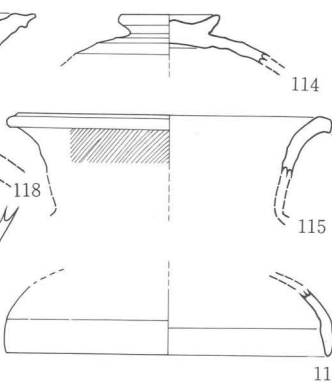
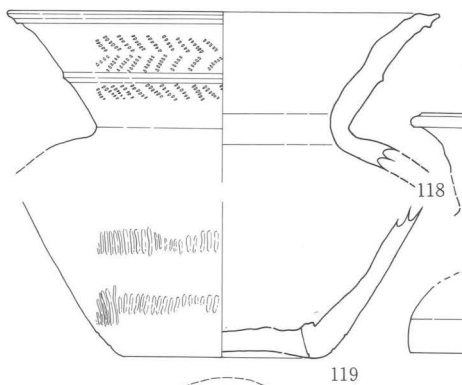
20cm



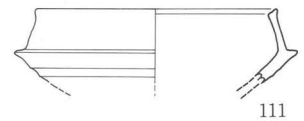
106



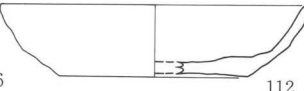
109



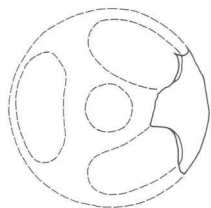
110



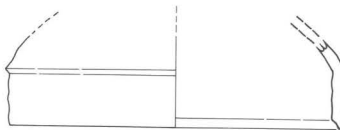
111



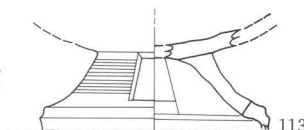
112



119



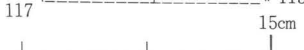
115



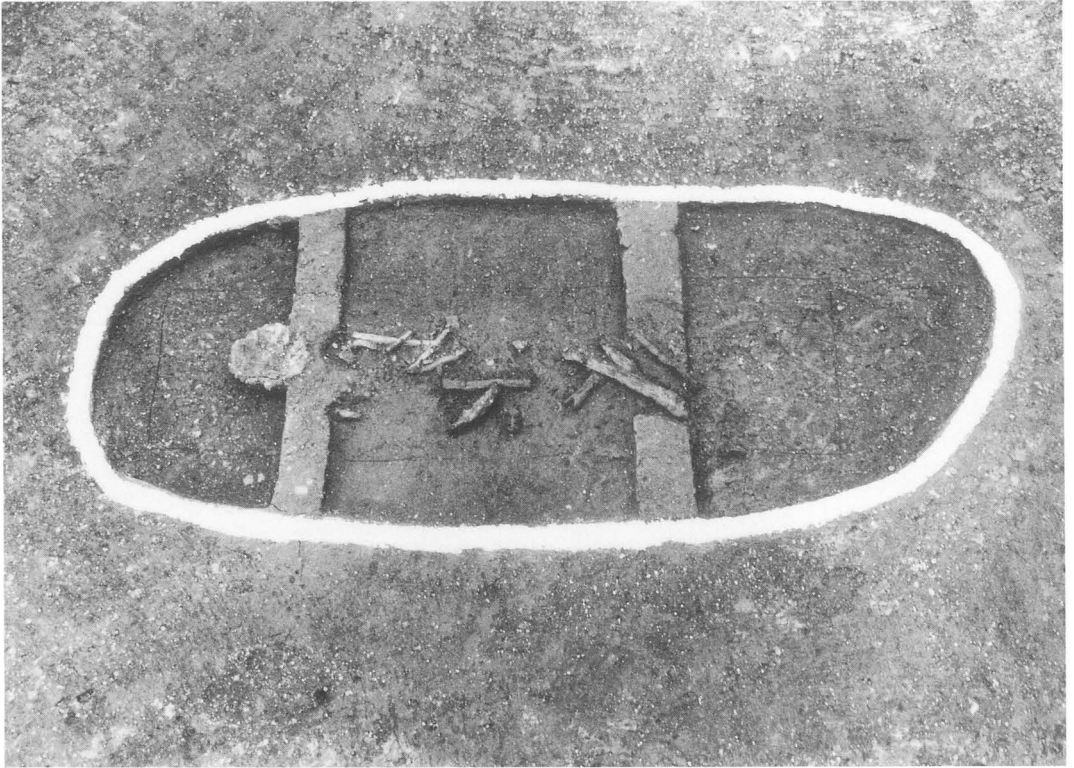
113

0

15cm



117



1. 木棺墓



2. 第1号方形周溝墓



1. 溝11遺物出土状況



2. 溝11遺物出土状況



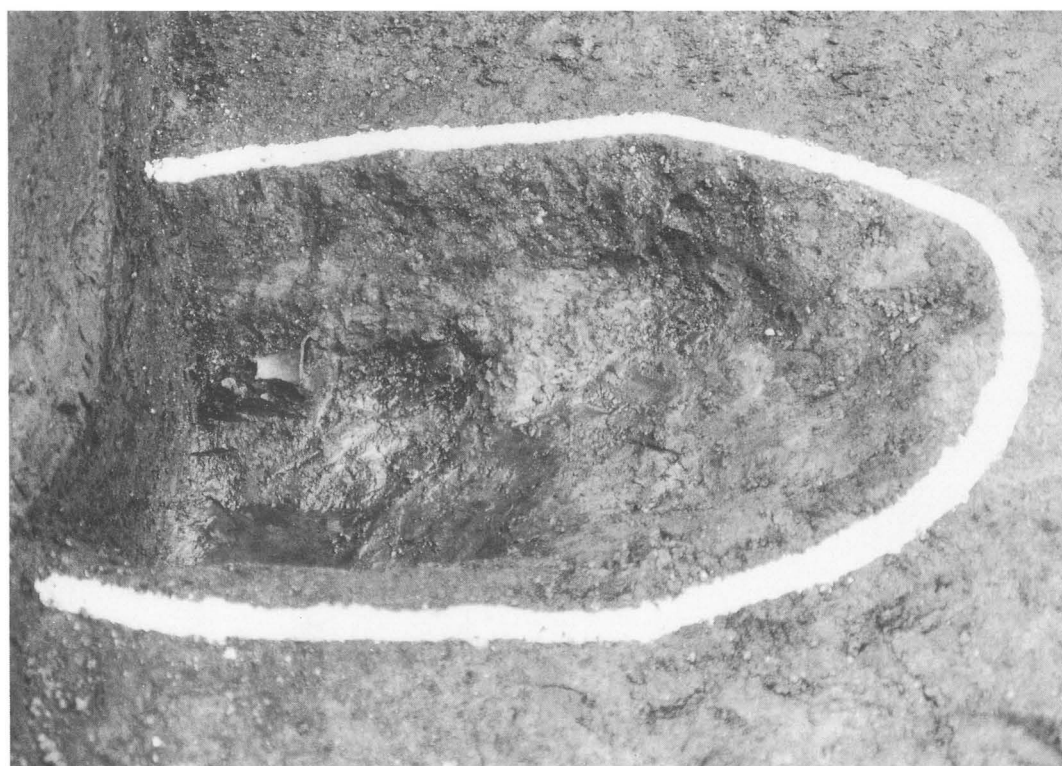
1. C地区最終遺構面



2. C地区最終遺構面



1. 土塚1



2. 土塚1



1. 焼土坑 2



2. 焼土坑 1



1. 第2～4号方形周溝墓(東より)



2. 第2～4号方形周溝墓(南より)



1. 第2号方形周溝墓(南西より)



2. 第3号方形周溝墓(北より)



1. 第2号方形周溝墓第1主体部 (南より)



2. 第2号方形周溝墓第1主体部 (西より)



1. 第2号方形周溝墓第1主体部(人骨細部)



2. 第2号方形周溝墓第1主体部(人骨細部)



1. 第2号方形周溝墓埋葬犬骨(南より)



2. 第2号方形周溝墓埋葬犬骨(東より)



1. 第2号方形周溝墓第2主体部 (北より)



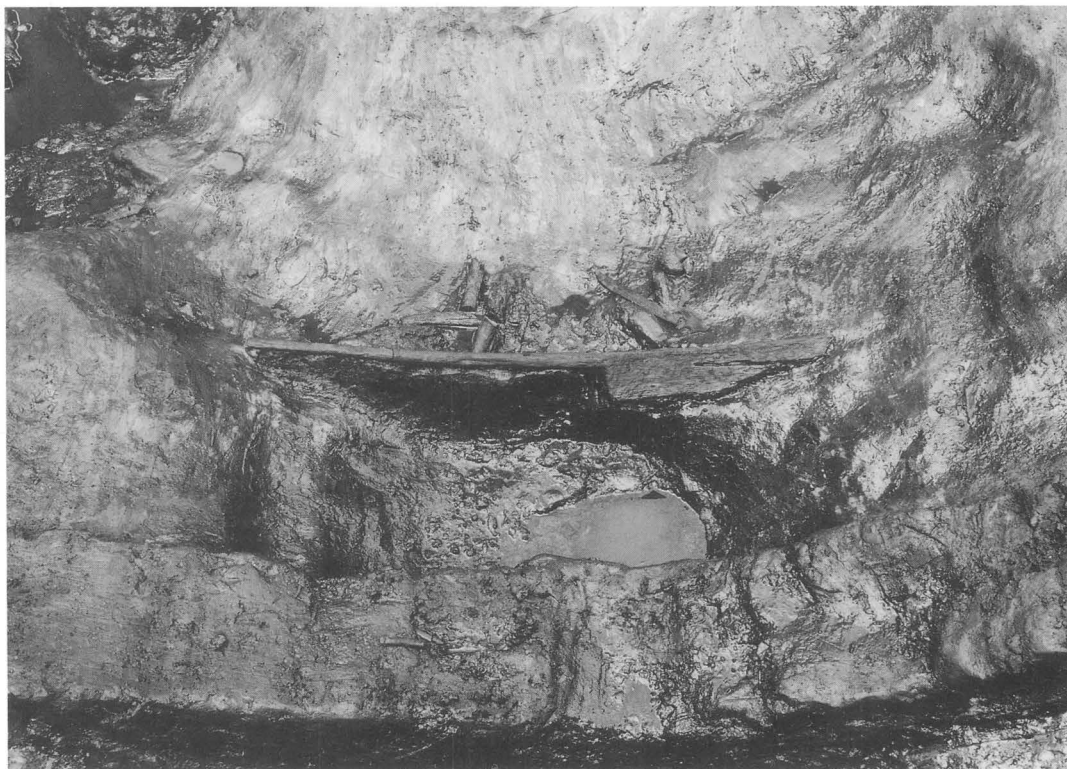
2. 第2号方形周溝墓第2主体部 (東より)



1. 第4号方形周溝墓主体部（南より）



2. 第4号方形周溝墓主体部（西より）



1. 第3号方形周溝墓鋤出土状況



2. 第2号方形周溝墓溝内甕出土状況



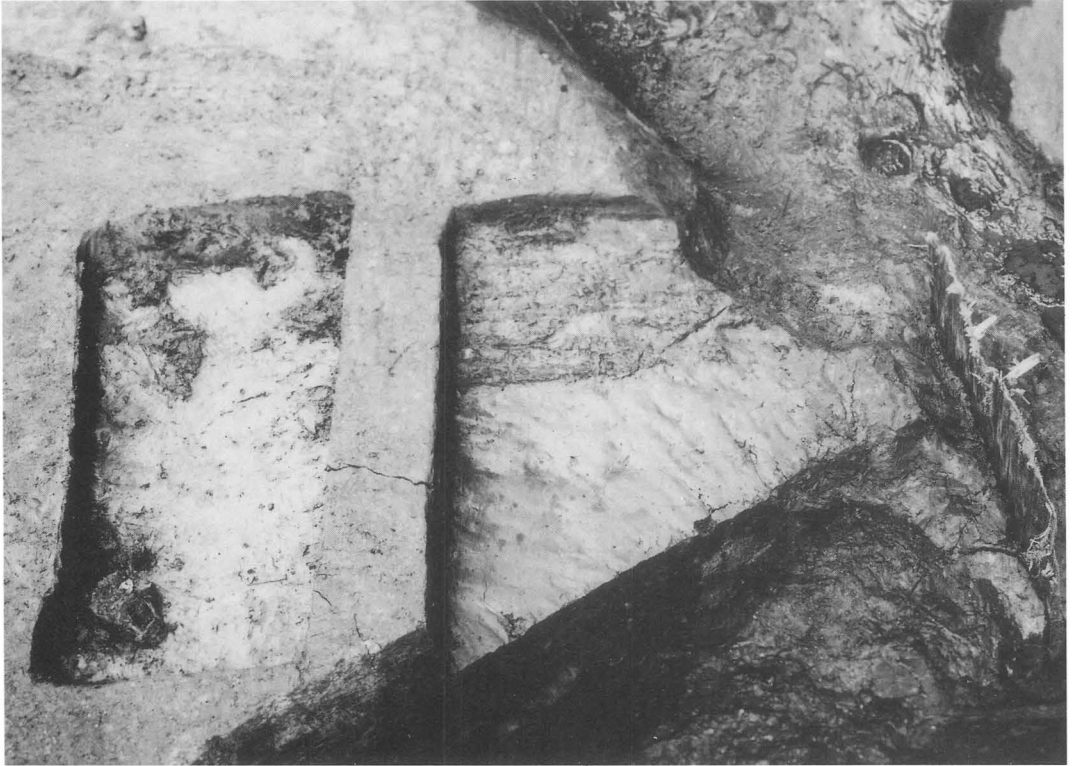
1. 第5号方形周溝墓(東より)



2. 第5号方形周溝墓(北より)

图版 24 遺構 (F地区) 第5号方形周溝墓第1主体部





1. 第5号方形周溝墓第1主体部上蓋検出状況



2. 第5号方形周溝墓第1主体部（北より）



1. 第5号方形周溝墓第1主体部(北より)



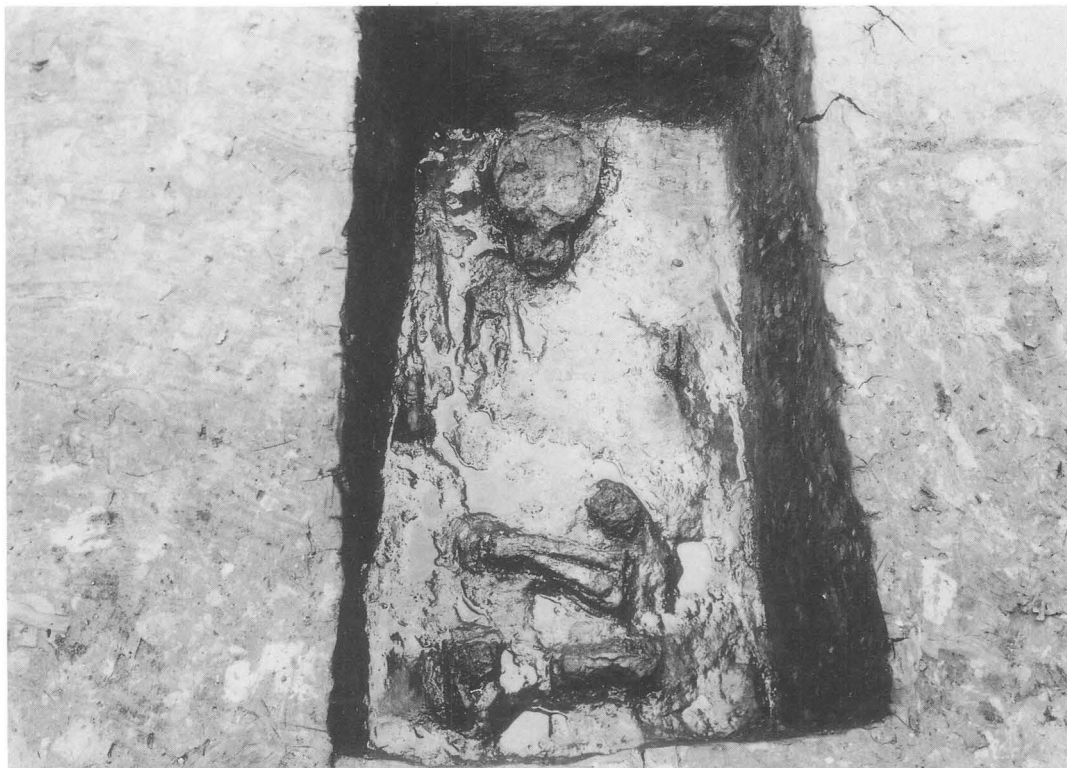
2. 第5号方形周溝墓第1主体部(東より)



1. 第5号方形周溝墓第1主体部（人骨細部）



2. 第5号方形周溝墓第1主体部（人骨細部）



1. 第5号方形周溝墓第2主体部（北より）



2. 第5号方形周溝墓第2主体部（東より）



1. 第6号方形周溝墓（南より）



2. 第6号方形周溝墓（西より）



1. 第6号方形周溝墓（西より）



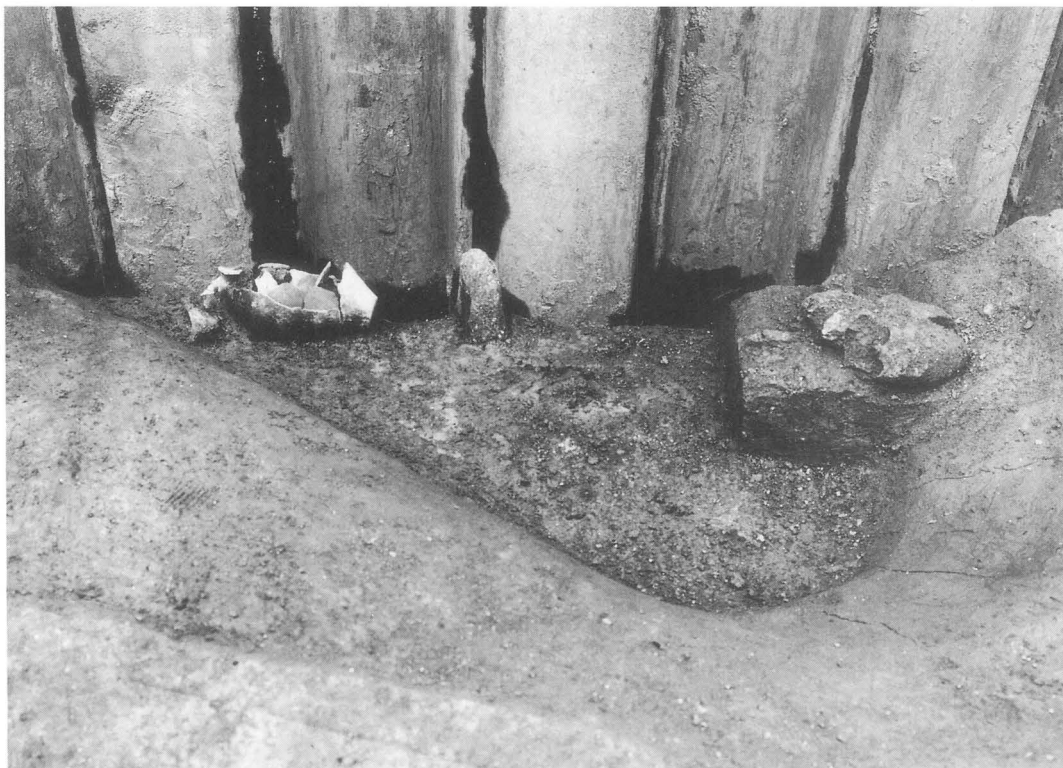
2. 第6号方形周溝墓溝内甕出土状況



1. 第6号方形周溝墓主体部（南より）



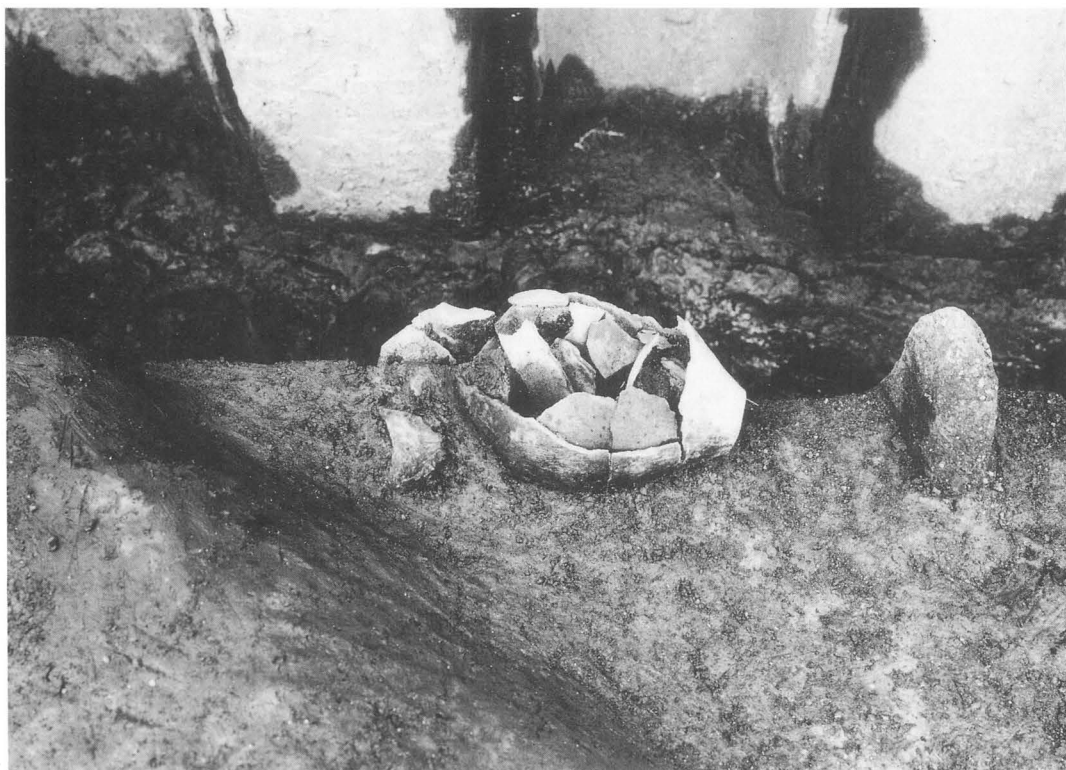
2. 第6号方形周溝墓主体部（北より）



1. 土壇墓（北より）



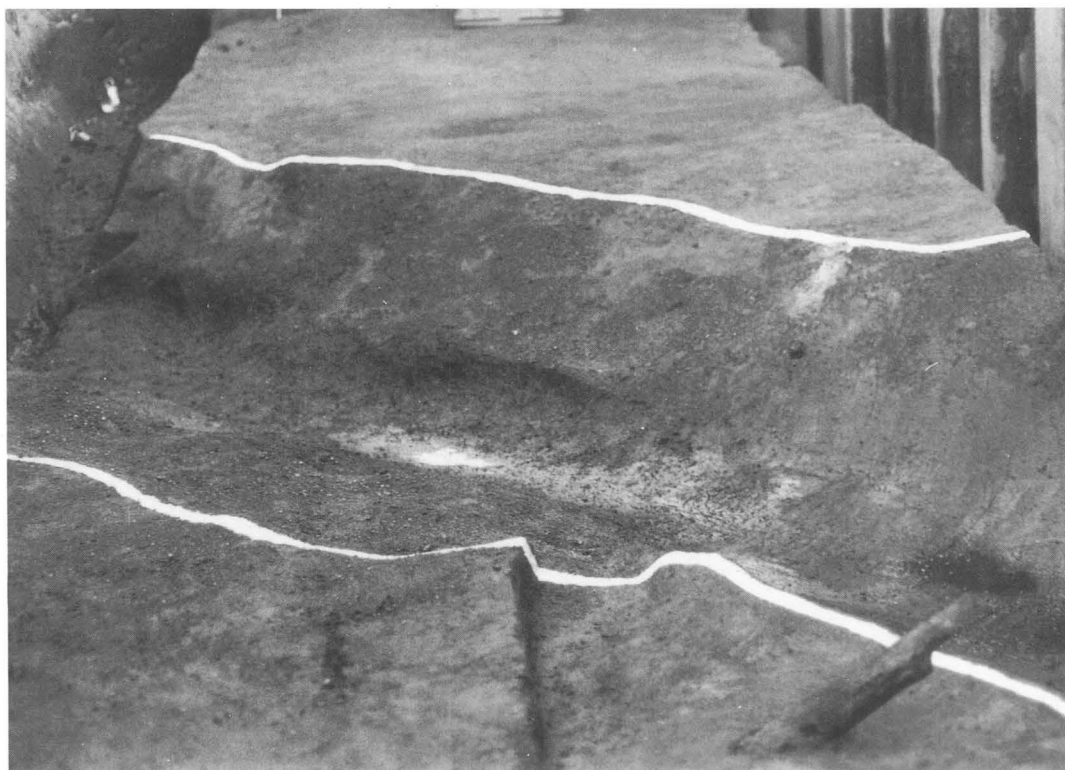
2. 土壇墓（人骨細部）



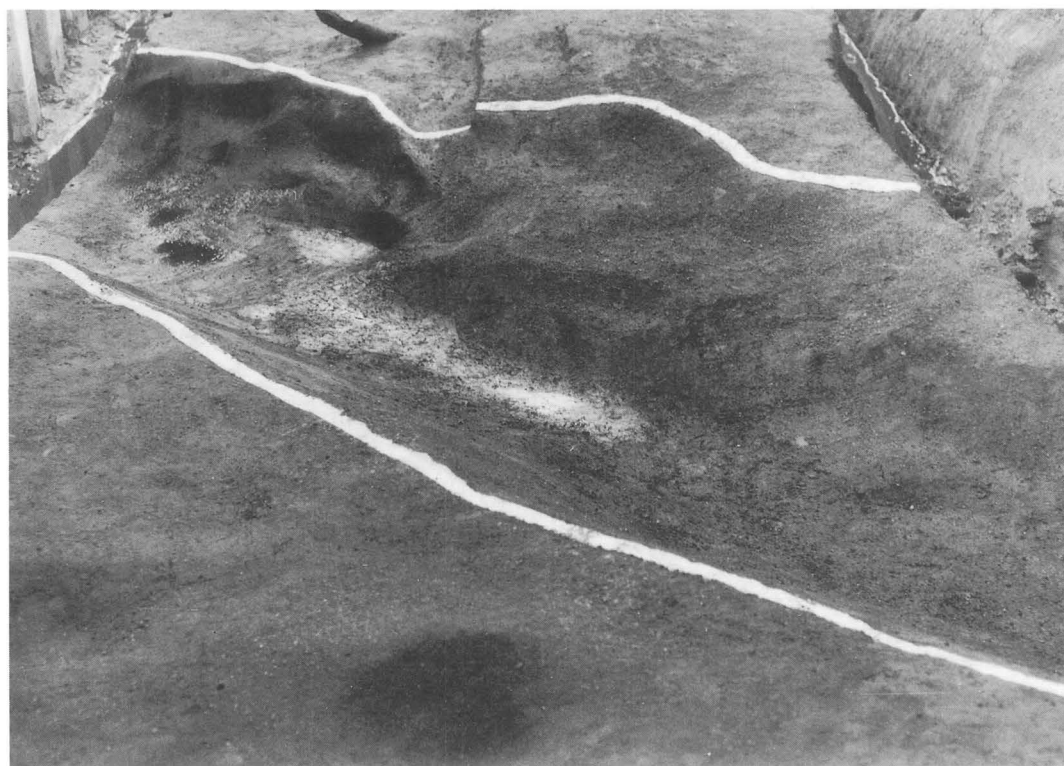
1. 土塚墓内壺出土状況



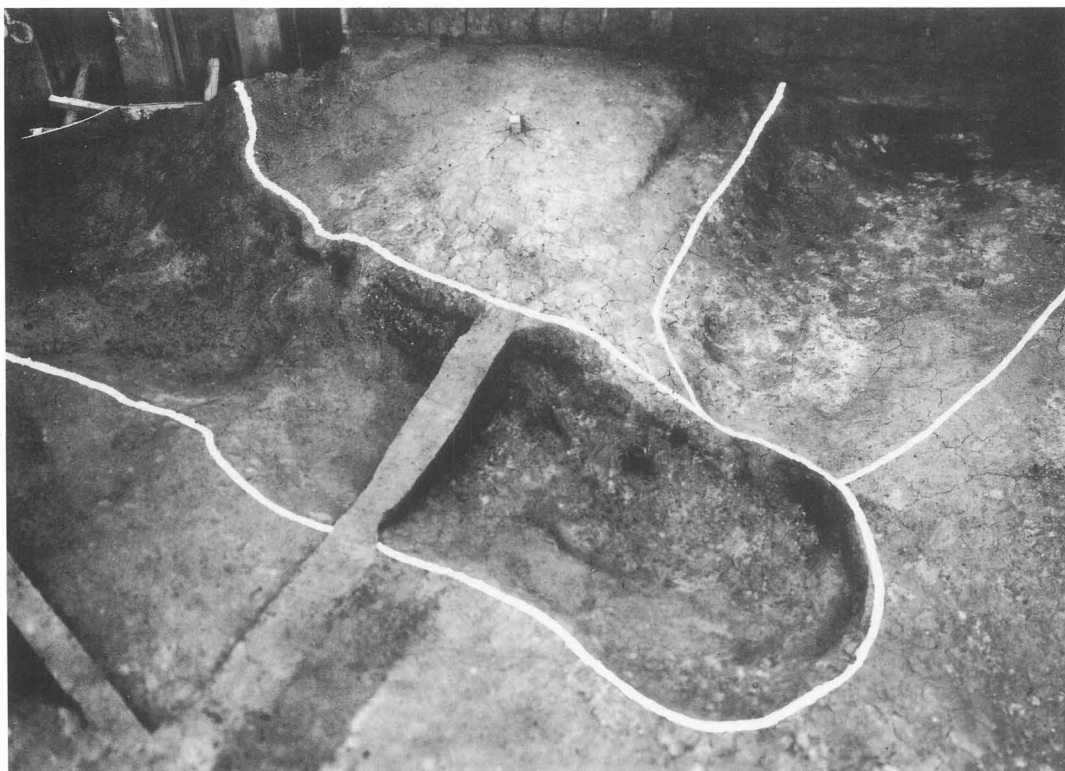
2. 土塚墓最終状況



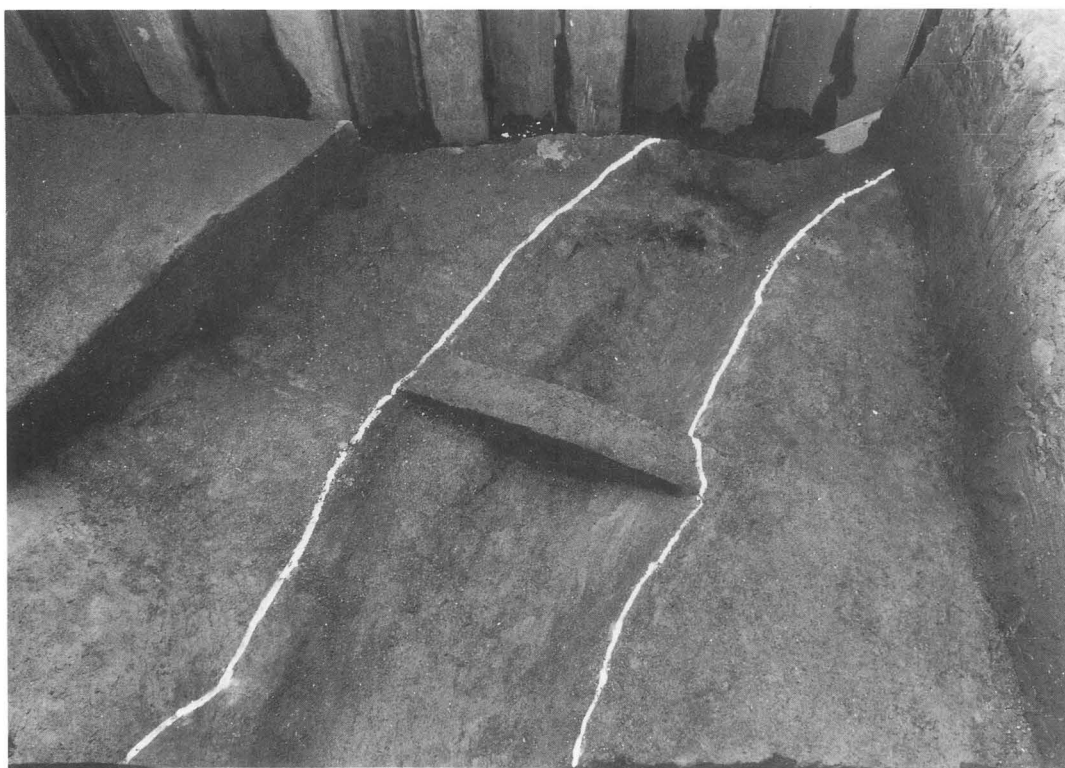
1. 溝12 (西より)



2. 溝12 (東より)



1. 溝15・16排土の凹み（南より）



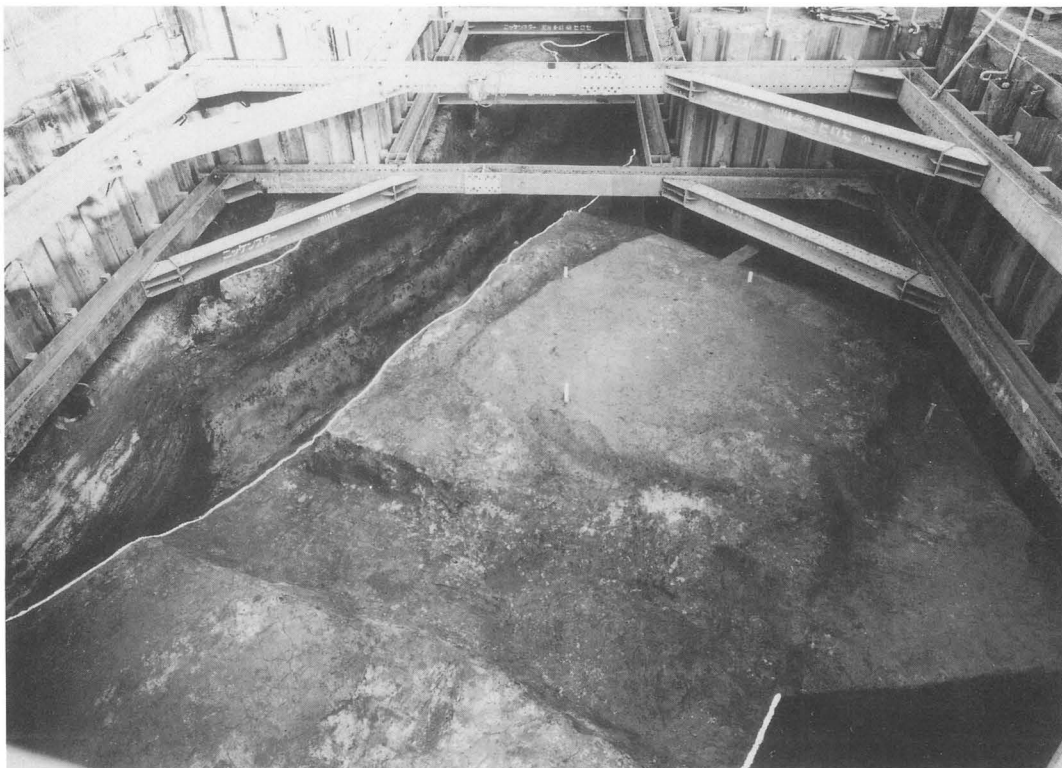
2. 溝14（北より）



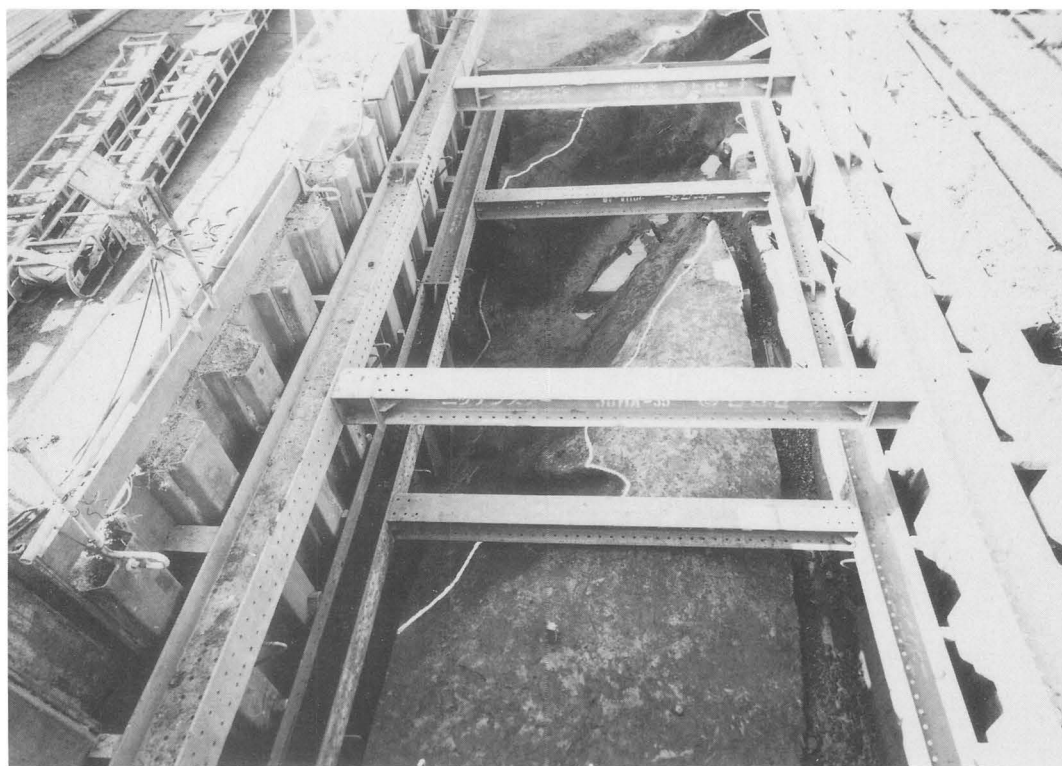
1. 溝15（西より）



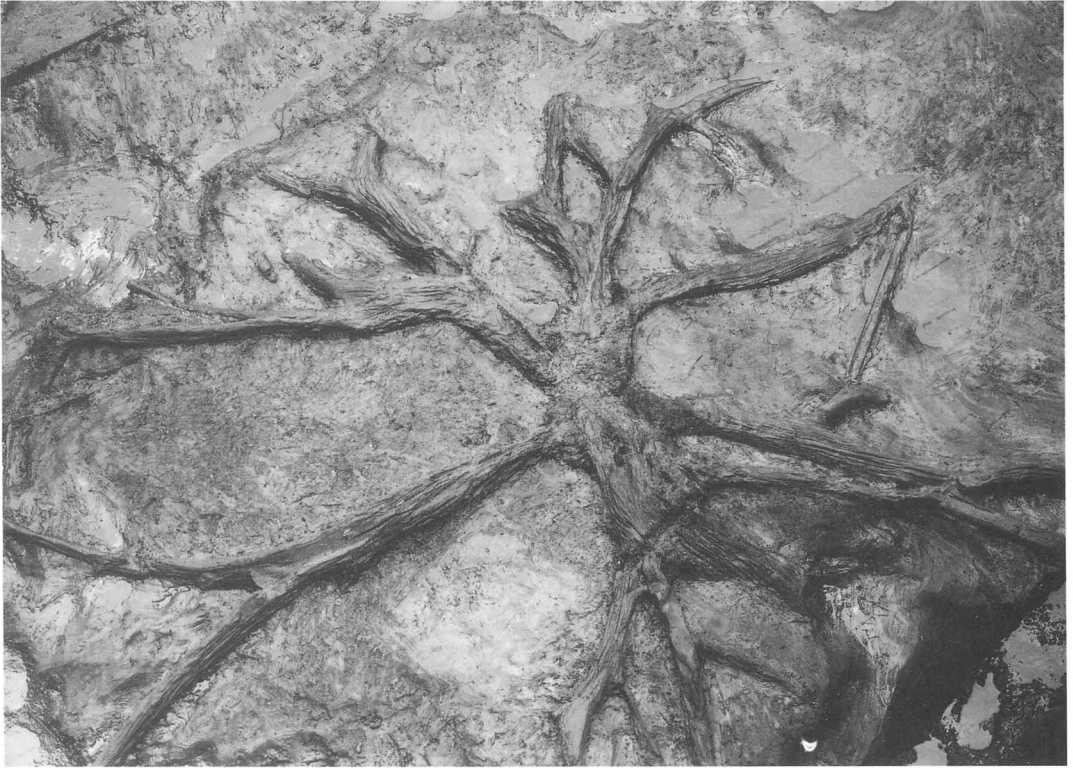
2. 溝15（東より）



1. 溝16（西より）



2. 溝16（東より）



1. E地区根株



2. 溝15肩の根株



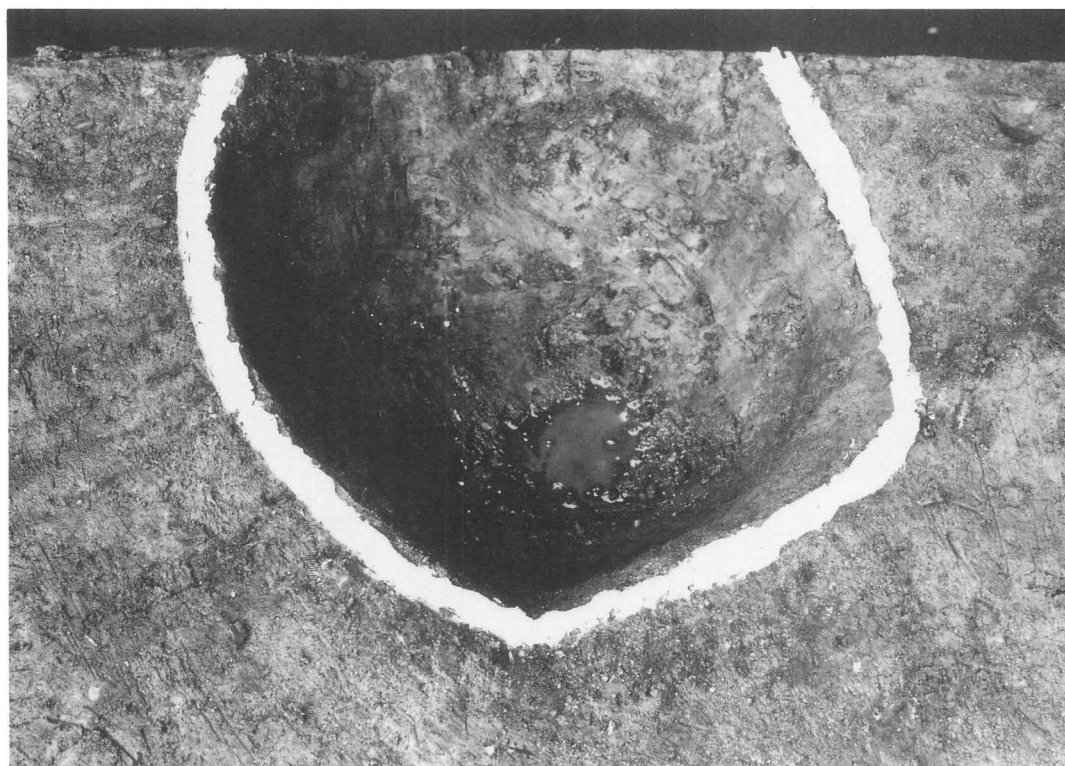
1. 溝16右岸の根株



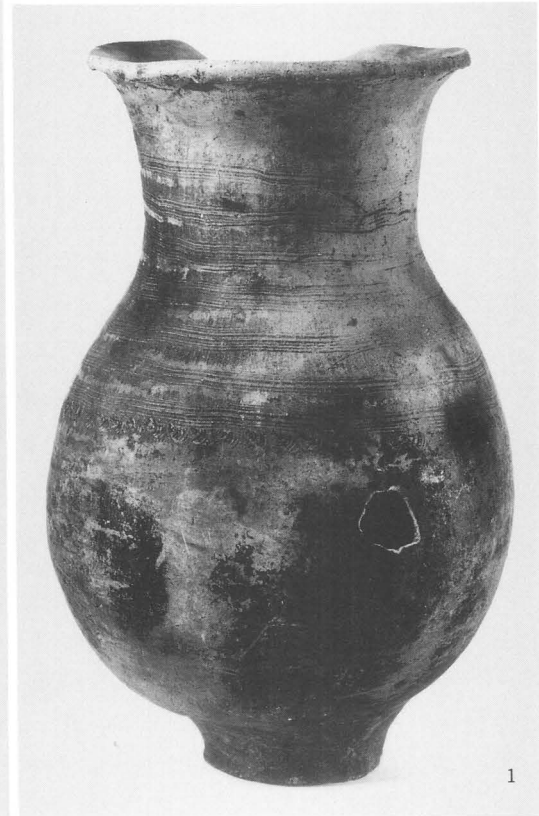
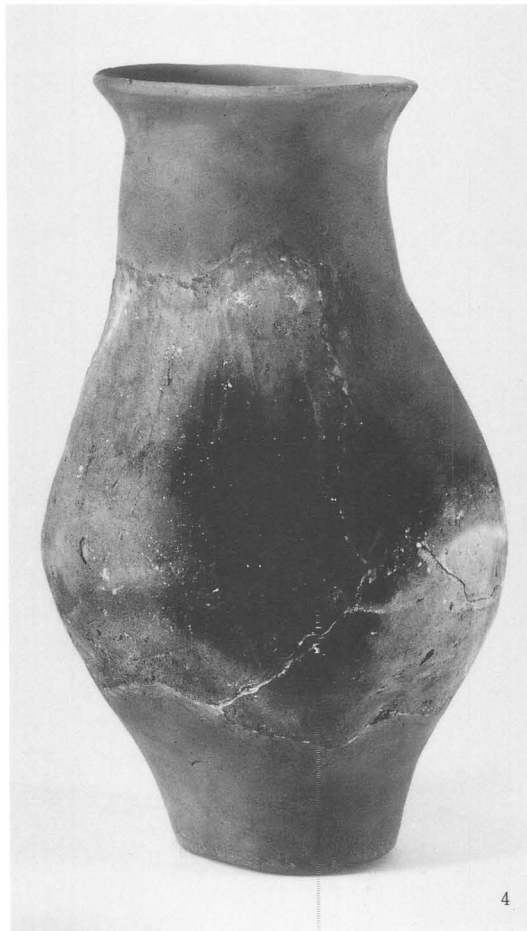
2. 溝16左岸の根株



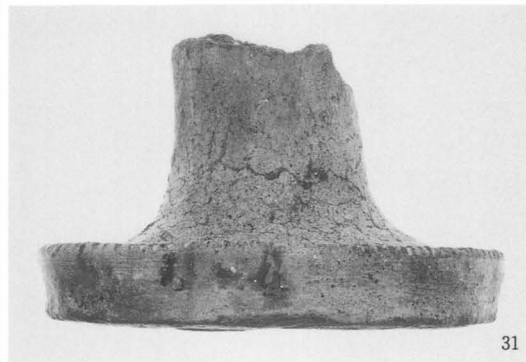
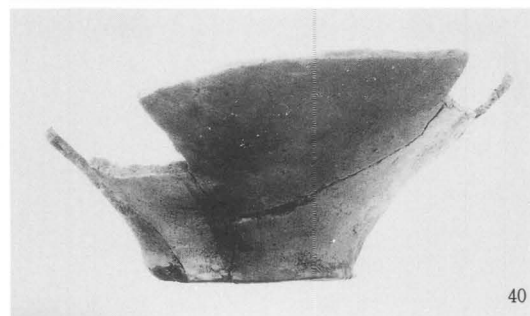
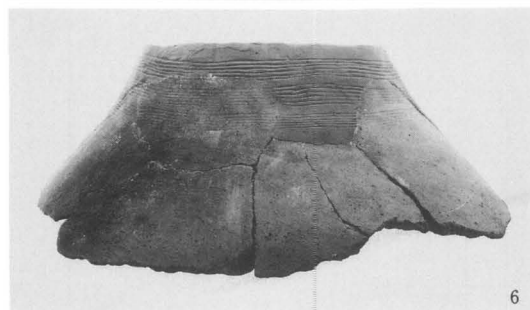
1. 土坑6

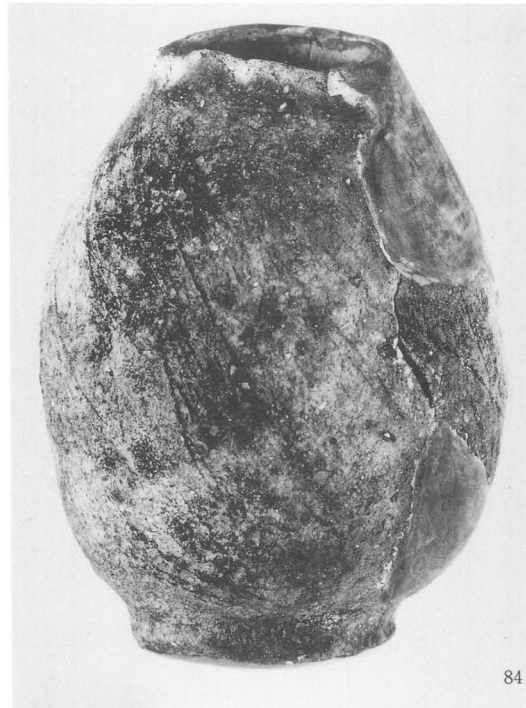
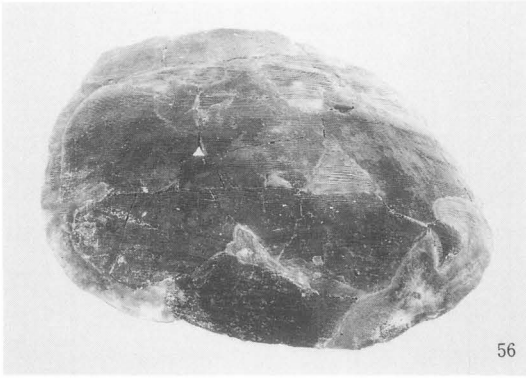


2. 土坑7

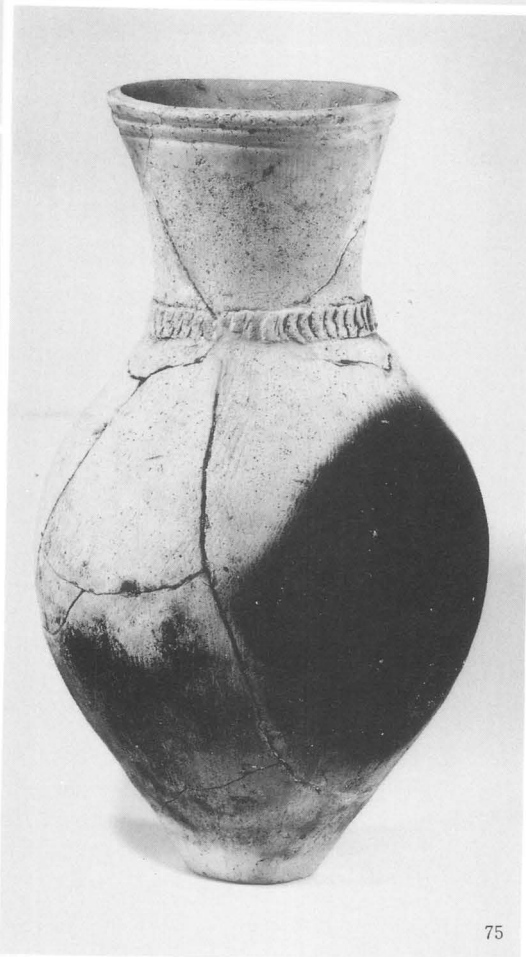
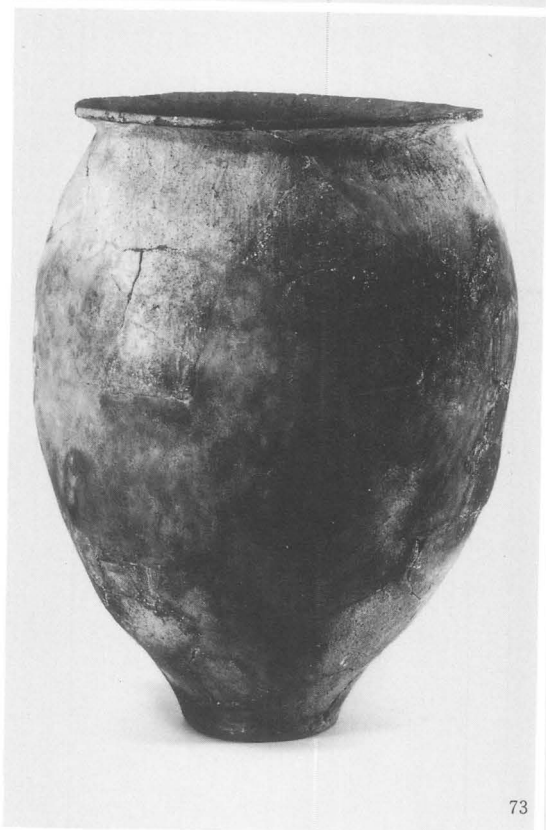
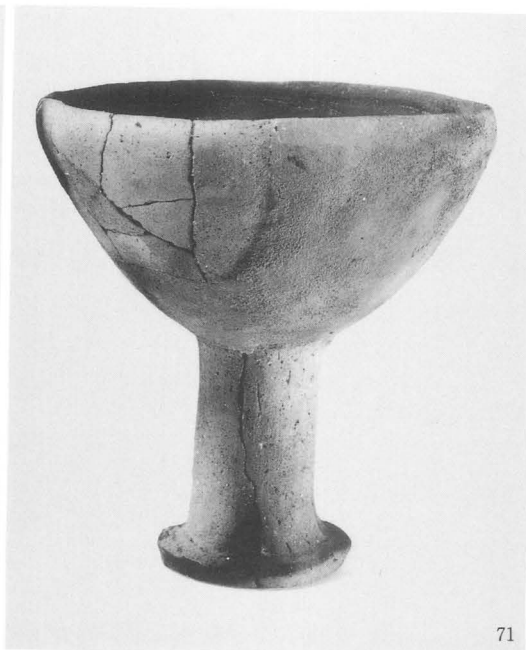
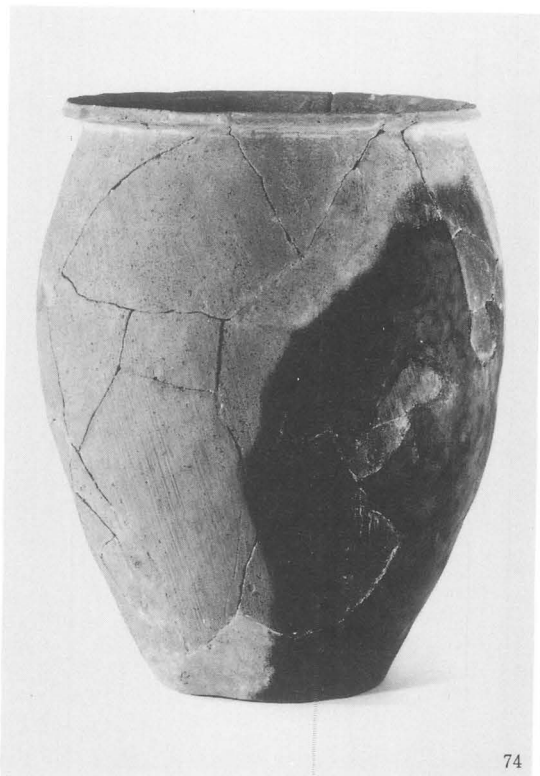


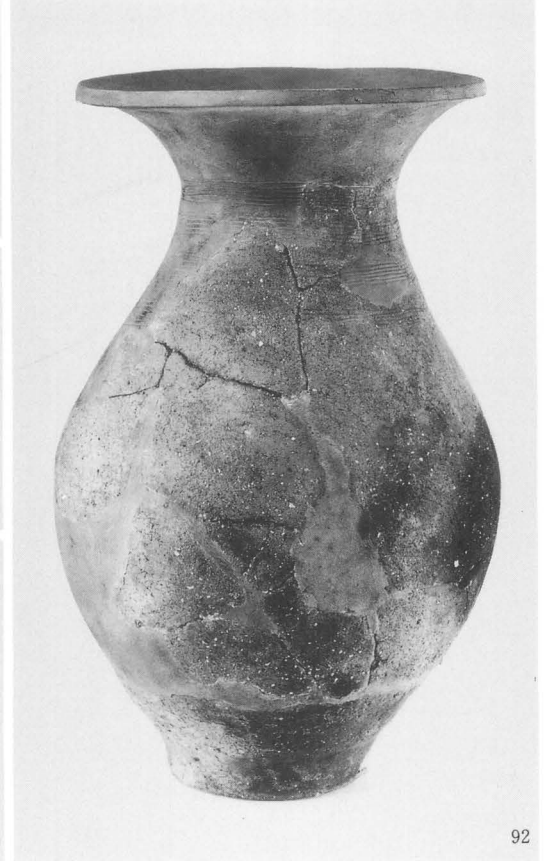
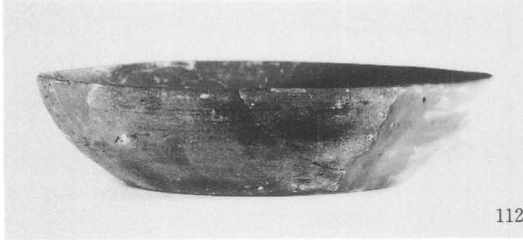
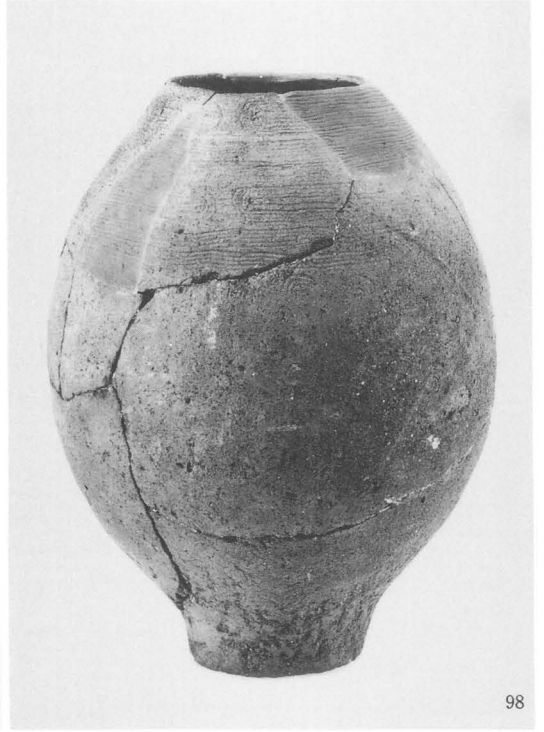
弥生土器





弥生土器

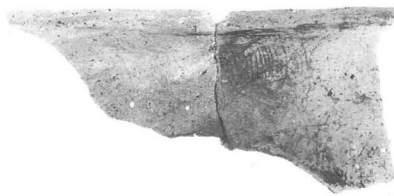




弥生土器・須恵器



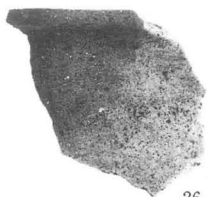
14



24



18



26



13

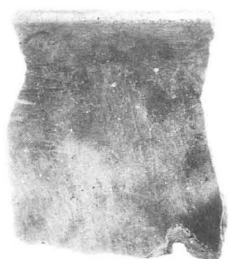
1. 弥生土器



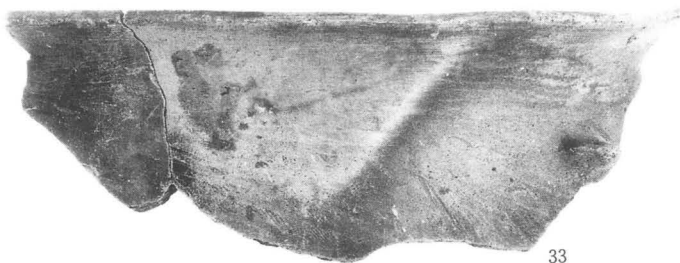
22



23

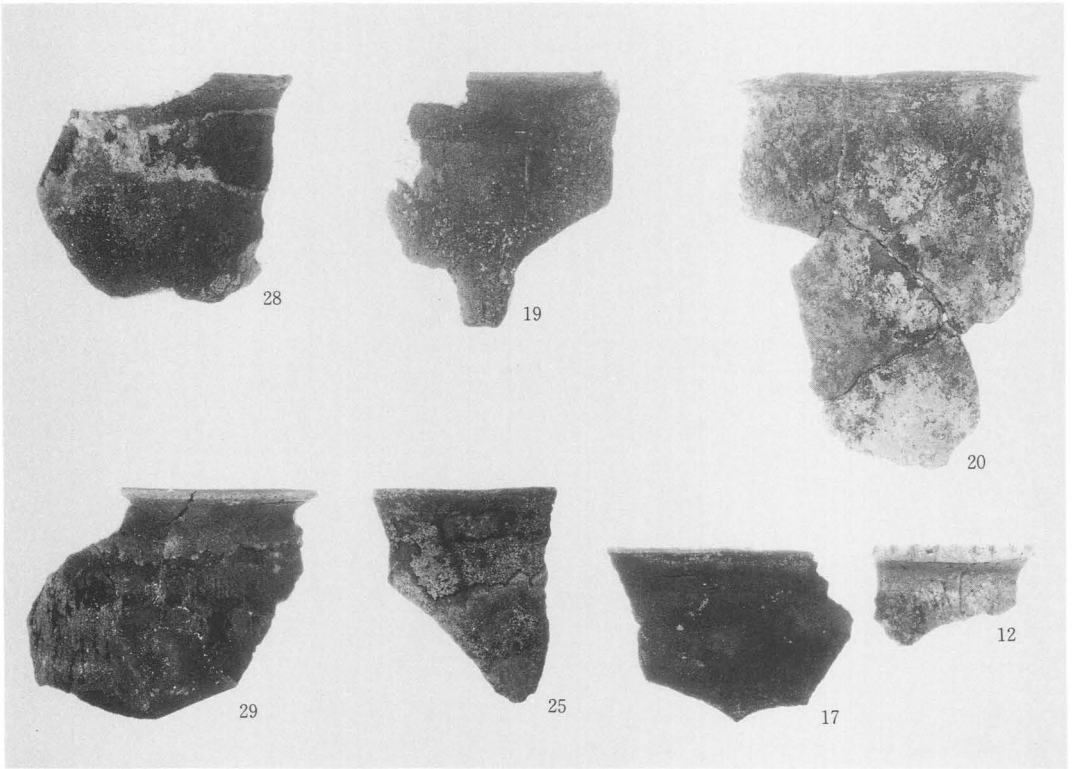


33'

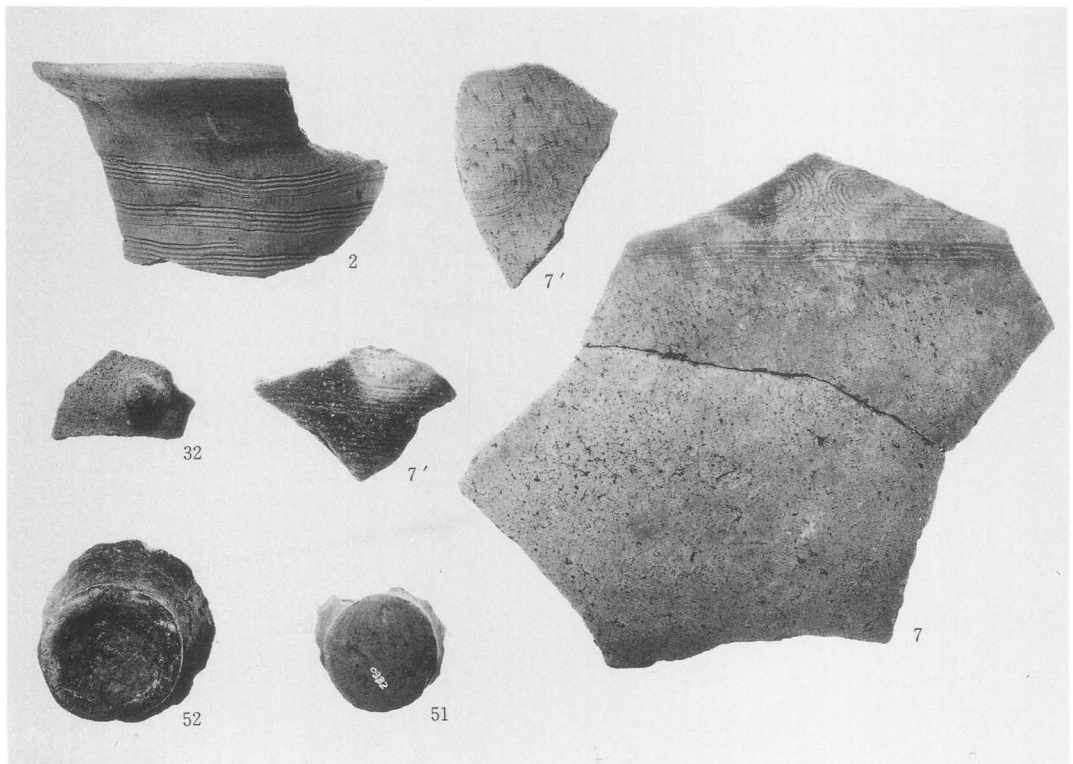


33

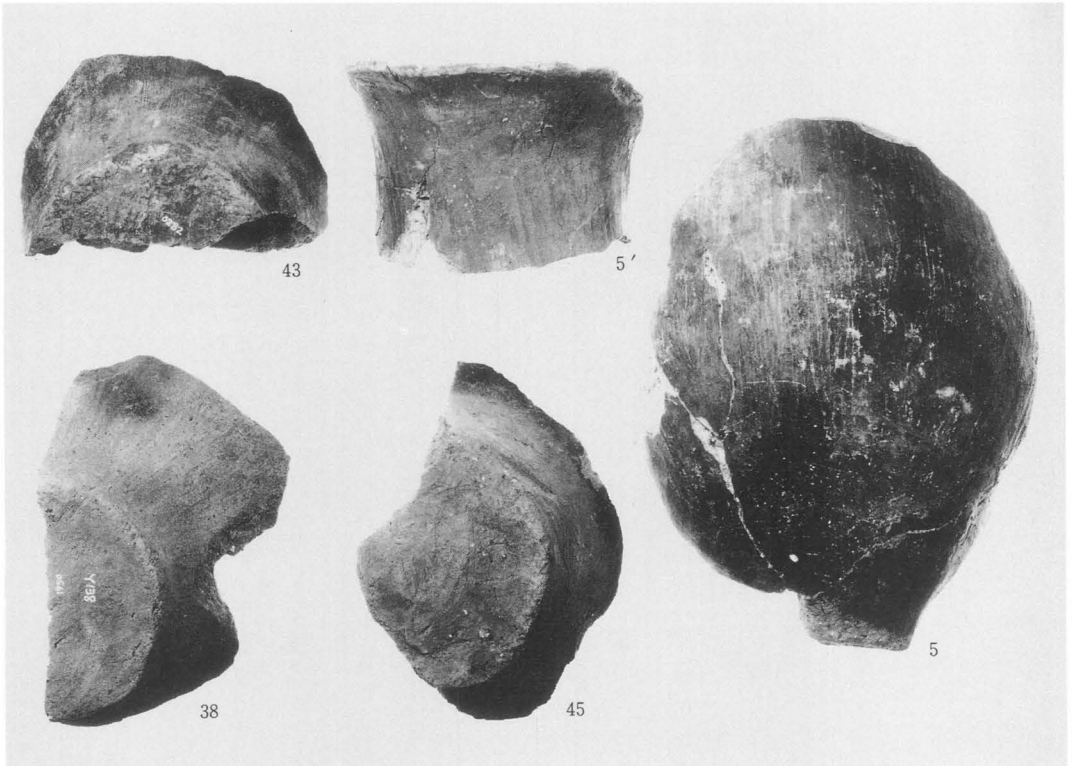
2. 弥生土器



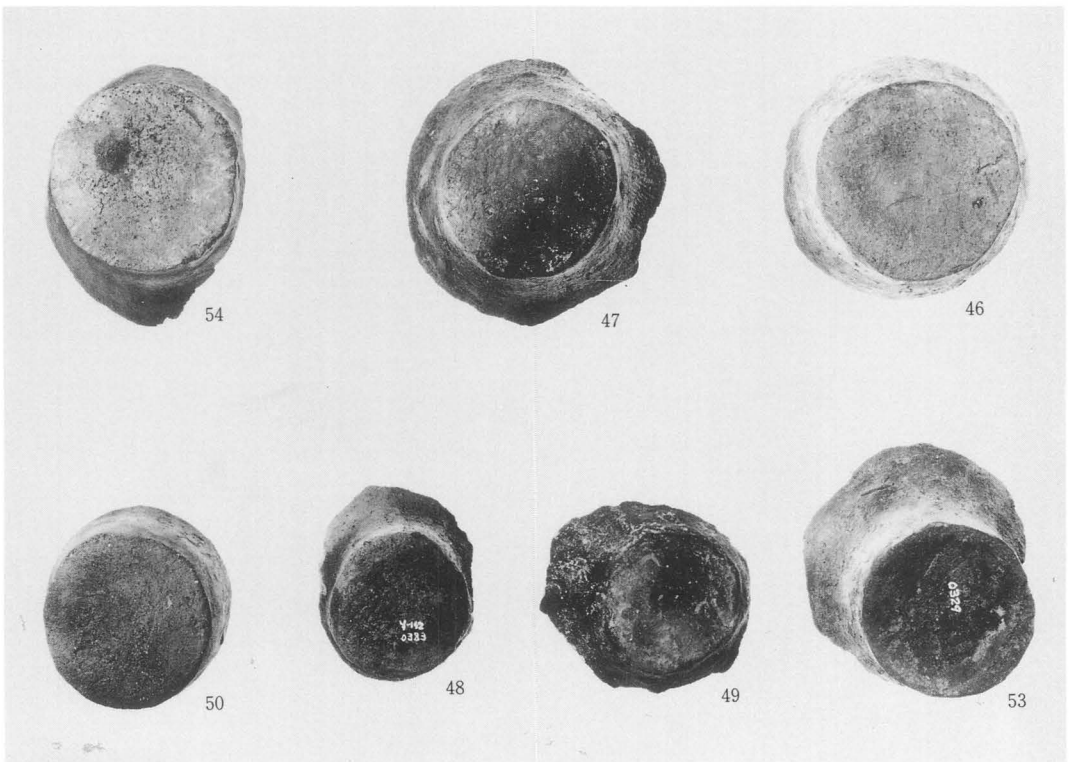
1. 弥生土器



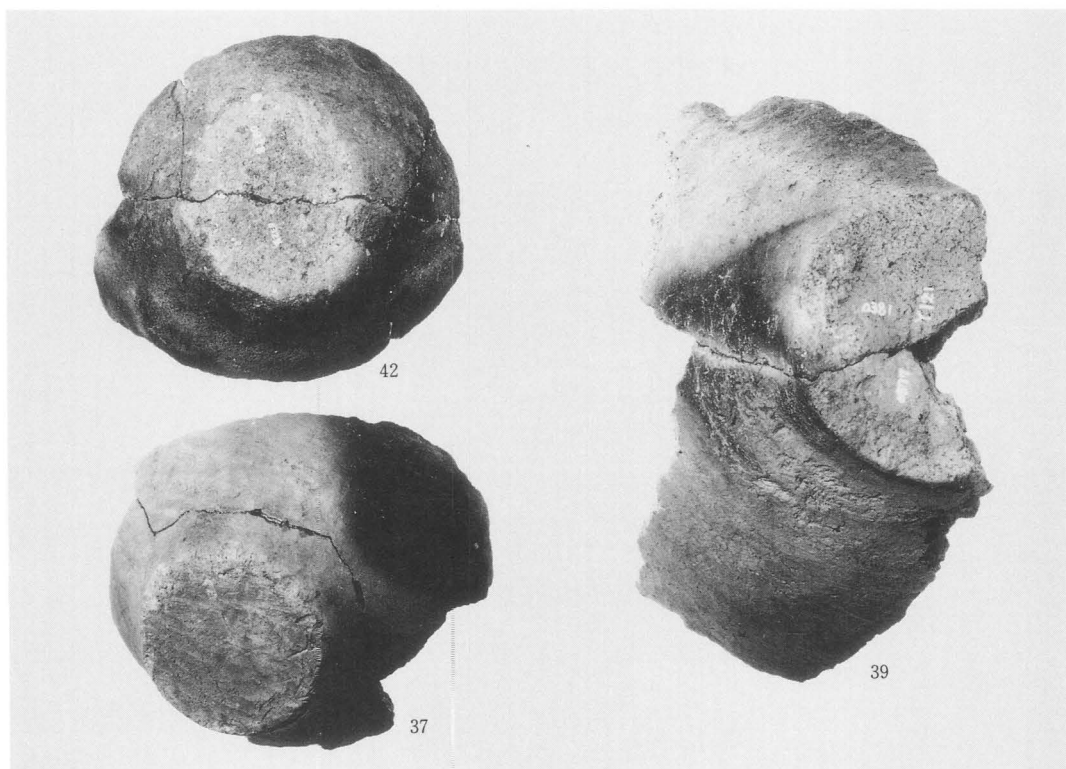
2. 弥生土器



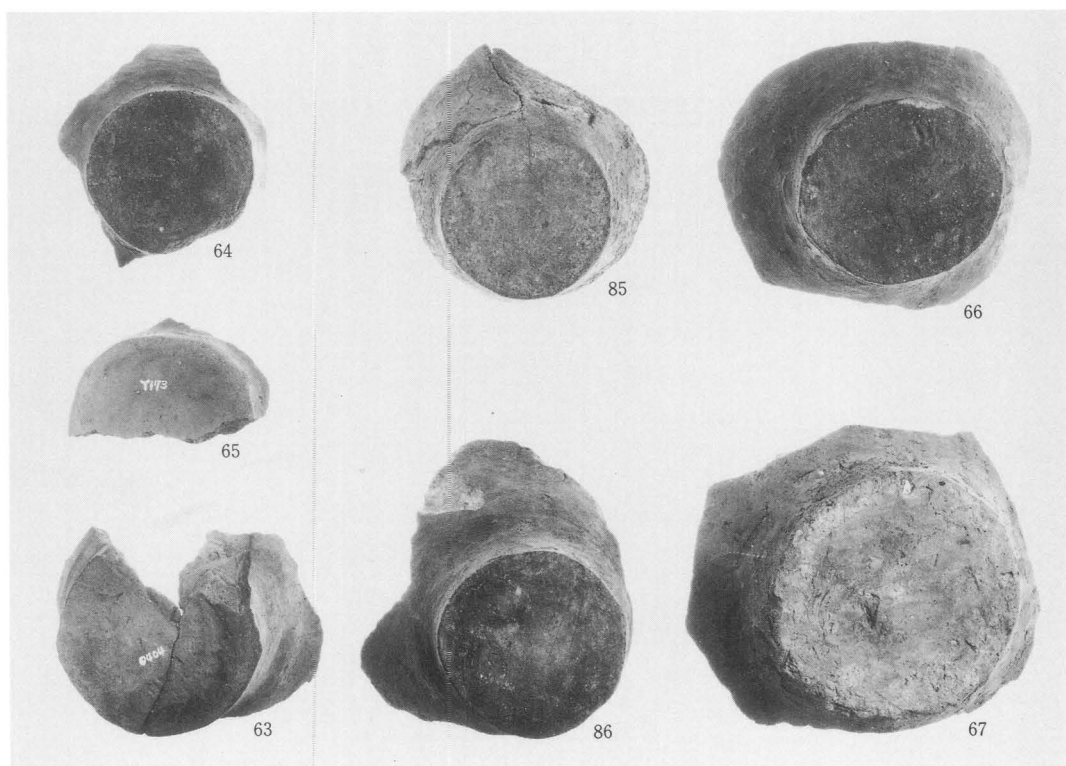
1. 弥生土器



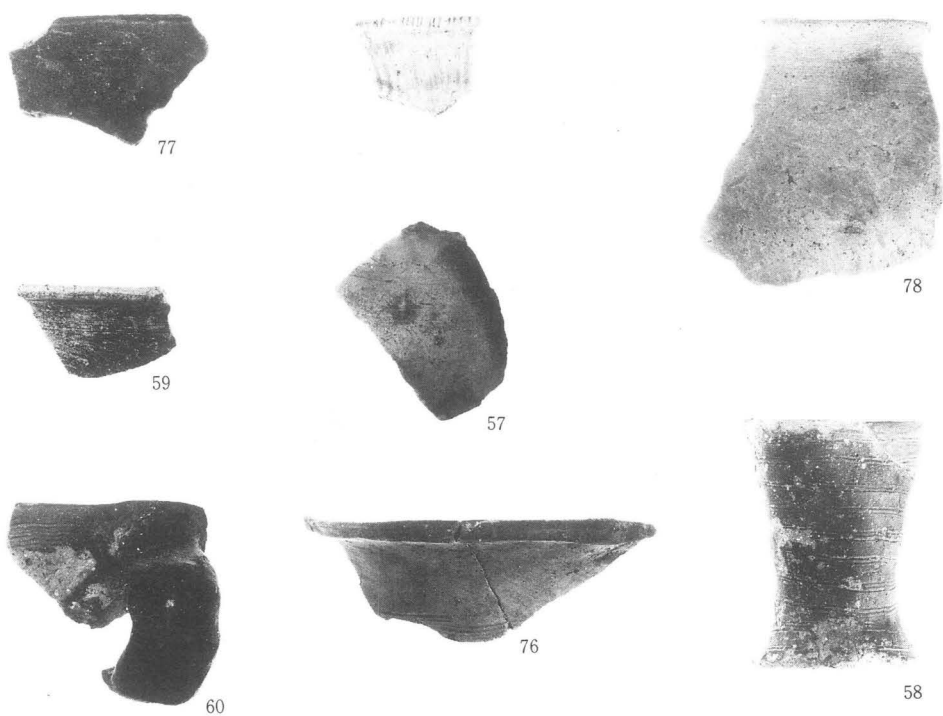
2. 弥生土器



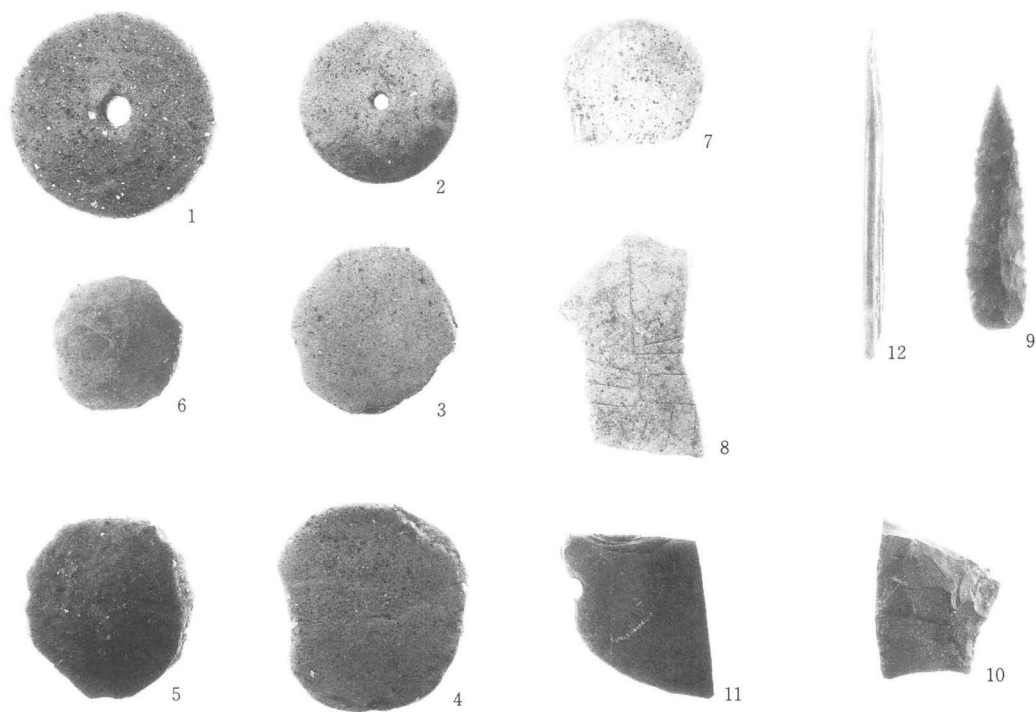
1. 弥生土器



2. 弥生土器



1. 弥生土器



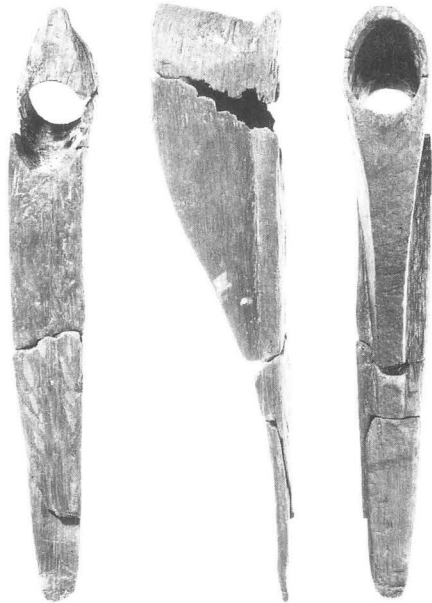
2. 土製品・骨製品・石器



7



5



3



8



6



9



10

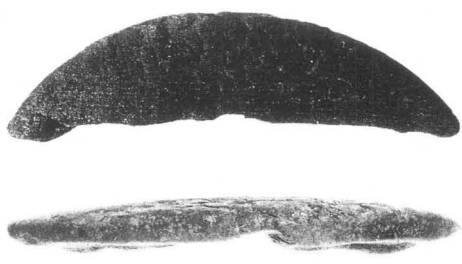


4

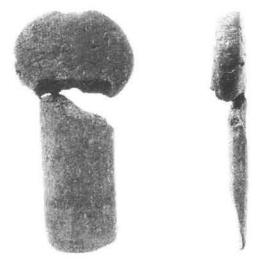


2

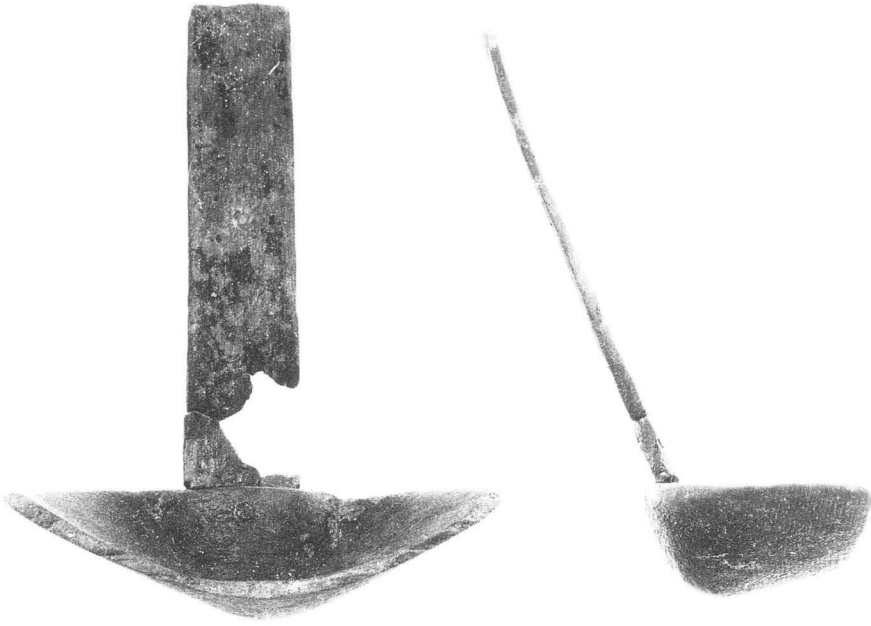
1



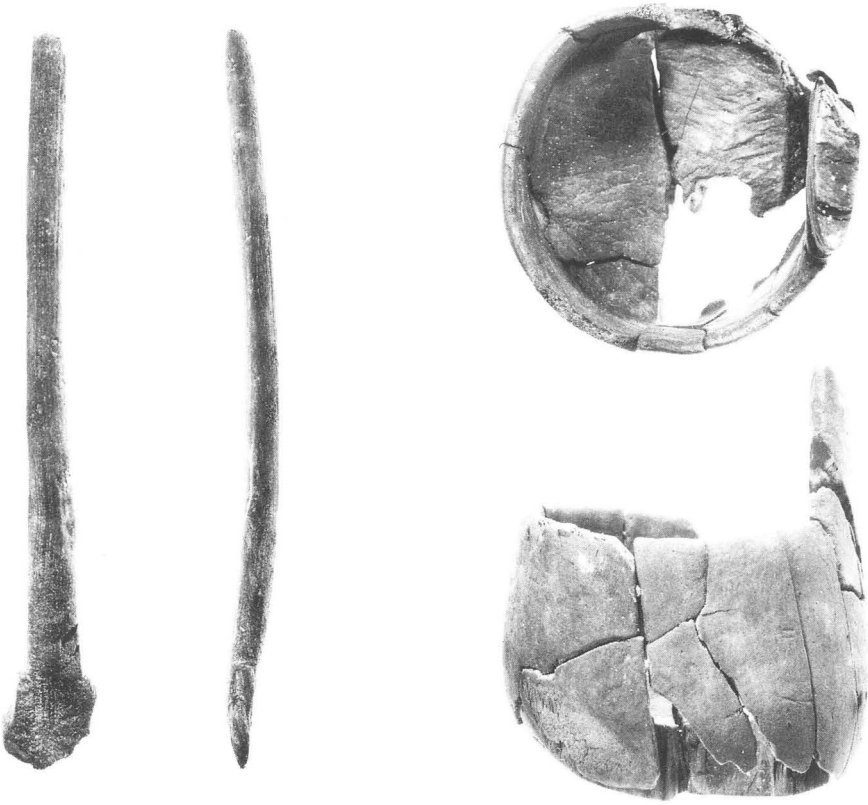
14



18



12



13

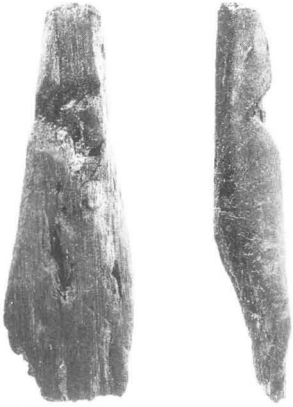
11



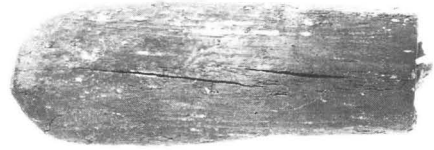
19



16



20



15



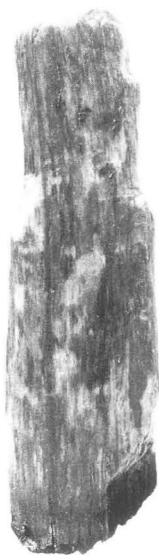
17



21



23



22

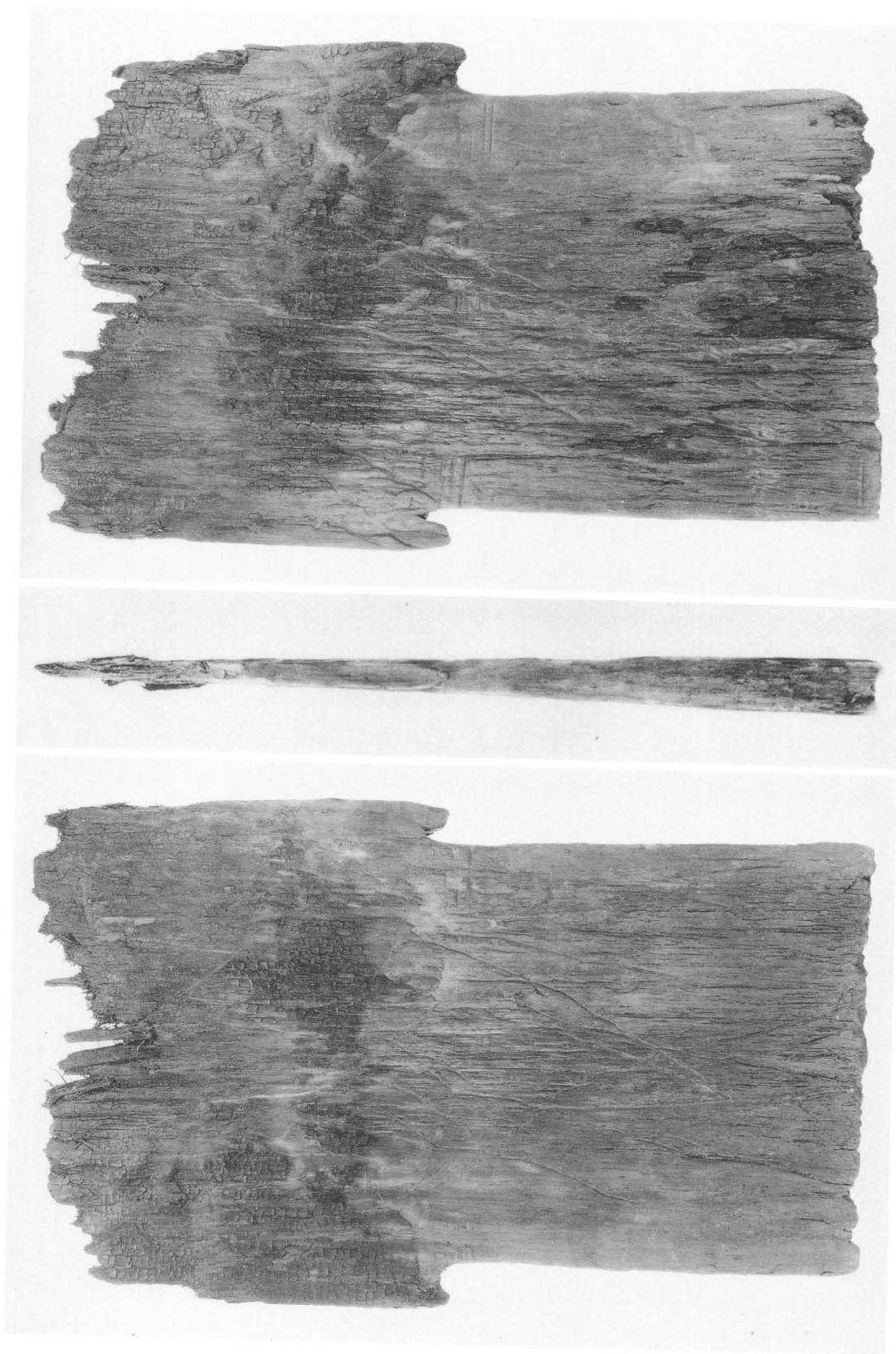


28



27

图版 57 遗物 木棺（第5号方形周沟墓第1主体部南小口板）

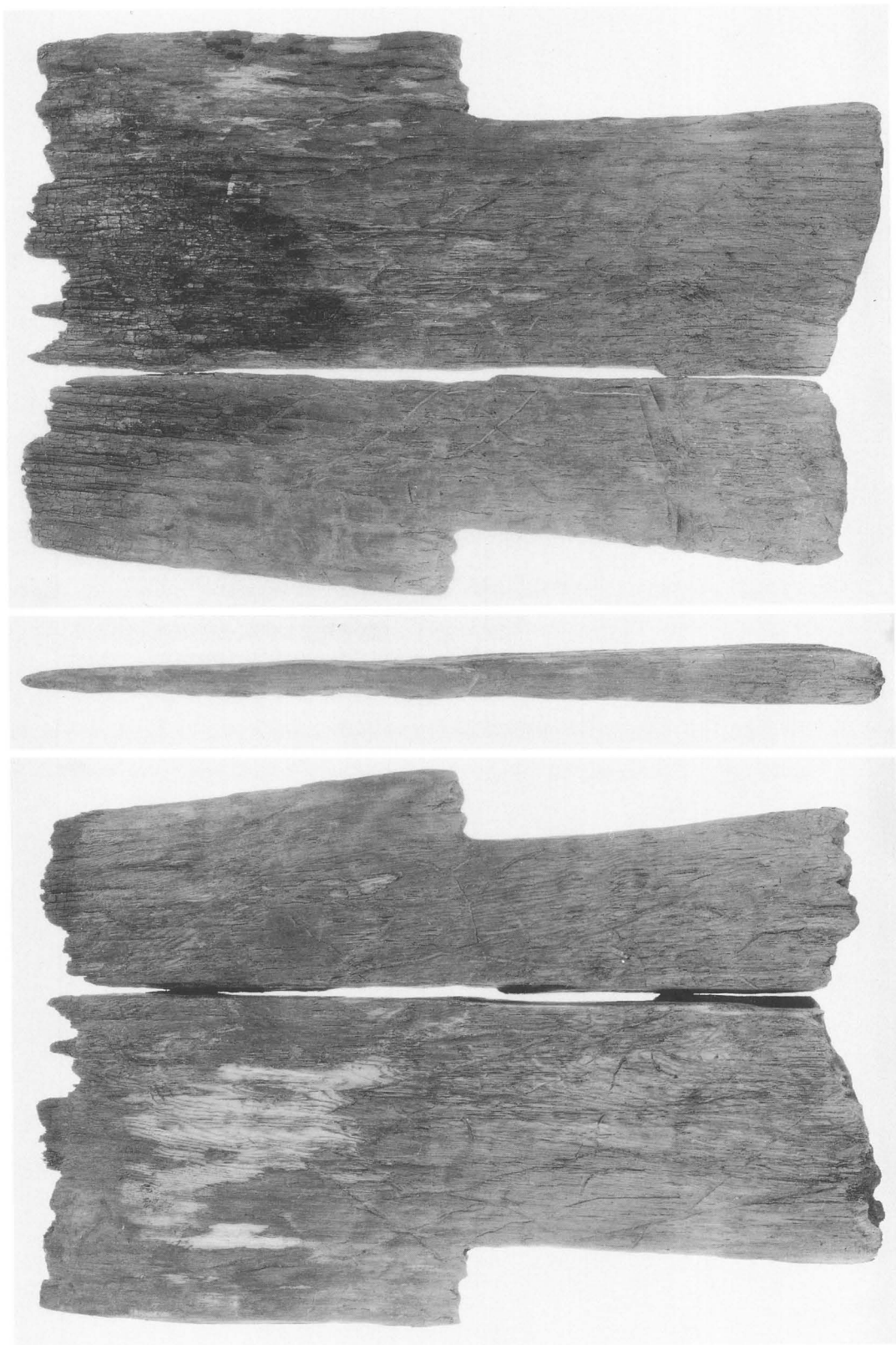


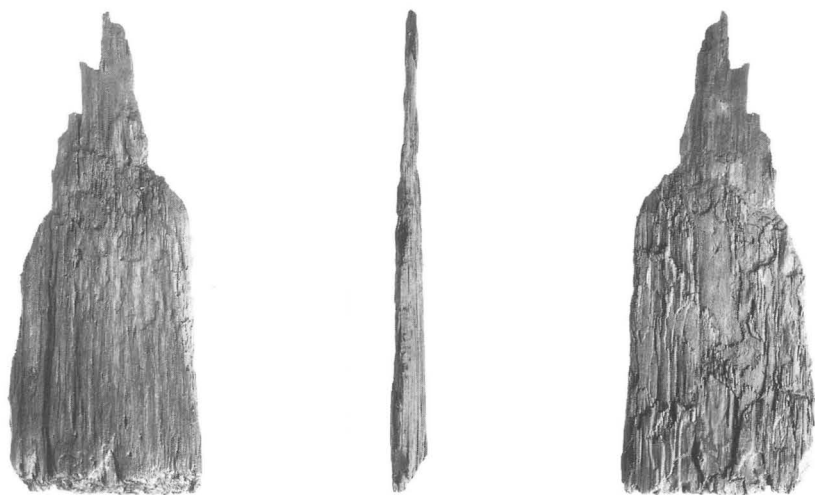
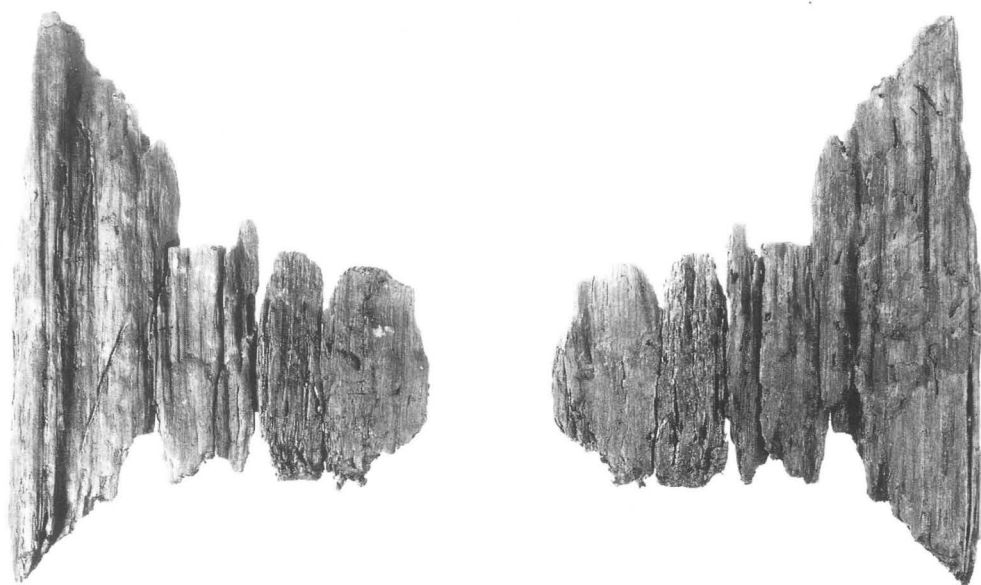
図版 58

遺物

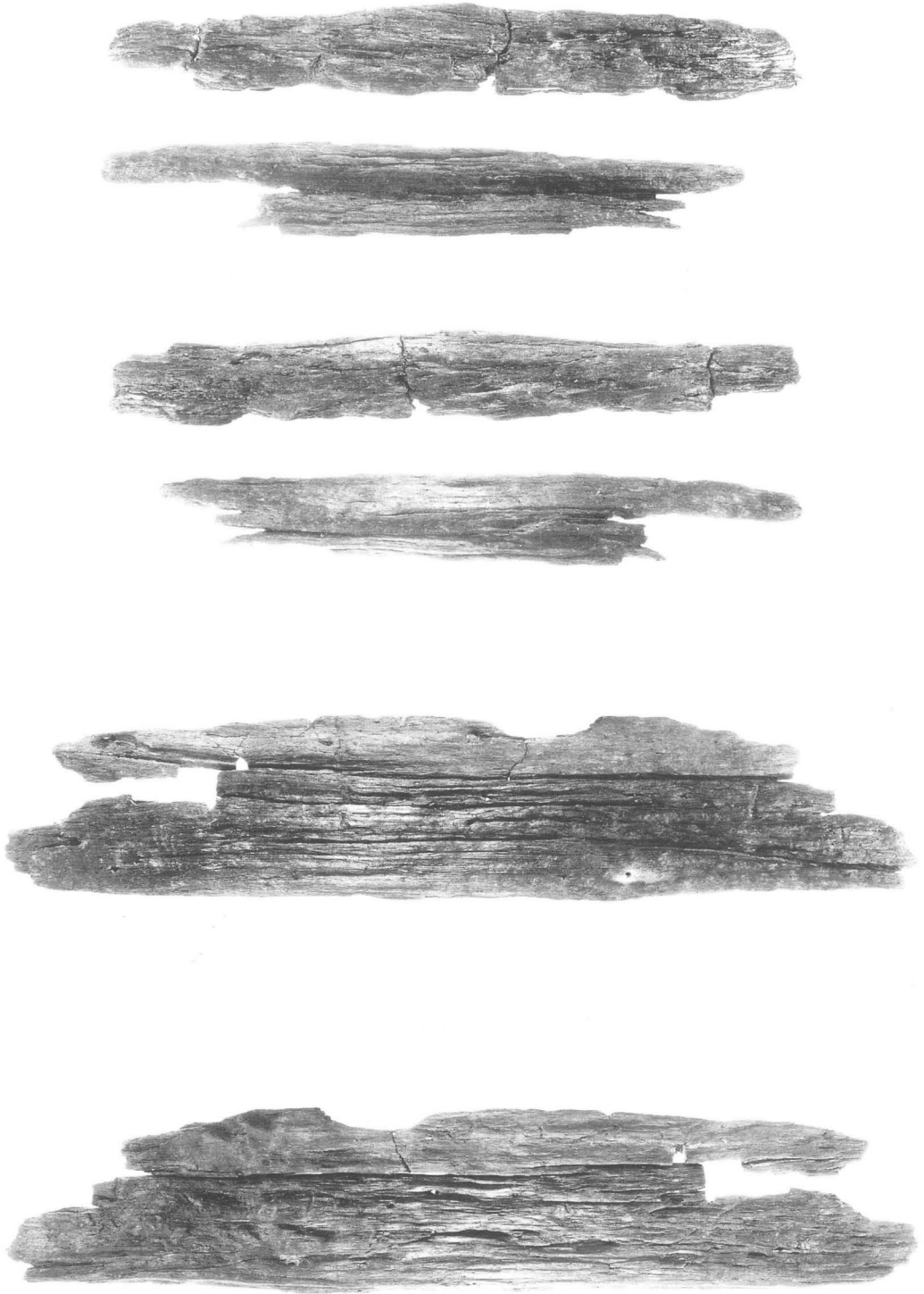
木棺

(第5号方形周溝墓第1主体部北小口板)

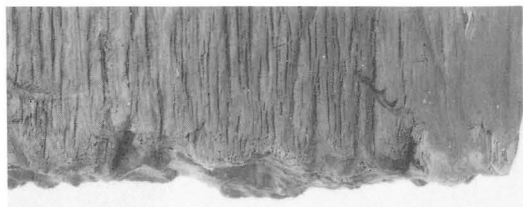
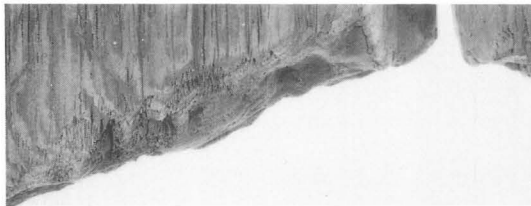
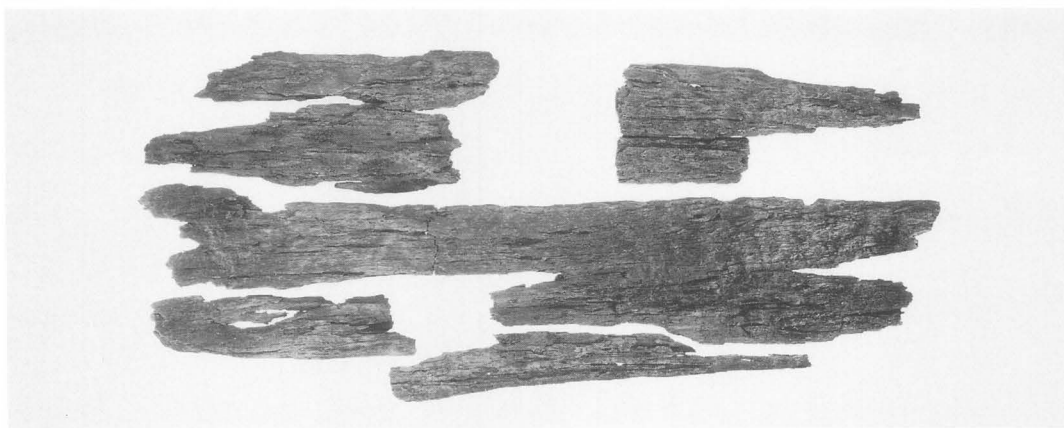




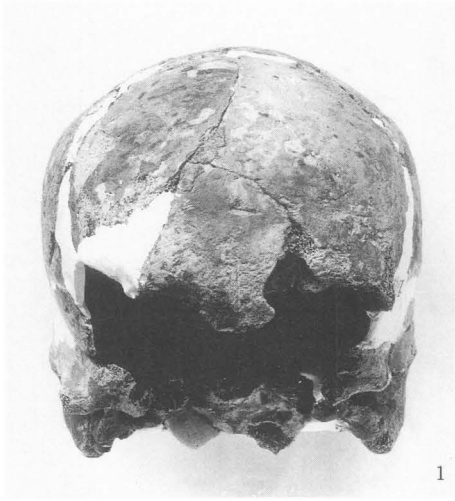
木棺（第2号方形周沟墓第2主体部上. 南小口板 下. 北小口板）



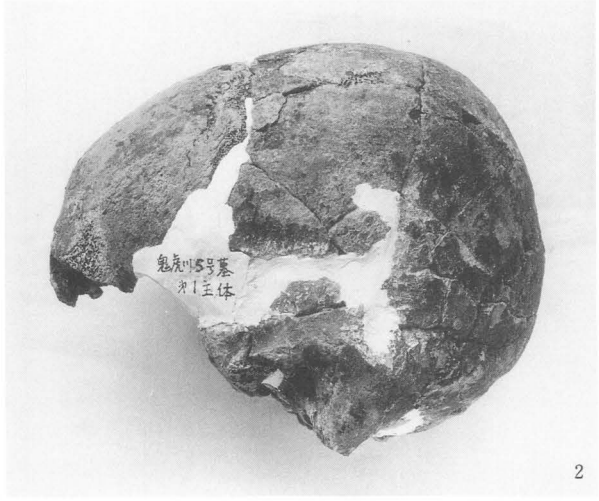
木棺（第2号方形周溝墓第2主体部上. 2点西側板 下. 2点東側板）



木棺（上. 2点第2号方形周溝墓第2主体部底板）
（下. 第5号方形周溝墓第1主体部板細部）



1



2



4



3

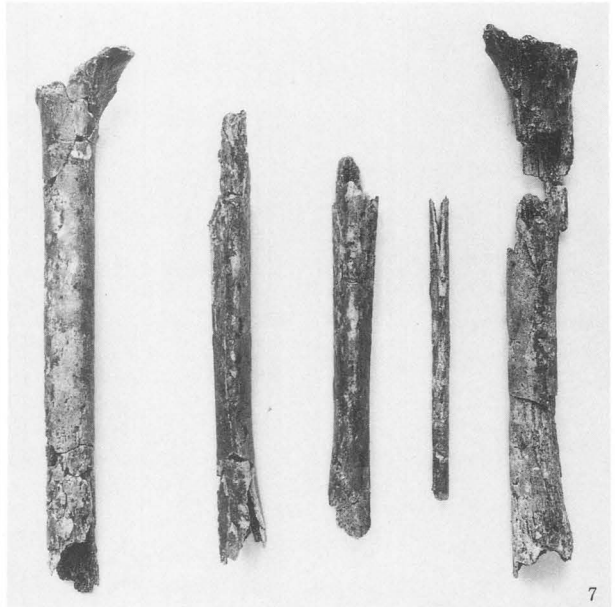
- 第5号方形周溝墓第1主体部成人骨
1. 頭蓋骨 前面観
 2. 頭蓋骨 左側面観
 3. 頭蓋骨 上面観
 4. 頭蓋骨 後面観
 5. 下顎骨 上面観



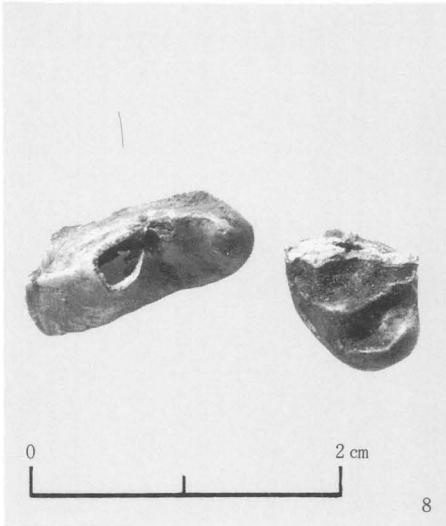
5



6



7

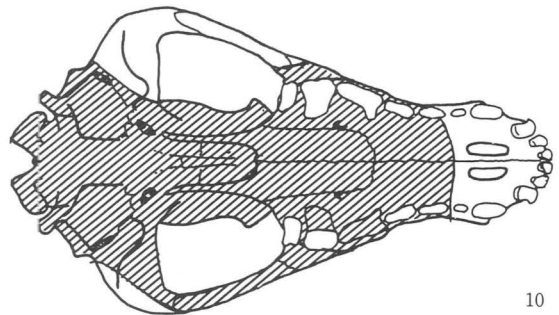


8

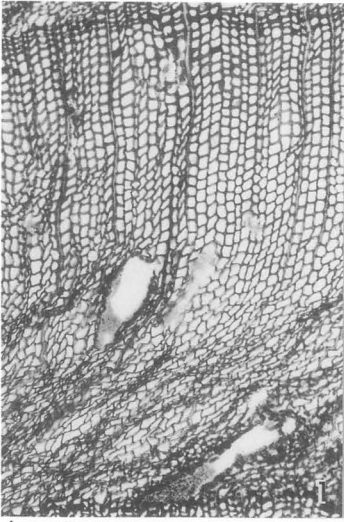


9

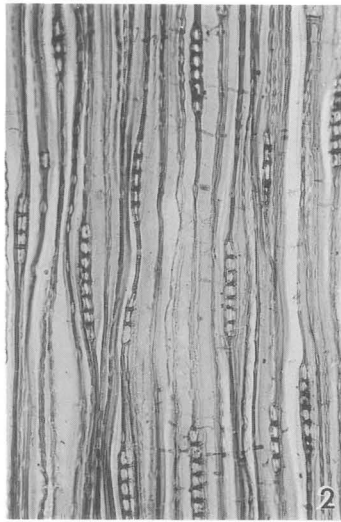
- 第5号方形周溝墓第1主体部成人骨
 6.(左より) 右上腕骨、右橈骨、右尺骨 前面観
 7.(左より) 右大腿骨、右脛骨、左脛骨、左腓骨、
 左大腿骨 前面観
 第2号方形周溝墓埋葬犬骨
 8.(左より) 左上顎第4前臼歯、左上顎第1後臼歯
 9. 頭骨底面 (写真中のスケールは1目盛2cm)
 10. 頭骨と歯の遺存部位 (斜線部)



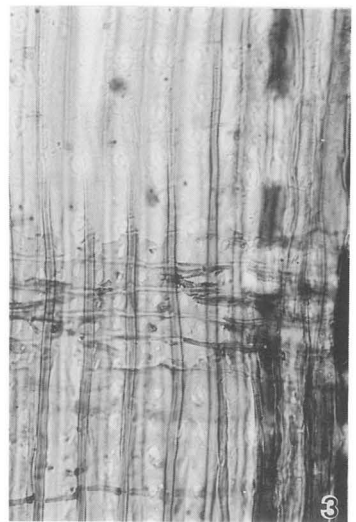
10



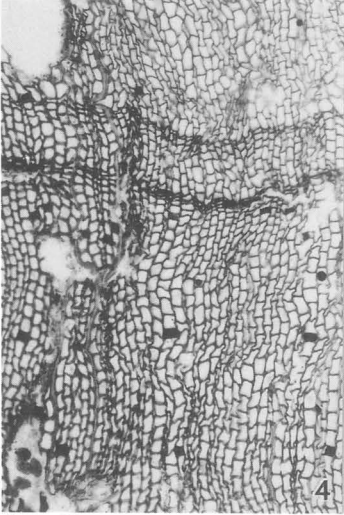
木口×80



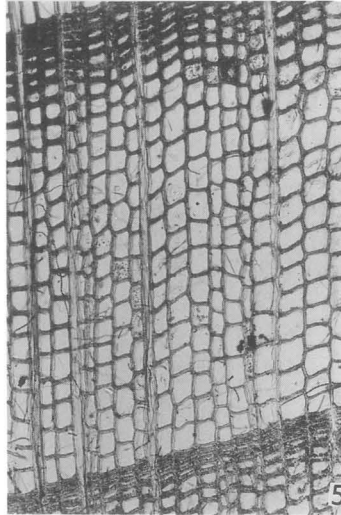
板目×160



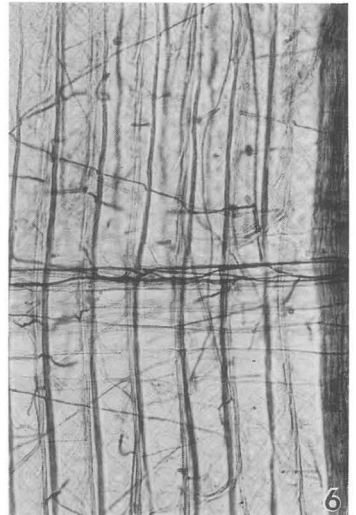
柁目×310



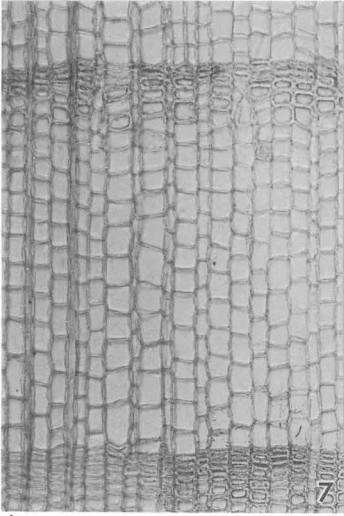
木口×80



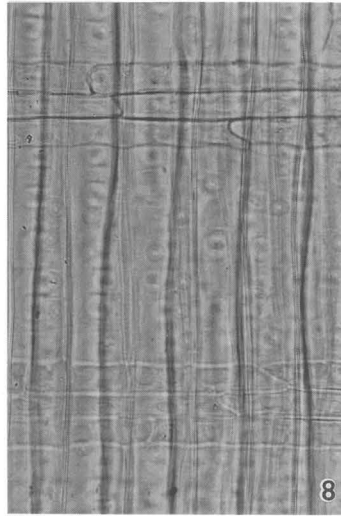
木口×80



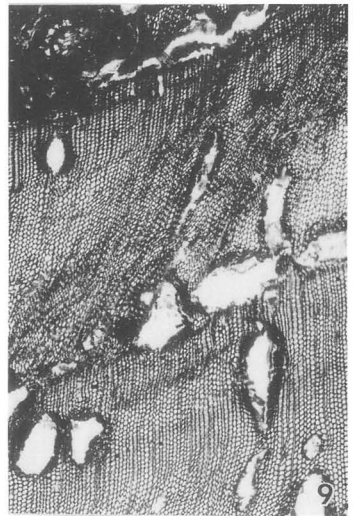
柁目×160



木口×80

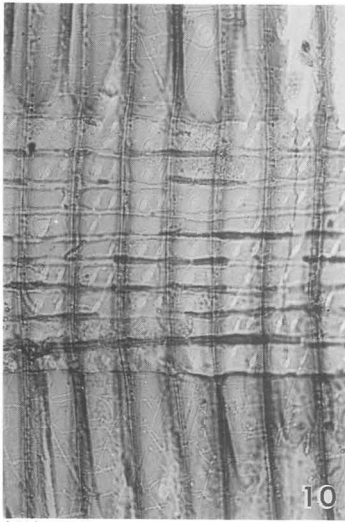


柁目×160

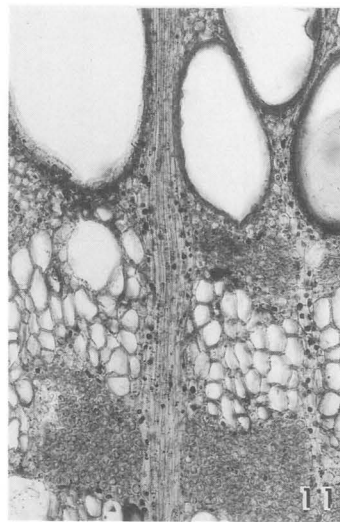


木口×30

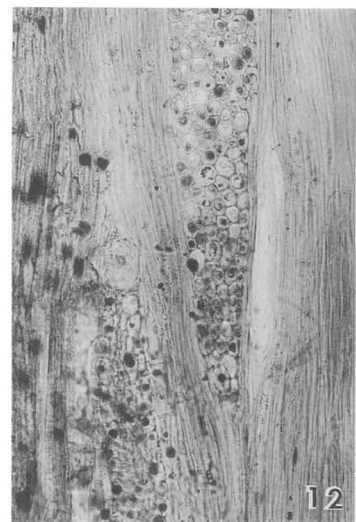
第5号方形周溝墓第1主体部(成人棺) 1~3(上蓋板 ヒノキ) 4(東側板 ヒノキ)
5・6(南小口板 コウヤマキ) 7・8(北小口板 コウヤマキ) 9(底板 ヒノキ)



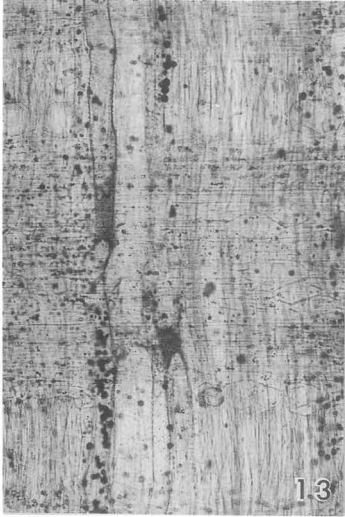
板目×310



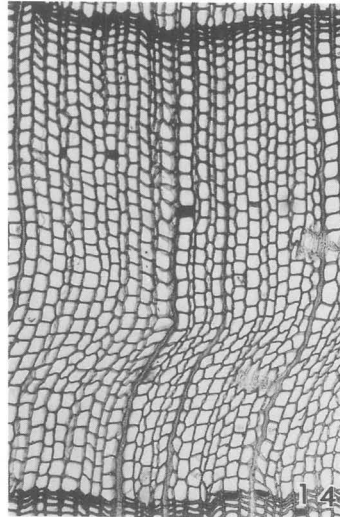
木口×80



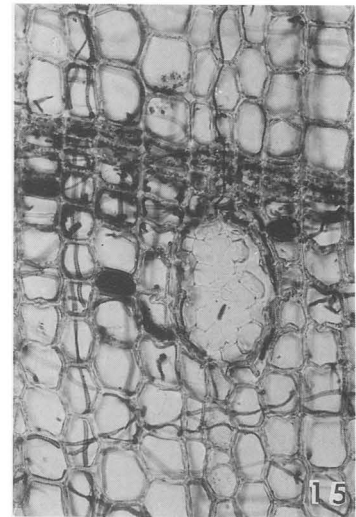
板目×160



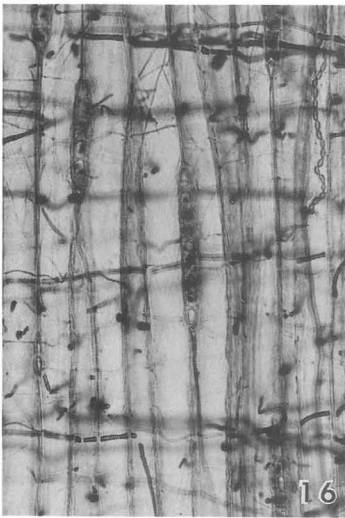
板目×80



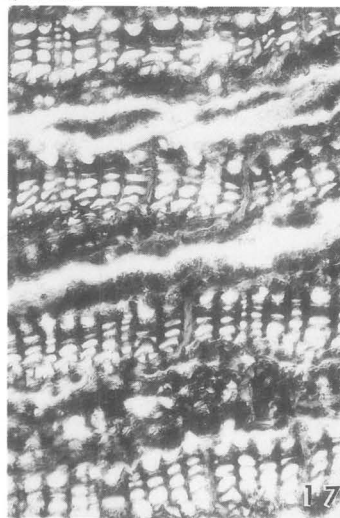
木口×80



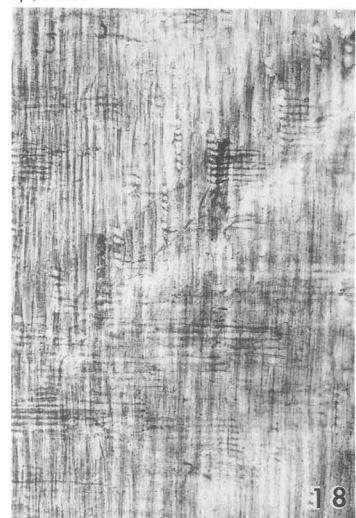
木口×160



板目×160

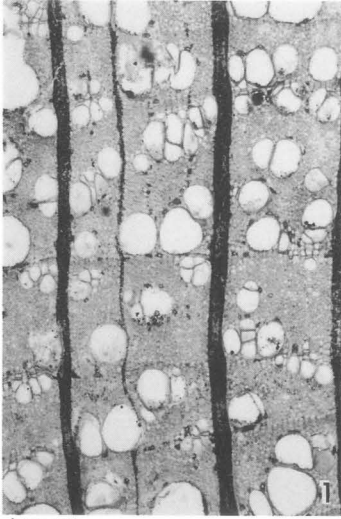


木口×160

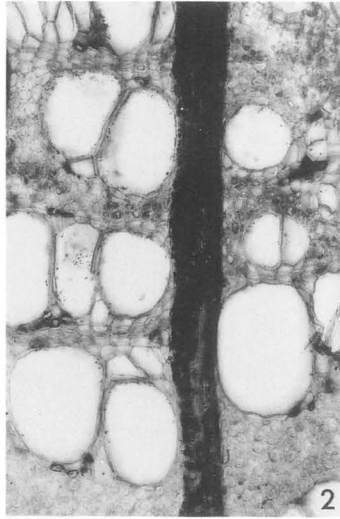


板目×80

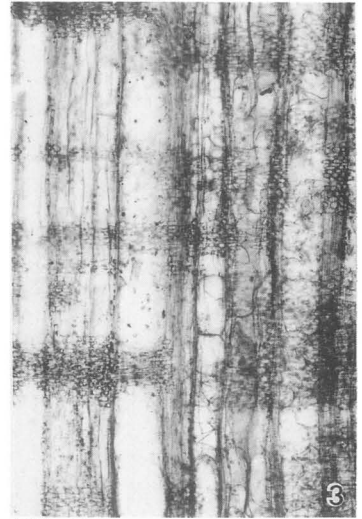
第2号方形周溝墓第2主体部 (小児骨) 10 (上蓋板 ヒノキ) 1~13 (西側板 ケヤキ) 14 (東側板 ヒノキ)
15・16 (南小口板 ヒノキ) 第5号方形周溝墓第2主体部 (小児棺) 17・18 (上蓋板 ヒノキ)



木口×30



木口×80



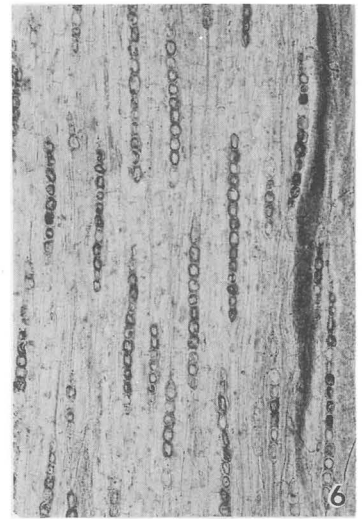
根目×30



板目×30



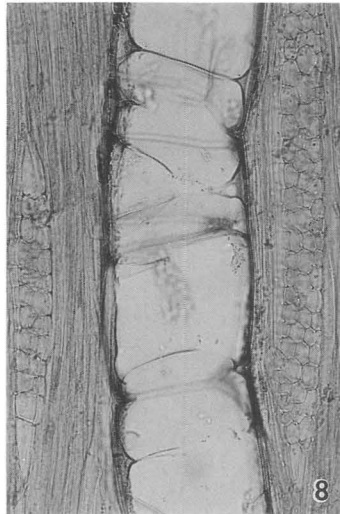
木口×30



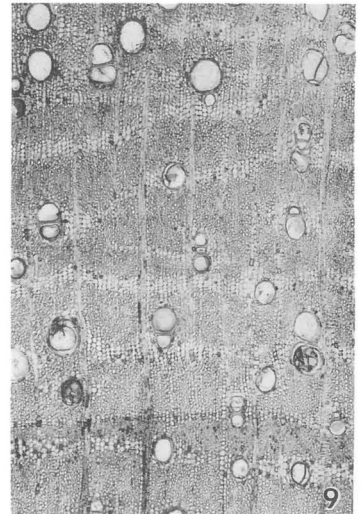
板目×80



木口×80



板目×160

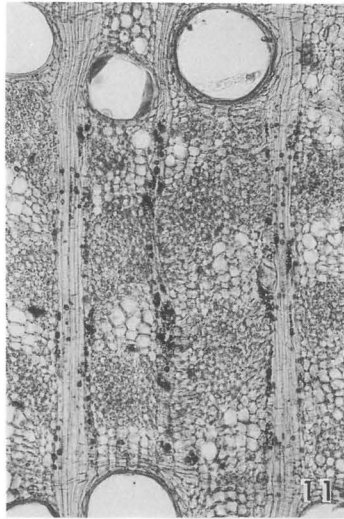


木口×30

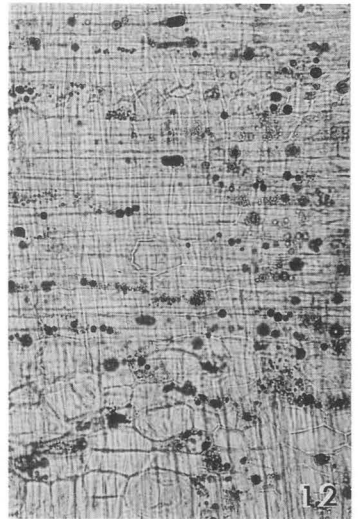
1～4 (資料No.0 イヌエンジュ属) 5・6 (資料No.1 カシ類)
7・8 (資料No.2 ヤマグワ) 9 (資料No.3 ムクノキ)



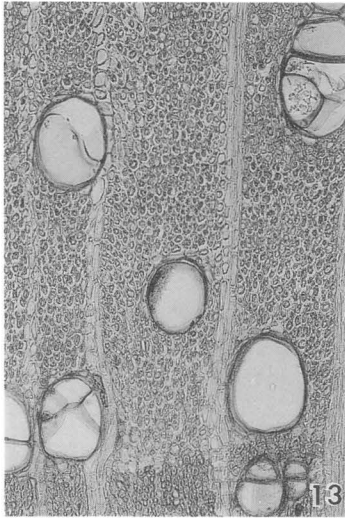
板目×80



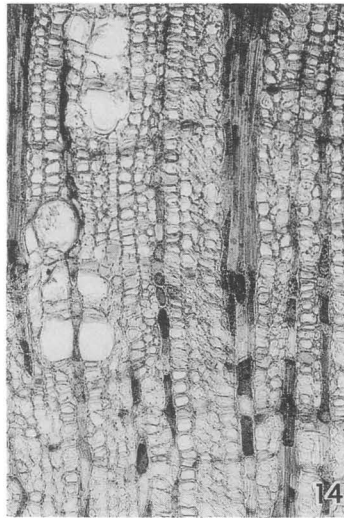
木口×80



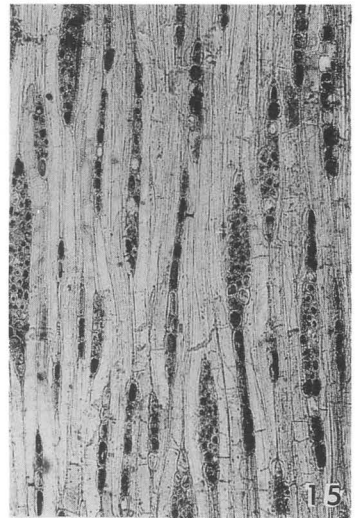
板目×160



木口×80



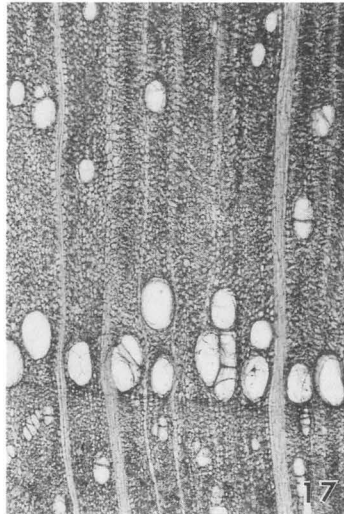
木口×80



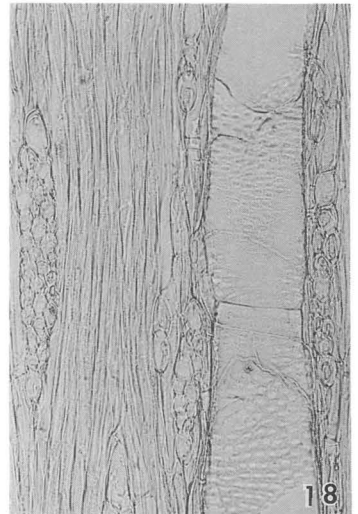
板目×80



板目×160



木口×30



板目×160

9 (資料No.3 ムクノキ) 11・12 (資料No.4 ケマキ) 13 (資料No.7 ヤマグワ)
 14・15 (資料No.8 クマシデ属) 16 (資料No.10 ヤマグワ) 17・18 (資料No.11 ヤマグワ)

鬼虎川遺跡第12次発掘調査報告

1987年 3 月31日

発 行 財団法人 東大阪市文化財協会
東 大 阪 市 教 育 委 員 会

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所